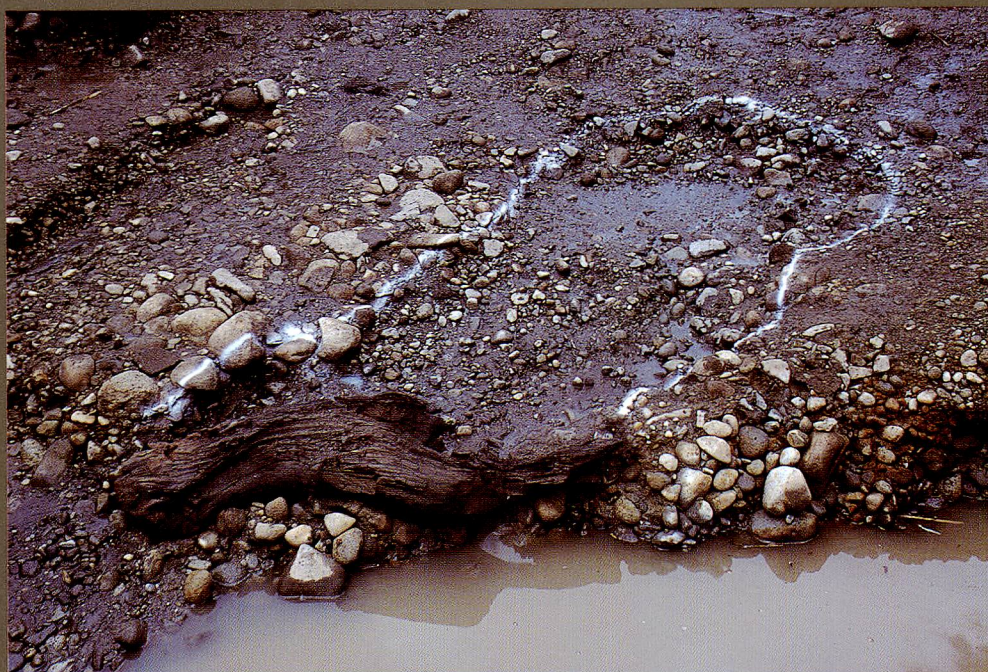


新潟県巻町

御井戸遺跡Ⅱ

— 2003年度確認調査の概要 —



2004年

巻町教育委員会

序 文

巻町内には、角田山の山裾を中心に120箇所ほどの遺跡が分布しています。山麓南東部に位置する御井戸は代表的な遺跡の一つで、主として縄文時代の晩期から古墳時代の中期にかけて営まれた拠点的な集落跡と考えられます。巻町教育委員会では、平成2年以来御井戸遺跡の調査を行っており、この遺跡に備わるいくつかの重要なことがら次第に明らかになってきました。蛍の川として知られる矢垂川の付近に広がる縄文時代地区からは、平成3年と6年の調査をつうじトチを中心とする大量の木の実、刳物などの木製品、木柱群などが確認されました。当時の食生活や優れた木工文化を伝える貴重な資料です。また、東部で実施した平成9年の調査では、夥しい量にのぼる古墳時代の土器や大型梯子などが出土し、背後の尾根に造営された山谷古墳との密接なつながりがうかがえました。

しかしながら、上記のような成果はいずれも開発に伴う事前調査によるもので、調査範囲がきわめて限定される点において、遺跡の広がりや集落の全体像については不明と言わざるをえない状況にありました。こうしたなかで、新潟県教育委員会のご指導のもとに遺跡の保存と整備を視野に入れた確認調査を平成14年から国・県補助事業として行なうことになりました。初年度は縄文時代地区で実施しました。既刊の『御井戸遺跡Ⅰ』に収録されるとおり、平成14年の調査では全国的にも例の少ないクルミの保管施設が発見されるなどの成果をおさめ、低湿地遺跡における情報量の多さを再確認することができました。

2年目を迎えた本年は、東部の古墳時代地区を主たる対象としました。期間の制約によって調査面積は限られますが、3軒の建物跡や溝などを確認し、当時の地形と集落の関係を考える上で有益な知見がえられました。古墳時代中期初頭の一括土器や、続縄文土器の出土も特筆できる成果です。本書では、本年度の調査地に隣接した平成9年発掘調査区の概要もあわせて掲載しました。御井戸遺跡東部における縄文時代～中世の変遷がこれによって理解できれば幸いです。

御井戸遺跡の広がりや、東西400m・南北200m以上におよぶと予想されます。現在までにえられた情報は未だ断片的なものであり、全体像の解明には程遠い感があります。各方面からのご指導・助言を仰ぎながら今度継続的な調査を進めてまいりたいと思います。

本年度の調査では、昨年に引き続き多くの方々や機関からご助力を賜りました。とりわけ本年は、全域が水田地帯に位置するところから耕作地での掘削作業が不可欠となりました。実施にあたり格別のご理解を賜った地権者・耕作者各位に先ずもってお礼申し上げます。さらには、現地において適切にご指導をいただいた文化庁ならびに新潟県教育委員会、報告書作成に至る間にご教示いただいた研究者、発掘調査に参加された方々に併せて感謝の意を表します。

平成16年3月

巻町教育委員会
教育長 植 村 敏

例 言

- 1 本書は、新潟県西蒲原郡巻町大字福井に所在する御井戸（おいど）遺跡において、巻町教育委員会が主体となって実施した確認調査の概要報告である。
- 2 調査は遺跡の保存・整備を視野に入れたもので、範囲確認と性格究明を目的とした。
- 3 国・県補助事業「町内遺跡発掘調査」の一環として実施した。本遺跡に係る事業費は6,412,021円で、国費50%・県費20%の補助を受けた。
- 4 2003年7月14日～12月15日に野外調査、12月16日～2004年3月31日の間に報告書作成にあたった。
- 5 発掘調査の体制は次のとおり。

調査主体：植村 敏（巻町教育委員会教育長）
調査担当：前山精明（巻町教育委員会学芸員）
調 査 員：相田泰臣（巻町教育委員会学芸員）
事 務 局：大久保恵美子（巻町教育委員会社会教育課課長）・長谷川 斉（同課課長補佐）
- 6 発掘調査の参加者は次のとおり。

阿部ヒデ・小田野ヨシエ・梅田綾子・永嶋典子・片桐智子・金子源治・亀山 操・小島ムツ・小山沙織
斎藤チイ子・佐々木 進・佐藤朝子・沢栗裕美・田村光子・本間慶子
- 7 土壌分析・種実同定・樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 8 本書掲載の空中写真は、株式会社サープラックスに撮影委託したものである。
- 9 石器の石質は、宮島 宏氏（フォッサマグナミュージアム）の鑑定による。
- 10 弥生土器について、田中靖氏ならびに丸山一昭氏（和島村教育委員会）から多大な教示を賜った。
- 11 本書の執筆は次のとおりである。編集は前山精明があたった。

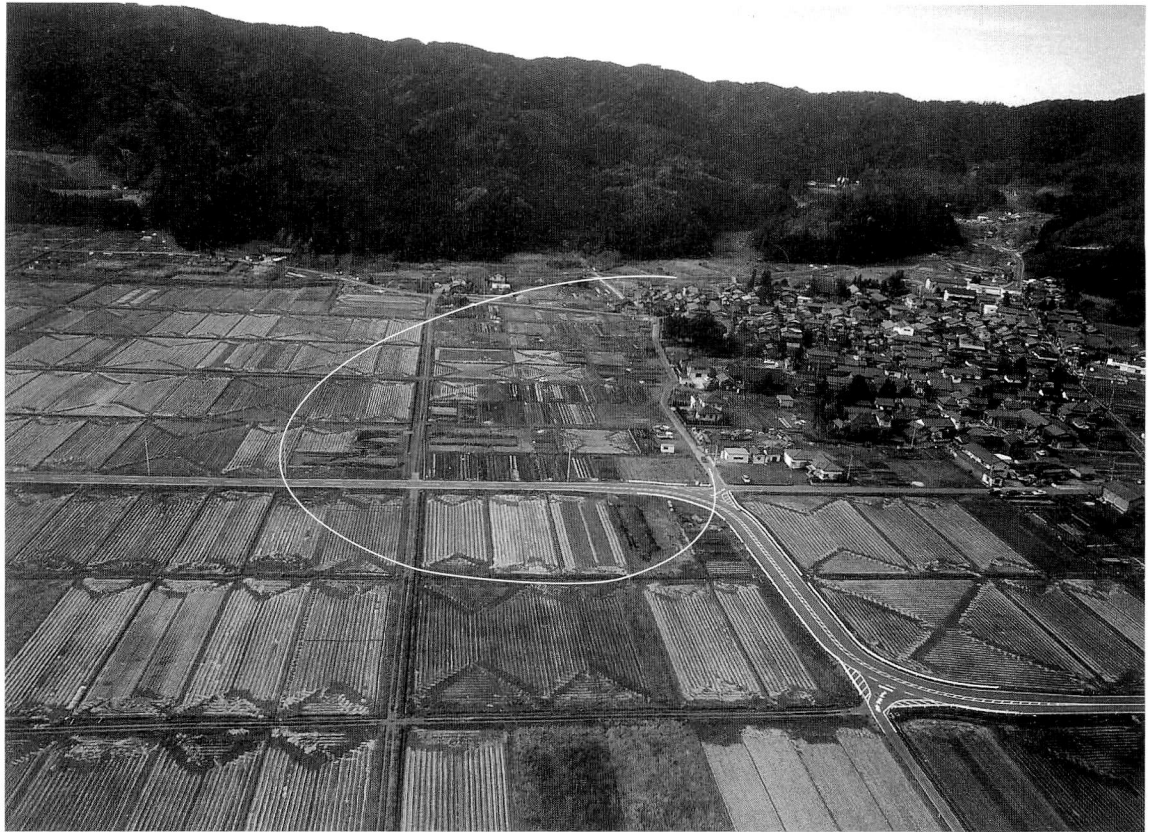
I、II-1～3、III-1～3・4（縄文時代・弥生時代・B・古墳時代・A②・B・C・中世）、IV-1・2：前山精明
III-4（弥生時代・A・古墳時代・A①・③・④・古代）、IV-3：相田泰臣
II-4・III-5：パリノ・サーヴェイ
- 12 自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社作成の『御井戸遺跡平成15年度確認調査自然科学分析委託事業報告』を、A遺跡・B遺跡に分けて編集・掲載した。
- 13 遺物の図化作業は、古墳時代～中世の土器類を相田、弥生土器を相田・前山、それ以外を前山が行なった。第36図の梯子は、加藤建設株式会社作成の原図による。第35図2は『巻町史考古資料編』から転載したものである。
- 14 基礎的な整理作業にあたり、永嶋典子氏・片桐智子氏・小山沙織氏・沢栗裕美氏・本間慶子氏の助力をえた。
- 15 本書掲載遺物のうち、第35図2以外は、巻町教育委員会が一括して保管している。
- 16 地権者の本間ミサホ氏（II A区）・本間丈夫氏（II E区）・丸山和夫氏（II F区・II G区）より、格段のご配慮を賜った。
- 17 調査に際し、次の機関から援助を賜った。

福井自治会・株式会社平岡組・株式会社江東工業・角田山麓の遺跡を考える会
- 18 発掘調査から本書作成に至るまで、下記の方々からご教示を賜った。

赤澤徳明・甘粕 健・右代啓視・春日真実・木島 勉・佐治栄次・鈴木俊成・滝沢規朗・田中 靖・辻本崇夫・寺崎裕助・禰宜田佳男・野水晃子・橋本博文・藤塚 明・細井佳浩・丸山一昭

目 次

I 序 章	
1 本年度調査の目的	1
2 調査経過	4
II 御井戸A遺跡の調査	
1 御井戸A遺跡概観	6
(1) 遺跡の形成	6
(2) 縄文時代晩期集落の構成	8
2 II A区の微地形と層序	9
3 II A区の植物遺体層	9
(1) 堆積状態	9
(2) 出土遺物	11
4 自然科学分析	12
(1) 同定結果	12
(2) 考 察	16
A. 古植生と植物利用 (16) ・ B. 木材利用 (17)	
III 御井戸B遺跡の調査	
1 既往調査の概要	18
2 御井戸B遺跡東部の微地形と層序	19
(1) 概 要	19
(2) 2003年調査区の微地形と層序	20
3 遺 構	23
(1) 縄文時代	23
(2) 弥生時代	23
(3) 古墳時代	23
A. 建物跡 (23) ・ B. 溝 (33) ・ C. 土坑 (33) ・ D. 集石 (34)	
(4) 古代以降	34
4 遺 物	34
(1) 縄文時代	34
A. 縄文土器 (35) ・ B. 石器 (39)	
(2) 弥生時代	43
A. 弥生土器 (43) ・ B. 石器 (47)	
(3) 古墳時代	47
A. 土器 ① 土師器 (47) ・ ② 続縄文土器 (53) ・ ③ 内面黒色土器 (56) ・ ④ 須恵器 (56)	
B. 土製品と石製品 (56) ・ C. 特殊遺物 (56)	
(4) 古 代	58
(5) 中 世	58
5 自然科学分析	60
(1) 試 料	60
(2) 分析結果	61
(3) 考 察	67
A. 堆積環境 (66) ・ B. 古植生と植物利用 (68) ・ C. 木材利用 (68)	
IV 成果と課題	
1 II A区の植物遺体層をめぐって	69
2 古墳時代前期集落の在り方	70
3 古墳時代土器の編年的位置づけと御井戸遺跡の動向	71
文 献	74
報告書抄録	76



東上空から見た御井戸遺跡



真上から見た2003年調査区と1997年発掘調査地

I 序 章

1 本年度調査の目的

御井戸遺跡は、越後平野の西縁を日本海に沿って連なる山地帯の北端、角田山（481m）の南麓に所在する。過去本遺跡では、1986年以来試掘・確認調査や本発掘が行なわれ（第1表）、各種情報を生々しく伝える縄文時代後・晩期の低湿性遺跡や、背後の尾根に造営された山谷古墳との関連性をうかがわせる豊富な遺物群が注目されていた。巻町教育委員会では、これに加えて集落の主体部分が比較的良好に残された巻町内で数少ない遺跡であることを重視し、保存と整備の必要性を以前から認識してきた。そして2001年、新潟県教育委員会の指導を仰ぐなかで、全体範囲と性格究明を目的とした確認調査を3年間を一つのめどとして実施することとなった。調査は国・県補助事業として行なうもので、初年度の2002年度に西部の縄文時代地区、2003年に東部の古墳時代地区、2004年に中間地帯および東西両地区の補足調査を計画した。

本年度の調査は、天候不順により次年度送りとした縄文時代地区ⅡA区の精査と東部の古墳時代地区を主対象とし、次のような目的を設定して実施した。

① 御井戸A遺跡

矢垂川西岸の旧氾濫原に設けたⅡA区では、昨年度の調査時点で縄文時代晩期終末に堆積したと推定される植物遺体層の存在が明らかになっていた。本年は堆積状況の確認と堆積物の内容把握をつうじ、その位置づけを検討する。

② 御井戸B遺跡

本年の主要調査地となる東部区域では、広域農道の建設に伴い南北120m・総面積1005㎡にわたる発掘調査を1997年に行なっていた。同年調査区では、埋没地形の一端が明らかになるとともに、微地形と古墳時代集落との関係を示す良好な情報が得られていた。すなわち廃棄空間としての北部埋没谷および南部低湿地、居住空間としての中央微高地、という在り方である。

そこで本年は、1997年発掘区の微高地に隣接して調査区を設け、古墳時代集落の空間構造の把握に努めることにした。現在周辺一帯は水田の中に休耕田が点在する状態にある。調査に際しては、後者を優先しつつ効率的な作業を進めるべく、次のような3地区を設定した。

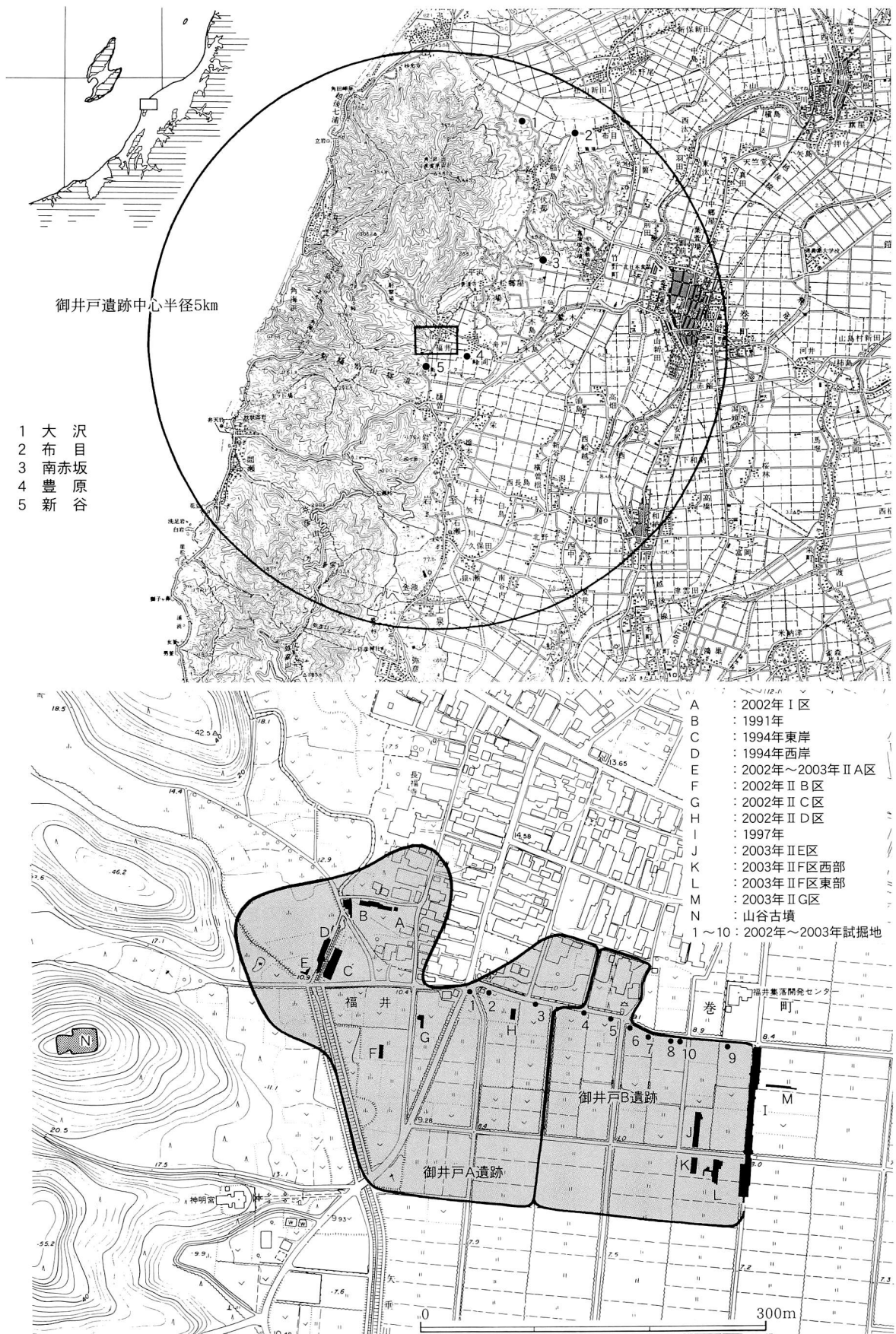
ⅡE区：微高地中央部西方への遺構分布を明らかにするため、面的な調査を行なう。

ⅡF区：1997年に確認された遺物廃棄ゾーンに隣接するところから、関連遺構の探査にあたる。

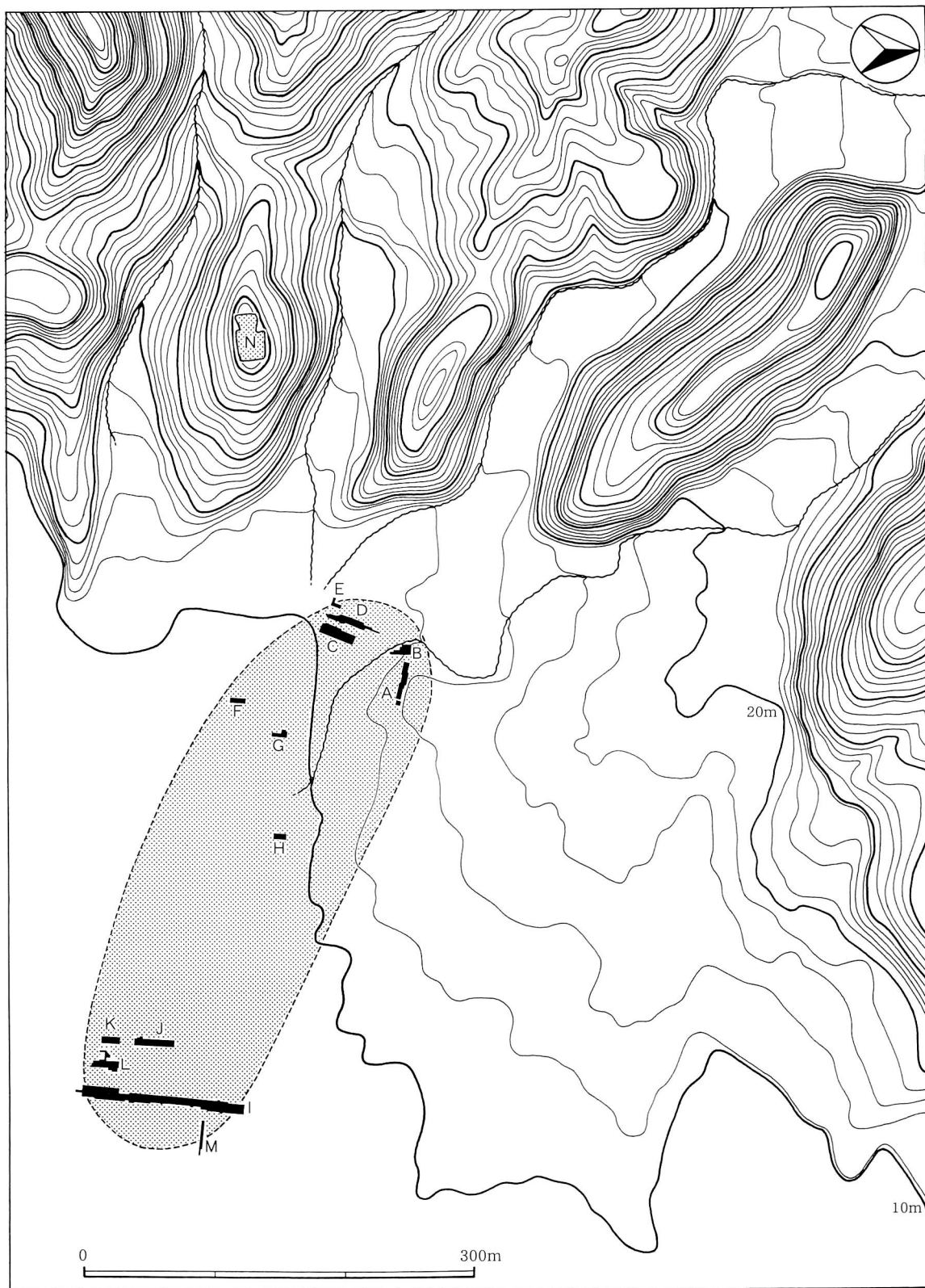
ⅡG区：北部埋没谷寄りにトレンチを設け、遺跡東側の範囲限界を把握する。

実施期間	調査原因	種別	調査面積	特記事項	文献
1986.09	学術	試掘	18㎡		
1990.10	河川改修	試掘	15㎡	縄文時代晩期遺跡の一部を確認	
1991.09～1991.12	河川改修	本発掘・試掘	150㎡	縄文時代晩期終末の「トチ塚」発見	巻町1994
1994.05～1994.10	河川改修	本発掘	370㎡	縄文時代晩期後半の木柱群・弧状矢板列・貯木場跡(割物未製品を含む)確認	前山1996ほか
1995.10・1996.01	農道建設	試掘	65㎡	古墳時代前期の遺物包含層確認	
1997.05～1997.12	農道建設	本発掘	1,005㎡	古墳時代前期を主とする大量の遺物が出土	
1997.06・1997.10	住宅建設	試掘	70㎡	縄文時代後期の遺物包含層確認	
2002.09～2003.02	遺跡保護	確認	350㎡	台地で縄文時代晩期の柱穴群、低地で同時代後期の小規模遺跡と晩期のケルミ集積確認	巻町教委2003

第1表 御井戸遺跡主要調査一覧



第1図 御井戸遺跡の位置と主要調査区



第2図 御井戸遺跡周辺の地形と主要調査区

- 網点：遺跡想定範囲
 A：2002年Ⅰ区・B：1991年東岸地区
 D：1994年西岸地区・E：2002～2003年ⅡA区・F：2002年ⅡB区
 G：2002年ⅡC区・H：2002年ⅡD区・I：1997年調査
 J：2003年ⅡE区・K：2003年ⅡF区西部・L：2003年ⅡF区東部
 M：2003年ⅡG区・N：山谷古墳

2 調査経過

本年度の調査は、野外作業を7月16日から12月15日に実施した。途中、菖蒲塚古墳などの確認調査に伴い作業の中断期間があったため、実質的な調査日数は計53日、作業員の延動員数は361名である。遺物洗浄・注記などの基礎作業はこれと並行して行い、12月16日以降報告書作成にあたった。野外調査の実施順に経過の概略を述べる。

① 町道拡幅予定地：2003年7月16日～7月18日

福井集落の南にそって走る町道の東西250mあまりの間で予定される拡幅工事に伴う確認調査。この区域については、2002年12月に試掘調査を実施していたが、新潟県教育委員会の要請により追加調査を行なうことになった。調査は、2002年に唯一遺物包含層が見いだされたTP8（2mから土師器9個体が出土）の東5mに位置する。調査範囲は、時間的な制約などにより幅1m・長さ5mのトレンチを東西方向に設定するにとどめ、手掘り作業によって遺物包含層の存否確認にあたった。

調査地には、田面マイナス50cm～80cm以下に厚さ50cm～60cmの未分解有機物混入粘土層が堆積しており、その中ほどを中心に古墳時代前期の遺物が包含されていた。出土土師器の大半は小破片で、口縁部集計にして20個体を数える。遺物の包含レベルが同層下部まで及んでいないことが判明したため、検土杖を使用し基盤層の深度を確認した後人力で埋め戻し、調査を終了した。



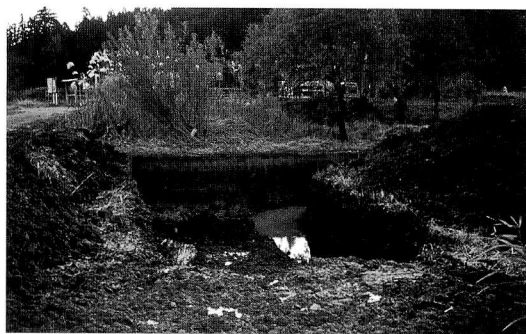
TP10の調査風景

② 御井戸A遺跡ⅡA区：2003年9月1日～9月10日

本調査区は、およそ9ヵ月にわたり作業を中断していた。そのため周囲一帯が藪地化しており、環境整備と排水を9月1日に行なった。作業再開までの間、調査区は常に冠水状態にあった。しかし、壁面の一部に小規模な崩落を認めた他はさしたる変化がなく、2002年の調査時に存在を確認した「植物遺体層」についても、土砂を覆い保護に努めたところから、冠水に伴う明確な影響は見られなかった。

作業は2日に壁面清掃と植物遺体層の平面分布の確認から開始し、4日には南壁の層序記録を終えた。同層の広がりには南部に続いていたため、その全容を把握すべくバックホーによる拡張作業を8日に実施した。そして、8日・9日の間には植物遺体層全体を対象とした記録・取り上げを行い、10日をもって種々の記録作業を完了した。

なお、植物遺体層が堆積していた窪地は、人為的に構築された可能性が高く、保護砂を覆い13日に全域を埋め戻した。また、植物遺体層については、全土壌を整理室に持ち帰り、5mm・1mmメッシュ篩による水洗選別作業を9月前半に行なった。



ⅡA区近景

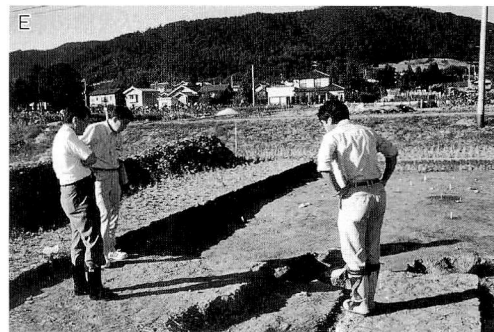
③ 御井戸B遺跡東部地区：2003年9月10日～12月15日

冷夏に伴う稲刈の遅れにより、9月10日・12日にⅡE区（休耕田）の基準杭打設などを行った後、16日から調査を開始した。遺物の取り上げ方法は、1m四方の小グリッドを基本とする。遺構については原則的に完掘を避け、土層の再検討が可能なように配慮した。

作業は、微高地中央部のⅡE区、その南に位置するⅡF区西部、1997年発掘区の南部低湿地に隣接するⅡ



A II E区南部の調査 (9月16日)
 B II F区東部1号建物跡の精査 (10月27日)
 C II G区A列の調査 (10月31日)
 D 調査着手直後のII F区西部 (9月19日)
 E 文化庁彌宜田調査官の現地指導 (10月8日)



F区東部、北部埋没谷に近いII G区、の順に進めた。各地区いずれも降雨後に冠水し、排水作業や壁面崩落による作業ロスを生じたが、11月14日には掘削を終了し、翌15日に空中写真撮影を行なった。これ以降は記録作業に移り、12月15日に土壌サンプルを採取して野外調査を完了した。埋め戻しは、12月23日～30日の間に実施した。作業に際しては、遺構分布域を山砂で覆い、保護に努めた。以下に調査区ごとの概略を記す。

II E区 (161㎡)：東西幅5m・南北30mの調査区を設定したが、溝が確認された南端部などで若干の拡張区を設けた。全体に土砂の堆積が極めて少ないところから掘削作業は急ピッチで進み、9月19日に全域の包含層調査を終えた。遺構精査は10月20日～22日に実施した。

II F区西部 (70㎡)：9月19日に東西5m・南北15mの調査区を設定し、作業を開始した。調査初日に中央で大規模な落ち込みを確認。矢垂川の旧河道であることが24日に判明したため、この時点で手作業による掘り下げを中止した。河道には新旧の別があり、両者の年代関係を探るため、10月28日にバックホーを使用して埋積土を除去。10月20日に北半部の遺構精査を行なった。

II F区東部 (150㎡)：F区西部の15m東に東西5m・南北30mの調査区を設け、9月25日に作業を開始した。南方20mまでの間(G-1～4区)を順次掘り広げる過程で、周溝を伴う住居跡と大規模な溝の存在が10月1日までに判明。以後東西に拡張した結果、後者の平面形やその内部に構築された掘立柱建物の存在が10月下旬に明らかになった。一方G-5～G-6区では、調査区中央に1m幅のトレンチを10月9日に設定したが、G-5区北部で矢垂川の旧河道が確認されたため、それ以南の調査を中止した。遺構精査は10月17日から開始し、11月7日に包含層調査を含む掘り下げ作業を終了した。

II G区 (49㎡)：10月28日に東西30m・幅2mのトレンチを設定。遺物包含層の予想深度を考慮し、同日バックホーにより上部層を除去した。包含層の調査は、10月29日～11月7日の間に実施し、時間的な制約によりA列を優先して行なった。

II 御井戸A遺跡の調査

1 御井戸A遺跡概観

福井集落南方の水田でヤジリが散布することは、早くから知られていた。しかし、縄文時代遺跡として認識されたのは1950年代のことで、初期の調査状況が上原甲子郎によって記述されている [上原1956]。その後本遺跡では、1958年～59年に行なわれた耕地整理時の遺物出土情報に基づく「御井戸A・B遺跡」の登録が新潟県教育委員会によってなされた。現行の遺跡登録範囲は、1982年～83年に巻町教育委員会が実施した分布調査の結果をうけて修正されたものである。西部～中央部に位置する「A遺跡」では、1990年以來断続的に試掘・確認・本発掘が行なわれており、この範囲内における利用実態の一端が明らかになっている。以下では、現時点でうかがえる遺跡の形成過程と、中心時期にあたる縄文時代晩期の状況を概観する。

(1) 遺跡の形成

主要調査区における利用時期および遺構の有無と内容を第2表に示した。これに基づけば、本遺跡の形成過程は、6期にわたる区分が可能である。

1期：縄文時代前期初頭～後期前葉

少量の遺物が出土しているのみで、未だ遺構の確認に至っていない時期である。1991年発掘区から出土した前期初頭土器を最古とし、中期終末・後期前葉土器が断片的にえられているにすぎない。

2期：縄文時代後期中葉～後葉

矢垂川氾濫原の中央部に形成された微高地上に小規模な居住地が形成される時期。2002年に実施したII B区の調査で石囲炉状遺構・配石や各種遺物が出土した。クリ属花粉の多産が特筆される [巻町教委2003]。

3期：縄文時代晩期前葉～中葉

本遺跡の主要形成時期にあたり、台地上に位置するI区や台地下の氾濫原～微高地に位置する1994年発掘区・II A区・II B区・II C区で各種遺構の存在が確認されている。

4期：弥生時代前期～中期

遺物量が急激に減少するとともに、遺構の存在が再び確認できなくなる時期である。1991年発掘区の「トチ塚」最上部～黒泥層から少量の前期土器、II C区から中期の土器片1点が確認されたにすぎない。

5期：古墳時代前期

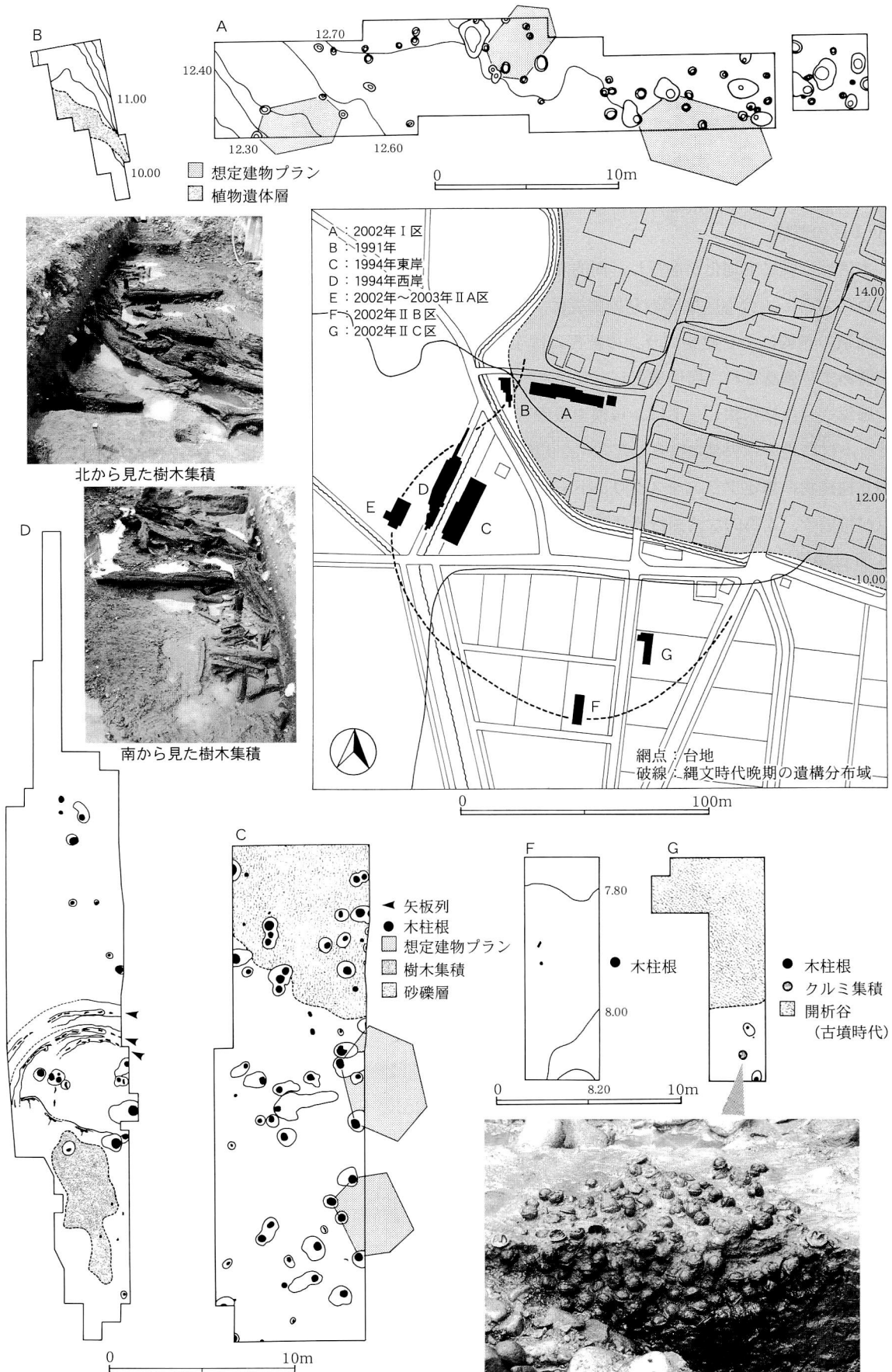
遺構の確認には至っていないが、一括性の高い土師器がII C区の一隅から大量に出土している。特異な出土状況や器種組成から、特定活動に関わる廃棄資料と考えられる。

6期：古代・中世

遺物量は少ないものの、台地上のI区から柱穴状ピットや井戸（中世）が確認された。現在の福井集落下

調査地	立地	縄文時代の遺構	縄文時代				弥生時代			古墳時代	古代	中世
			前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期			
I区	台地上	柱穴群			■	■ ■					■ ■ ■	
91年発掘区	台地直下の氾濫原		■		+	■ ■ ■ ■				+	+	+
94年発掘区	台地下の微高地・氾濫原	木柱群・矢板列・樹木集積			++	■ ■ ■						
II A区	台地下の氾濫原	溜状遺構				■						
II B区	台地下の微高地・氾濫原	木柱			++	■ ■ ■	+			+		
II C区	台地下の氾濫原	木柱・クルミ集積			+	+	■ ■ ■		■		■	■

第3図 御井戸A遺跡の形成過程 (■：遺構存在・+：2次堆積遺物)



第4図 御井戸A遺跡における縄文時代晩期の遺構

に主要区域が広がるものと予想される。

(2) 縄文時代晩期集落の構成

上記のように、御井戸A遺跡は主として縄文時代の晩期前葉～晩期終末の間に形成された集落跡である。この期間における遺構の分布域については、過去の調査をつうじ東・西・南の範囲限界がある程度判明しており（第4図右上）、東西方向での広がりはおおよそ140mほどと推定できる。本段階の遺跡は、立地的に見て台地地区と台地下の氾濫原～微高地に二大別できる。以下では前者をⅠ区、後者をⅡ区と呼称する。

A Ⅰ区の遺構

本区域は既に宅地化が進行し、面的調査が可能な場所は、南西部に残る畑地に限定された状況にある。現時点において、台地区域での発掘調査は、上記の北端に設定した2002年Ⅰ区に限られる。同地区では、調査面積の制約により建物プランの把握には至らなかったが、掘立柱建物の柱穴とみられる大小の落込が60箇所あまり確認され、居住域として利用されていたことが確実にされた。

確認された柱穴状ピットは、規模や根固石の有無に基づき3グループに分けられる。このうち大型・中型ピットは台地の中央部に偏在しており、規則的な空間利用を示唆する状況を示していた。第4図上段では、掘立柱建物の想定プランをスクリーンで表示した。なお、調査区全体にわたり遺物量がきわめて乏しい点の特徴で、人為的な清掃行為に起因する可能性がある。

B Ⅱ区の遺構と捨場

これまで5箇所調査を実施している。低湿な環境が幸いして木造遺構や植物性遺物が良好に保存される点が大きな特徴である。以下、種別に概要を記す。

木柱群：1994年発掘区から88本（晩期中葉～後葉）、ⅡB区から2本（晩期前葉～中葉?）、ⅡC区から2本（晩期後葉）の木柱根が確認されている。大多数がクリを樹種とする丸木材で、最大径は20cm～50cm台の範囲に大半が含まれる。分布密度は1994年東岸地区で最も高く、付近一帯に相当数の木柱が存在するものと予想できる。これらは、根固石や礎板を伴う例が極めて少ない、明確な建物プランが現時点では確認できない、などの特徴があり、多分に祭祀的な性格を帯びた木柱の可能性も考慮させる。

弧（環）状矢板列：1994年西岸地区からクリ材を使用した3列の矢板が確認された。構築時期は晩期中葉。いずれも東が矢垂川、南が窪地（晩期後葉）によって断ち切られるため、全体形は明らかでない。外側2列は1mの間隔において並列するが、両者の間に周堤は存在しない。具体的な性格は不明である。

樹木集積：1994年西岸調査区の南部に形成された窪地内から、大小樹木が密集状態で出土した。樹木を構成するのは自然木と加工木で、後者は伐採木・割材・板材や刳物未製品などからなる。このうち刳物未製品には縁を合わせた2点の皿、寄り添うような姿を見せる容器3点が含まれており、水漬け保管時の状況を留める「貯木場跡」とみなすのが妥当であろう。所属時期は晩期後葉。

クルミ集積：ⅡC区の南端部から発見された。径約60cmの不整形円形、深さ20cmほどの緩やかな窪みの中に未利用状態のオニグルミ1,100個体ほどが集積されたものである。ネズミの食害資料は3個体に限られる。最上面に流水の影響がみられるところから、集積後さほどの時間を置かない時点で埋没したものと見なされる。表皮を腐らせるための一時的な施設と考えられる。集積時期は晩期中葉。

廃棄ゾーン：土器や石器類を主とする捨場と、植物性食料残渣の集中廃棄地が4地区から確認された。前者は、1994年西岸発掘区の中央部（晩期中葉）・同地区南部の窪地（晩期後葉）・ⅡC区南部（晩期後葉）の3箇所である。後者は、1991年発掘区・1994年西岸発掘区・ⅡA区において面的な広がりが確認された。所属時期はいずれも晩期後葉である。構成残渣はトチの卓越を特徴とするが、1991年発掘区の下部層からは多量のドングリ類も出土した。

2 II A区の微地形と層序

本地区は、1994年の矢垂川西岸発掘区の南端から西へ15mあまりを隔てるのみである。両地区は、ともに矢垂川氾濫原の中央付近に位置する。そのため砂礫層がほぼ全域を覆っているが、度重なる氾濫によって堆積レベルや分布域は複雑な在り方を示す。

1994年発掘区の東岸地区では、遺物包含層を押し流す形で砂礫層が堆積していた。南部の基盤はシルトであるが、北部においては砂礫層を掘り込む形で木柱群が構築されていた。同年西岸発掘区では、東岸地区に認める上部砂礫層は北部に限定され、縄文時代晩期中葉以降の遺物包含層（黒色粘土・未分解有機物混入粘土～シルト）が安定した状態で残されていた。しかし基盤の地形は複雑で、小規模な谷や窪地が不連続に存在し、南部においては晩期中葉層を浸食する形で大規模な窪地が形成されていた。前節で述べた晩期後葉の捨場や「樹木集積」は、この区域内に位置していた。

II A区は、氾濫原のさらに中央部に位置する。本地区の基本層序は次のとおり。

I層：青みがかった褐色を呈する水田耕土および耕土下粘土。次のII層とともに全域に堆積する。

II層：I層と類似色調の粘土の中に、灰褐色シルト（III層の母材）の微粒子を含む。

III層：未分解有機物を何らかの形で含むシルトないしは砂層。

IV層：拳大程度を主とする円礫と粗粒砂からなる砂礫層。

以上5層のうち、III層・IV層が縄文時代の堆積層にあたる。本地区北部～中央部におけるIV層上面の堆積レベルは海拔10.2mほどを測り、1994年西岸発掘区のシルト層（基盤）と大差ない。これに対し、南部では基底レベル9.6mほどの緩やかな窪地が形成されており、この範囲内にIII層が堆積していた。なお、1994年西岸発掘区の南部窪地とは別個のものであり、小規模な谷や窪地が周囲一帯に展開していることをうかがわせる。III層・IV層における土器や石器の包含量はいたって少なく、ほとんどが細別時期の判然としない晩期縄文土器片である。

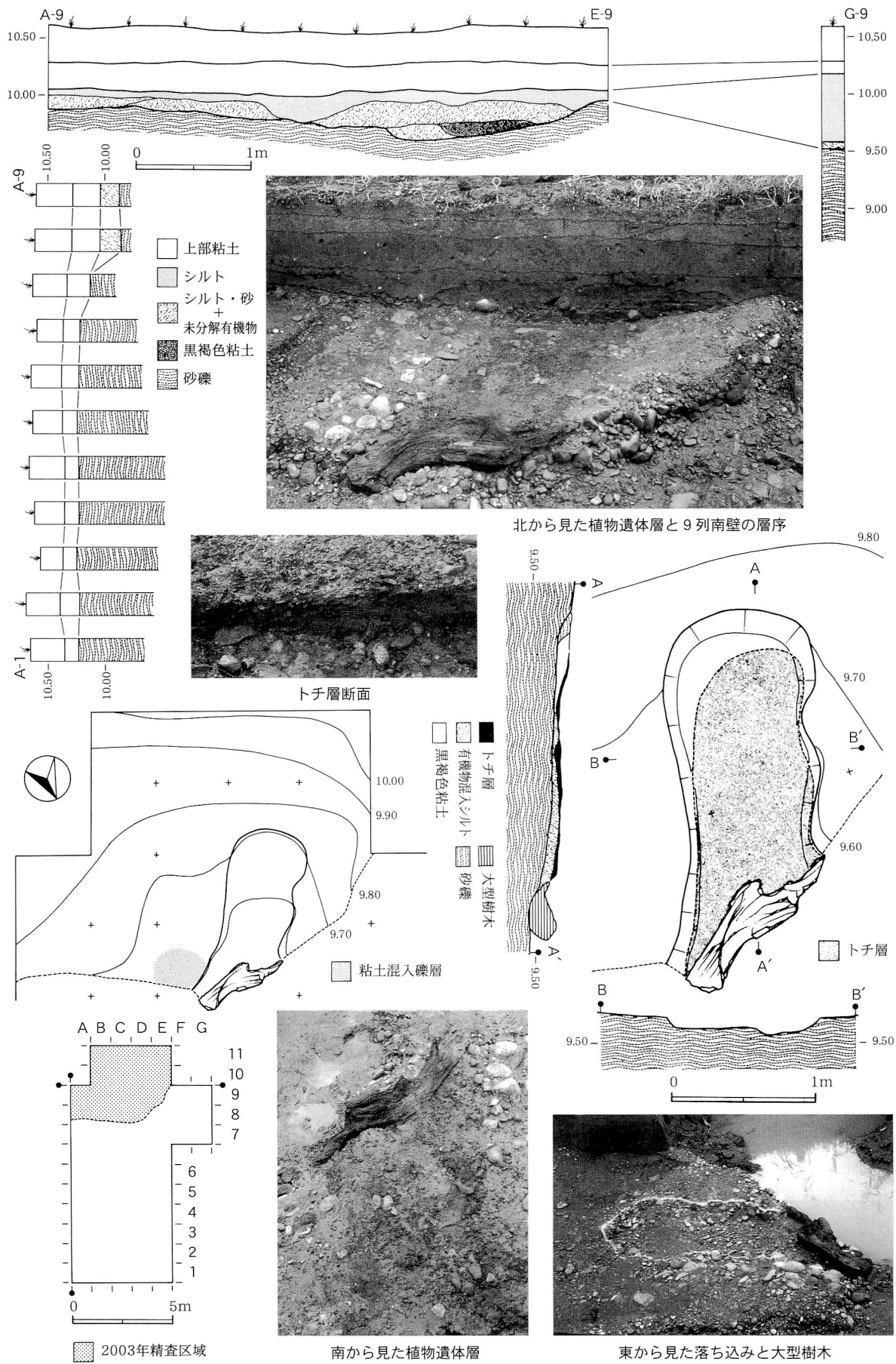
3 II A区の植物遺体層

本調査区IV層南部の上面に、北へ向かって緩やかに傾斜する窪みが形成されていた。その下底部からトチを主とする植物性食料残渣や各種種実などが多数出土した。

(1) 堆積状態

植物遺体群は、IV層上面に存在する南北1.5m・東西1.0mほどの長楕円形の落込み内に堆積していた。この落込みは東西方向で最大10cm程度の落差をもち、底面は北に向かって緩やかに傾斜する。傾斜は北部で急となり、南北の高低差は20cm強を測る。窪地北端には長さ1.3mの大型樹木が植物遺体層の分布を遮るように存在していた。樹木と落込みの長軸方位は45°前後のズレをもつが、窪地の幅にほぼ対応し、なおかつその底面を下端レベルとする。大型樹木はネジレて不整形な平面観をなすヤマグワである。明確な加工痕は見られぬものの半裁状態にあり、樹表を下面にして存在した。最大幅は40cm、現存最大厚は20cmほどである。関連して付記しておくが、本地区IV層は極めて密な堆積をみせる。しかし、大型樹木の東側隣接部にのみ粘土が介在するとともに、大型礫が目立って多く分布する傾向にあった。大型樹木の位置関係を含め、この落込みが人為的な構築物である可能性を強く示唆する特徴と言える。

落込み内部は、上下2層に大別できる。上面には、破損状態にあるトチの内果皮などが最大厚4cm、南北の高低差10cmほどをもって堆積していた。層内にトチの外果皮はほとんど含まれておらず、打割後に不要となった外殻を一括廃棄したことがうかがえる。一方その下面では、トチの量が大きく減少する。基底部までの間には、南部50cmほどに黒褐色粘土、それ以北に粗粒砂が堆積し、後者の中には木の葉や樹枝からなる薄層が介在していた。



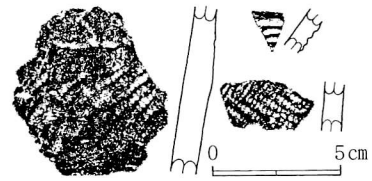
第5図 II A区の層序と植物遺体層

(2) 出土遺物

次節で述べる大型種実類と木材資料以外の出土遺物の内訳は第2表のとおりである。種別の特徴を記す。

A 人工遺物

縄文土器の小破片と剥片が少量出土するにとどまった。いずれも何らかの理由によって混在した資料とみなされる。第6図右上は、浮線文が施された精製土器で、トチ層からの出土。微細な破片ではあるが、編年的な位置づけが可能な唯一の資料で、植物遺体層の堆積時期を知る上で少なからず重要である。トチ層下からは、磨滅した小破片1点が出土したのみ。



第6図 トチ層出土の縄文土器

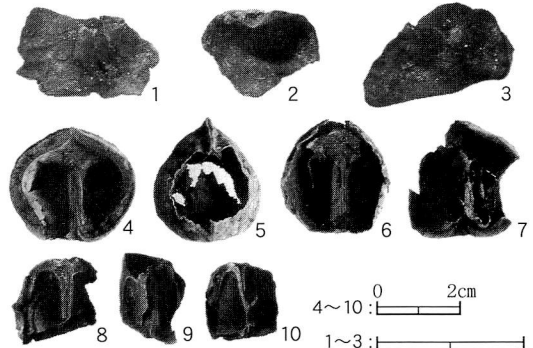
B 種実

植物遺体層上部の「トチ層」と「トチ層下」に堆積する未有機物含有層の全てを対象に、5mm・1mmメッシュ篩による水洗選別を行なった結果、多量の種実が検出された。このうち前者について同定作業が終了している。

可食ナッツとしては、トチ（幼果を含む）・クルミ・ドングリ類（ナラ類・カシ類の殻斗および果皮）・カヤ・ブナ（殻斗および種実）が出土した。1991年発掘区において一定量の存在が確認されたクリ・ヒシはいっさい含まれていない。上記6種のなかで、出土状況から食料残渣と判断できるのは前二者のみで、その他については自然堆積物と考えられる。本項では2種の食料残渣について記述し、残り4種は次節に譲る。

トチは、破損状態にある内果皮702個体と外果皮8点が出土した。前者は、幼根の萌出孔（第7図1～3）に基づき集計したものである。層位的に見ると、内果皮の99%は上部のトチ層からの出土である。これに対し、外果皮の出土量は僅少であるが、内果皮とは対照的にトチ層下の数が上回る。

オニグルミ（第7図4～10）の出土量は限定されており、縫合線に沿って割れた半割品（4）3個体、ネズミによる食害資料（5・7）4個体、破損品（6～10）21.8gにとどまった。全体に保存状態が良好でなく、欠損品の80%近くは腐朽を認める資料である。ネズミの食害資料の中にも腐朽が進んだ破損資料（7）が存在するところから、欠損品の多くは未利用個体の可能性が高い。ちなみに、本遺跡ⅡC区の「クルミ集積」からランダムに抽出した100個体の平均個体重量は4.25gである。これに基づく明確な欠損品の個体数は、1点たらずと推定できる。



第7図 植物遺体層出土のトチ・クルミ

C 動物遺体

図示しなかったが、トチ層より焼骨8点と生骨2点、トチ層下から生骨1点がえられた。生骨はいずれもニホンジカの微細な白歯破片である。これまで本遺跡では、1991年発掘区からニホンジカの焼骨、1994年発掘区からニホンジカ・イノシシ・ムササビの生骨（以上縄文晩期）、ⅡB区からニホンジカの焼骨（縄文後期）が出土している。概してニホンジカの出現頻度が高い点が特徴で、本例もそうした狩猟相の一端を示す資料と考えることも可能であろう。

層位	トチ		クルミ				動物遺体	縄文土器	剥片
	内果皮	外果皮	欠損	腐朽	半割	食害			
トチ層	694個体	2点	5.1g	13.7g	3個体	4個体	9点	9点	4点
トチ層下シルト層	8個体	6点		3.0g			1点	1点	
合計	702個体	8点	5.1g	16.7g	3個体	4個体	10点	10点	4点

第2表 ⅡA区植物遺体層の遺物一覧

4 自然科学分析

Ⅱ A区植物遺体層出土の種実および樹種同定を行なった。前者は5mmメッシュ篩選別資料の中から打割トチとクルミ以外を対象とし、後者は生木9点と炭化材10点を選択したものである。

(1) 同定結果

A 種実

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な果実・種子などを抽出した後、種実の形態的特徴を現生標本および図鑑 [石川1994・中山ほか2000] などとの比較をつうじ同定した。結果を第3表に示す。以下種類ごとに形態的な特徴を述べる。

●カヤ (*Torreya nucifera* Sieb.et Zucc.) イチイ科カヤ属

種子が検出された。灰褐色、倒卵体で両端は尖る。長さ20mm以上、径11mm程度。種皮は硬く骨質で、表面には10数本の浅い縦溝が走る。

●サワグルミ (*Pterocarya rhoifolia* Sieb.et Zucc.) クルミ科サワグルミ属

核が検出された。灰褐色、偏球体、上面観星形。径5.5mm程度。側面には10本程度の鋭い縦隆条が配列する。先端は太く短い刺状突起がある。

●コナラ属コナラ亜属 (*Quercus* subgen.*Quercus*) ブナ科

穀斗破片が検出された。灰褐色、椀状。径9mm程度。表面には偏平な狭卵形の鱗片が覆瓦状に配列する。

●アカガシ亜属 (*Quercus* subgen.*Cyclobalanopsis*) ブナ科コナラ属

穀斗・幼果が検出された。灰褐色、穀斗は灰褐色、椀状で輪状紋をもつ。径5~10mm程度。柱頭部分を欠損する。表面は粗面。果実の破片・基部の着点を検出された。灰褐色、円形でやや偏平。径4~5mm程度。基部には維管束の穴が輪状に並ぶ。

●コナラ属 (*Quercus*) ブナ科

果実の破片、基部の着点部分を検出された。灰褐色、円形でやや偏平。径4~5mm程度。基部には維管束の孔が輪状に並ぶ。

●ブナ (*Fagus crenata* Blume) ブナ科ブナ属

穀斗と果実が検出された。茶褐色、穀斗は広卵体。4裂した1片がみられる。裂片は楕円形。表面には刺状突起が密生するが、突起は柔らかいため先端部を欠損する。長さ15mm、径9mm程度。穀斗に包まれる果実は灰褐色、三稜状卵形。稜は鋭く、面の部分は凹む。果皮表面はやや平滑で、ごく浅く微細な縦筋がある。

●ホオノキ (*Magnolia obovata* Thunb.) モクレン科モクレン属

種子が検出された。灰褐色、歪な三角状楕円形でやや偏平。径12~14mm、厚さ4mm程度。頂部はやや尖る。腹面正中線上は、広縦溝と基部に臍がある。種皮は薄く硬く、表面には浅く細い縦溝がある。

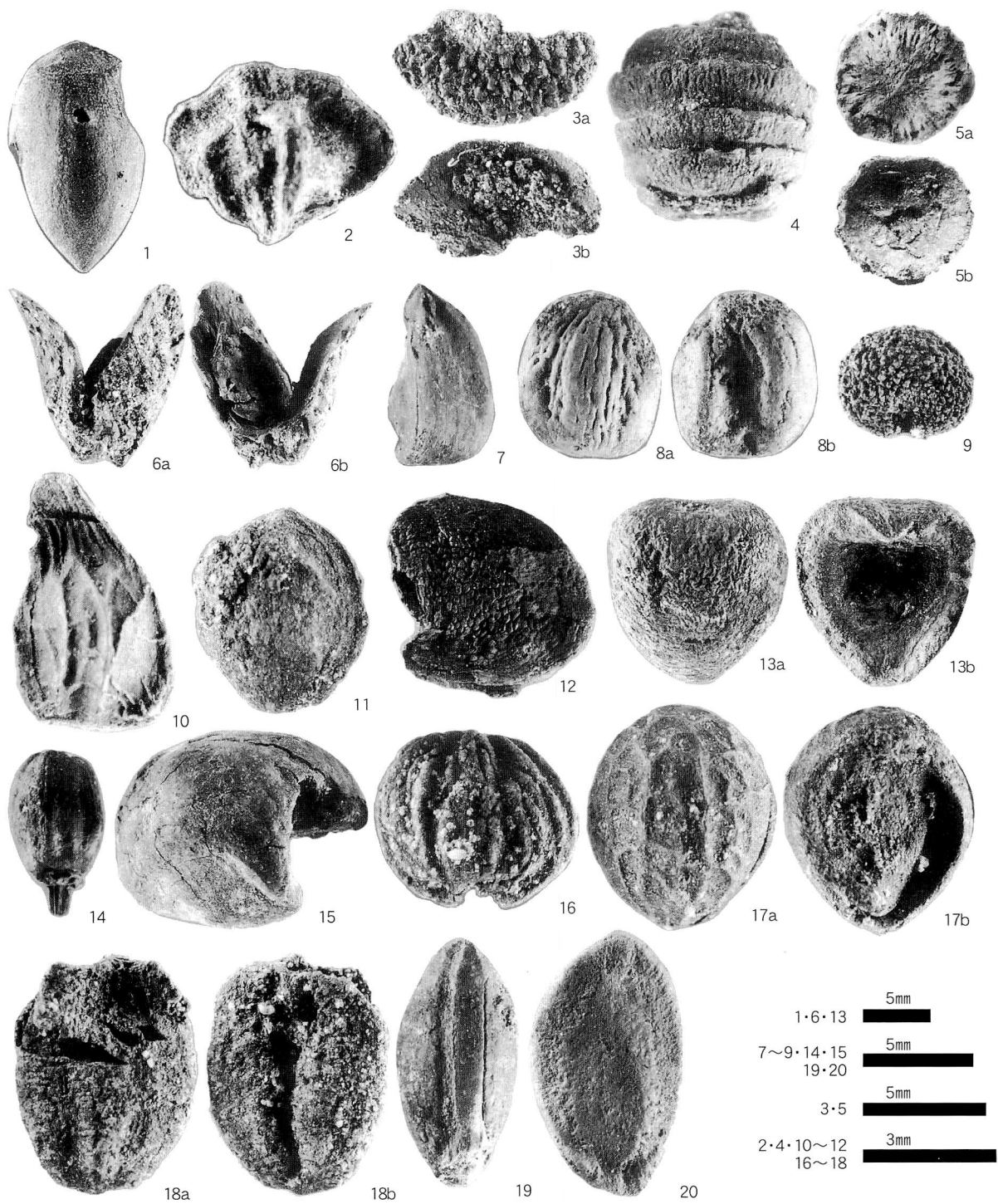
●マツブサ (*Schisandra repanda* (Sieb.et Zucc.) Radlk.)

マツブサ科マツブサ属

種子が検出された。黒褐色、腎臓形。径5~6mm程度。腹面基部に臍があり、臍周辺は凹む。表面は疣状突起が密に配列し、ざらつく。

第3表 同定種実一覧

種類	部位・状態	点数	備考
木本 カヤ	種子	1	
サワグルミ	核	1	
コナラ属コナラ亜属	穀斗破片	1	
コナラ属アカガシ亜属	穀斗	12	
"	幼果	13	
コナラ属	果実破片	4	着点部分
ブナ	穀斗	9	
"	果実	2	
ホオノキ	種子	6	
マツブサ	種子	2	
サクラ属	核	6	
カエデ属	果実	4	
"	種子	1	
トチノキ	果実破片	42	幼果あり
"	種子完形	3	
"	種子破片	9	
ミズキ	核	33	
エゴノキ属	種子	123	
クサギ	核	10	
ガマズミ属	核	2	
草本 キカラスウリ	種子	13	
不明種実		3	



- | | |
|-----------------|--------------|
| 1 カヤ 種子 | 11 サクラ属 核 |
| 2 サウグルミ 核 | 12 カエデ属 種子 |
| 3 コナラ属コナラ亜属 殻斗 | 13 トチノキ 果実 |
| 4 コナラ属アカガシ亜属 幼果 | 14 トチノキ 幼果 |
| 5 コナラ属 果実 | 15 トチノキ 種子 |
| 6 ブナ 殻斗・果実 | 16 ミズキ 核 |
| 7 ブナ 果実 | 17 クサギ 核 |
| 8 ホオノキ 種子 | 18 ガマズミ属 核 |
| 9 マツブサ 種子 | 19 エゴノキ属 種子 |
| 10 カエデ属 果実 | 20 キカラスクリ 種子 |

第8図 II A区植物遺体層の種実遺体

●サクラ属 (Prunus) バラ科

核 (内果皮) が検出された。灰褐色、広楕円体でやや偏平。基部は丸く大きな臍点が湾入し、頂部はわずかに尖る。径4~5mm、厚さ3mm程度。一方の側面にのみ縫合線が顕著に見られる。内果皮は厚く硬く、表面はざらつく。果実が検出された。暗褐色、丸みを帯びた楕円体または偏平で、翼の部分を欠損する。

●カエデ属 (Acer) カエデ科

果実と種子が検出された。灰褐色、丸みを帯びた楕円体または、偏平と複数種を含む。頂部から展開する翼を欠損する。径5~6.5mm、厚さ2.5mm程度。背腹両面の正中線上に稜がある。果実表面には葉脈状の隆条模様がある。種子は黒褐色、左右非対称の楕円形で偏平、径5mm程度。表面は光沢があり、粒状の網目模様が密に配列する。

●トチノキ (Aesculus turbinata Blume) トチノキ科トチノキ属

果実と種子が検出された。果実は灰褐色、歪な三稜状倒卵体。径6~15mm程度と小型で、未熟個体(幼果)がみられる。基部と頂部を結ぶ3本の溝が走り、溝に沿って3裂した個体が見られる。果皮は厚く、スポンジ状で弾力があり、表面には皮目状の斑点がある。種子は完形と破片が検出された。偏球形で径20mm程度と小型。破片は不規則に割れているものが多い。種皮は薄く硬く、表面には赤道面を蛇行して一周する特徴的なカーブを境に流理状の微細な網目模様があり、光沢の強い上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。

●ミズキ (Cornus controversa Hemsley) ミズキ科ミズキ属

核 (内果皮) が検出された。灰褐色、偏球形で径4~5mm程度。基部に大きく深い孔がある。内果皮は厚く硬く、表面にはやや深い縦溝が数本走る。

●エゴノキ属 (Styrax) エゴノキ科

種子が検出された。灰褐色、楕円体、卵形など不定形。長さ10~12mm、径5~7mm程度。基部は切形で灰黄褐色の大きな臍点がある。表面には3本程度の縦溝が走る。種皮は厚く硬く、表面には微細な網目模様がありざらつく。

●クサギ (Clerodendron trichotomum Thunb) クマツヅラ科クサギ属

核 (内果皮) が検出された。灰褐色で広卵体、側面観は三日月形。長さ6mm、幅5mm、厚さ4mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平らで腹面方向にやや湾曲する。腹面の一端には裂け目状の発芽口がある。内果皮は厚く硬い。背面には大きな網目模様があり、腹面表面は平滑である。

●ガマズミ属 (Viburnum) スイカズラ科

核が検出された。黒褐色。広卵形で偏平、先端が尖る。長さ6mm、幅5mm、厚さ1.5mm程度で、背面に2個と腹面に3個の浅い縦溝がある。表面はざらつく。

●キカラスウリ (Trichosanthes Kirilowii Maxim.var.Japonica(Miq.) Kitam.) ウリ科カラスウリ属

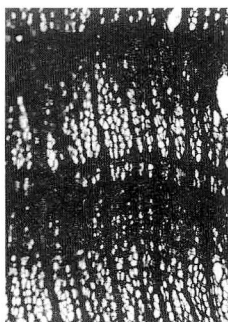
種子が同定された。淡灰褐色、非対称な倒卵形で、やや偏平。長さ13mm、幅7.5mm、厚さ2mm程度。基部には倒「ハ」の字状の臍と円形の発芽孔がある。縁を浅い帯状の溝が一周する。種皮表面は粗面。

B 樹 種

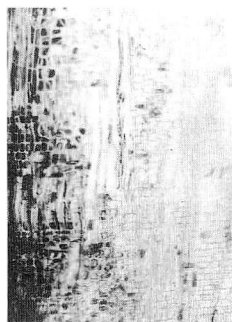
生木は、剃刀の刃を用いて木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロール (泡水クロール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液) で封入しプレパレートを作製したのち、生物顕微鏡で観察・同定した。一方炭化材は、木口・柾目・板目の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定した。



植物遺体層北端の大型樹木
(東から撮影)



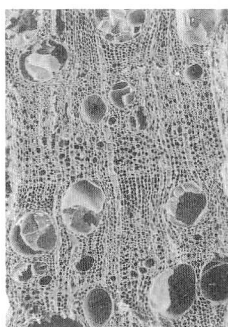
1 a



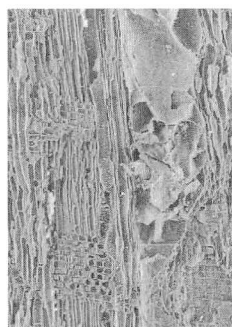
1 b



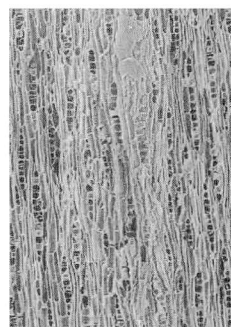
1 c



2 a



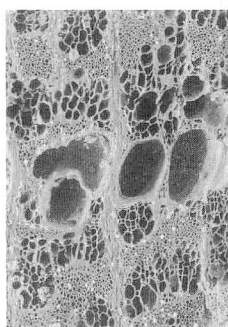
2 b



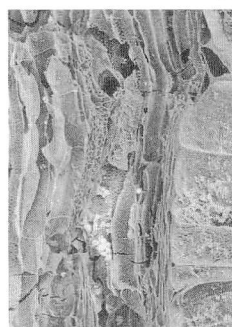
2 c



植物遺体層北部上面における
トチ肉果皮の密集状態
(南西から撮影)



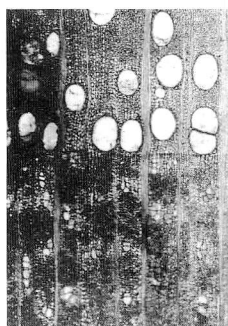
3 a



3 b



3 c



4 a



4 b



4 c

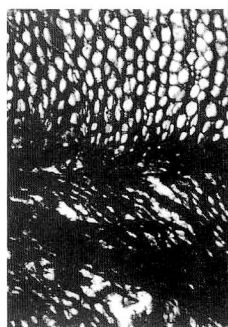
- 1 ブナ属 (トチ層・生木)
- 2 クリ (トチ層・炭化材)
- 3 ケヤキ (トチ層・炭化材)
- 4 ヤマグワ (大型樹木・生木)
- 5 カツラ (トチ層・生木)

a: 木口・b: 柁目・c: 板目

1a・4a・5a: 200 μ

2a・3a:

b・c:



5 a



5 b



5 c

同定結果を第4表に示す。生木・炭化材の中には、保存状態が悪いために種類の同定に至らないものが3点あった。それらについては、観察できた範囲での結果を記した。その他の試料は、6種の広葉樹に同定された。各種類の解剖学的特徴などを記す。

●ブナ属 (Fagus) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

●クリ属 (Castanea crenata Sieb.et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は2～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞孔。

●ケヤキ (Zelkova serrata (Thunb.)Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはラセン肥厚が認められる。放射組織は異性1～8細胞幅、1～50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

●ヤマグワ (Morus australis Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は3～5列、孔圏外への移行は緩やかで、年輪界に向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはラセン肥厚が認められる。放射組織は異性、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

●カツラ (Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc)

散孔材で、管孔はほぼ単独で散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～30細胞高。

●クスノキ科 (Lauraceae)

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油組織が認められるが顕著ではない。

(2) 考察

A 古植生と植物利用

II A区植物遺体層の種実遺体をみると、ほとんどが木本類である(註1)。検出された種類のうち、ブナ・コナラ亜属・アカガシ亜属は、山地に安定した森林(極相林)を構成する主要な種類である。角田・弥彦山地では、標高180m付近に暖温帯と冷温帯との境界があると考えられている[宮脇編1985]。このことから、当時の角田山の森林植生は、標高の高い場所にはブナ属などの落葉樹が、下部にはカシ類などの常緑樹が生育する環境にあったと推測される。また、カヤ・サワグルミ・ホウノキ・マツブサ・カエデ属・トチノキ・ミズキ・エゴノキ属・クサギ・ガマズミは、林縁など明るい林地を好む種類で、谷沿いなどに渓谷林を作ること多い。このような性格をもつ種類が多産することは、本遺跡の立地が山地と低地の境界付近にあることと調和的である。これらは角田・弥彦山地と低地との境界付近や、山地を刻む谷沿いなどに生育していたものと考えられる。角田・弥彦山地の一部には、現在でもケヤキやカエデなど落葉広葉樹を主とする渓谷林

第4表 同定樹種一覧

層位	種別	樹種
トチ層	生木	カツラ
トチ層	生木	カツラ
トチ層	生木	ブナ属
トチ層	生木	ヤマグワ
トチ層	生木	ヤマグワ
トチ層	生木	クスノキ科
トチ層北端大型樹木	生木	ヤマグワ
トチ層下	生木	ヤマグワ
トチ層下	生木	ヤマグワ
トチ層下	生木	広葉樹
トチ層	炭化材	ク リ
トチ層	炭化材	ク リ
トチ層	炭化材	ク リ
トチ層	炭化材	ク リ
トチ層	炭化材	ク リ
トチ層	炭化材	ケヤキ
トチ層	炭化材	ケヤキ
トチ層	炭化材	ケヤキ
トチ層	炭化材	広葉樹(環孔材)
トチ層	炭化材	広葉樹(環孔材)

が残っており [宮脇編1985]、当時の本遺跡周辺はこれに近い景観であったと思われる。

なお、前報の花粉分析の結果では、縄文時代後期地区からクリ属が多産しており [パリノ・サーヴェイ株式会社2003]、本地点の種実同定と異なる結果が得られている。クリの花粉は虫媒花であるが、尾状花序であるため、1本の木につく花の数が多い。このことから、花粉化石の方が種実よりも遠くの植生を反映している可能性があり、クリが生育していた場所は、本地点から離れていた可能性もある。なお、新潟市升潟で行なわれた花粉分析結果によれば、縄文時代に高率で検出されたクリ属花粉がその後減少していく様子がとらえられており、クリ林の維持・管理が行なわれていた可能性が指摘されている [三村・高橋2003]。今後は、種実遺体が得られた層位の花粉分析などをつうじ、クリ林の所在やその利用に関する調査を行なっていきたい。また本遺跡では、トチノキを食用として利用した残渣をまとめて廃棄した場所 [前山1996] やオニグルミの集積地 [巻町教委2003] が確認されている。オニグルミに関しては今回少量の出土にとどまったが、河畔や沢沿いなど湿った場所を好むことから、本地点周辺に生育していた可能性が高い。また、トチノキは成熟したものに混じって幼果も検出されるところから、本地点周辺に生育したと考えられ、採取場所と加工場所が隣接していたことが伺われる。

B 木材利用

本地点の木材試料は自然木と炭化材からなり、合計で7種が確認された。炭化材は、何らかの人為的行為により火を受けて炭化した可能性がある。樹種はクリ・ケヤキ・種類不明の環孔材が確認され、クリが比較的多い。一方自然木では、カツラ・ヤマグワ・ブナ属・クスノキ科が認められた。炭化材にクリが多いにも関わらず、自然木にはクリが1点も認められなかった。II A区の植物遺体層では種実遺体の水洗選別も行なっているが、クリは1点も認められない。

これに対し、本地点に隣接する1994年調査区での木柱群は、大多数がクリであった (註2)。また、本地点の北方70mに位置する1991年調査区では、縄文時代晩期終末相当層からクリ属花粉が多産し、栽培の可能性も指摘されている (註3)。このことから、クリ林は本地点の近傍ではなく、別な場所に存在していた可能性が高く、木材などはそこから持ち込まれた可能性がある。一方で、自然木や種実など近傍の植生を反映しやすいものにはクリがみあたらないことから、上述したように本地点付近は林縁や河畔など明るい場所や湿った場所を好む植物が多く生育していたものとみられる。今後さらに、人為的な影響を受けた木材や自然木の樹種同定、自然流路や遺構内から出土した種実遺体の種類構成の比較などを行い、クリの種実・木材の利用状況を把握することが望まれる。なお、クリ以外の種類については、縄文時代晩期の花粉分析から推定される周辺の古植生と矛盾しない。したがって、これらは本遺跡周辺の低地等に生育していたことが推定される。

編者註

- 1) 1mmメッシュ篩による選別作業をつうじ、多量の草本種子や栽培植物 (粉殻 2点) がえられている。全般にわたる同定を今後進めるとともに、後者については混入の有無を明らかにしたい。
- 2) 確認数88。所属時期は縄文時代晩期中葉～終末である。うち85点の樹種が三城昭義氏 (新潟大学理学部) により同定されている。内訳はクリ82点・オニグルミ 3点。
- 3) 藤田英忠氏 (敬和学園高校) の分析によれば、「トチ塚」最上部におけるクリ属花粉の出現率 (胞子と木本・草本花粉の総数に占める割合) は、60%に達する [巻町1997]。

III 御井戸B遺跡の調査

1 既往調査の概要

新潟県教育委員会が作成した現行の遺跡地図において、「御井戸B遺跡」として登録される区域は、主として現在の福井集落南方に広がる沖積地にあたる。その範囲は、東西方向で「山麓線」の東約100m～300m、南北方向で台地端部から200mほどとされる。

遺跡の存在は、1958年～59年に行なわれた耕地整理に際し、古式土師器や須恵器が出土したことから明らかになった。1980年刊行の『新潟県遺跡地図』に示される本遺跡は、主として当時の出土情報に基づくものである。1983年～84年にかけて、巻町教育委員会では、当遺跡内で計画される県道バイパスの建設に伴い、福井集落南方の水田区域一帯を対象とした分布調査を実施し、踏査区域のほぼ全域で縄文時代から中世に至る遺物の散布を確認した。新潟県教育委員会作成による現行の遺跡地図（第1図下段）は、その結果を受けて再登録したものである。ちなみに、補足調査として1986年に実施した簡易ボーリングによれば、踏査区域の水田下に未分解有機物を含む低湿な土壤が広範囲にわたって分布することが判明し、採集遺物の多くが客土に伴う拡散資料である可能性が高まった〔前山・山口1986〕。

年代は前後するが、1981年に本遺跡背後の尾根上で古墳時代前期の前方後方墳、山谷古墳が発見された。その後1983年と87年には、巻町教育委員会の依頼に基づく確認調査・発掘調査が新潟大学考古学研究室によって行なわれた。その結果、4世紀半ばに造営された県内最古クラスの古墳であることや、古墳造営に先立ち弥生時代の高地性集落が営まれる事実が明らかになり、その直下に位置する本遺跡の存在が俄にクローズアップされるに至った〔巻町教委・新潟大学1993〕。以後本遺跡では、『巻町史』編纂にともなう1986年の試掘調査以来、4次にわたる調査が実施されている。

1次調査：1986年9月～10月

『巻町史編纂』を目的に、福井集落開発センターの東に隣接する水田で行なった小規模な調査である。少量の縄文時代～古代遺物が混在状態で出土したのみで、集落の範囲外と判断すべき状況を示していた。

2次調査：1995年10月・1996年1月

福井集落東端から岩室にいたる間で計画される広域農道建設計画に伴う試掘調査で、巻町教育委員会が実施。全長700mの区域に計16箇所の坪掘区を設け、バックホーを使用して遺物包含層の有無と堆積層序の確認にあたった。その結果、集落開発センターの南隣接地に埋没谷、南部低地までの間に幅50mほどの微高地が存在することが判明するとともに、微高地に接した南部低地内において古墳時代前期の良好な遺物包含層が発見された。

3次調査：1997年6月～12月

2次調査の知見に基づき、農道建設予定地の南北120mあまりを対象に巻町教育委員会が実施した発掘調査。調査地は、御井戸B遺跡の東端付近に位置する。発掘区内からは、上記のような旧地形に対応するのごとく特徴的な空間利用を見せており、中央微高地から古墳時代の遺構群・北部埋没谷の南斜面から石製模造品、南部低湿地から土器などの集中的な捨場が確認された。後者の遺物量は夥しいものがあり、その一角から出土した大型丸木梯子の存在を含め、本遺跡に備わる拠点集落としての性格をうかがわせた。

4次調査：2002年12月

遺跡登録区域の北端を東西に走る町道の拡幅工事予定地を対象とした試掘調査。B遺跡の範囲内では6箇所の坪掘区を設け手作業による調査を行なったが、1997年発掘調査区に比較的近いTP-8の1箇所で古墳時代前期の遺物包含層を確認するにとどまった。

2 東部の微地形と層序

(1) 概要

御井戸B遺跡の現在の地形は、南東に向かってごく緩やかな傾斜をとりながら、きわめて平坦な地形をなしている。しかし、遺跡形成当時の旧地形は現況と様相を大きく異にする。第10図は、1986年・2001年に実施した簡易ボーリングと1995年試掘調査の知見に基づき、未分解有機物層の広がりを示したものである。前者は2m検土杖を使用した。図のごとく、本遺跡周辺の水田下には、未分解有機物層が広範囲にわたって分布する。その広がりには現地表面の8m以下におおむね対応するが、北部については微高地や谷の存在によって複雑に入り組んだ状況をみせる。

第11図に1997年発掘調査区のB列西壁と2003年ⅡG区A列南壁の層序、第12図にⅡE区～ⅡF区C列西壁・ⅡF区G列東壁および同地区北西部の層序を示した。以上の調査区からえられた情報によれば、御井戸B遺跡東部地区の地形は次のように区分できる。

A 北部埋没谷

1997年発掘区の北端部から、東西に走る埋没谷が確認された。最大幅は傾斜変換点で測り約30m、比高は1.4m。谷の斜度は北岸で11%、南岸で7%前後である。谷底には最大30cmほどの砂礫層が堆積していた。埋積土は、最下部に粘土層、その上部に未分解有機物層が覆う。前者の中に古墳時代前期の土器が相当量含まれており、これによって遺跡形成当時の旧地形をうかがうことができる。東西方向の谷の連なりは明確でないが、矢垂川の分流として台地の南縁付近を流下していたものであろう。

B 中央微高地

北部埋没谷と後述の南部低地の間に展開する空間である。各調査区における基盤層の最高レベルは、1997年発掘区で7.65m、その西約40mに位置するⅡE区で7.8mを測る。調査区周辺における微高地の広がり



第10図 調査地の位置と未分解有機物層の分布 (◎：1次調査・■：2次調査・●：ボーリング地点)

必ずしも明確でないが、ⅡG区での知見によれば、同地区16列付近が東側の範囲限界とみなされる。海拔7mをもって微高地範囲の目安とした場合、そのラインは1997年発掘区の18列とⅡF区の2列をつなぐ形となり、南西に向かって張り出す地形をなすことがわかる。微高地上の堆積土は総じて薄い。とりわけ1997年発掘区の高域部（9列～13列）やⅡE区の北半部（1～4列）では、耕作土直下に基盤層が存在し、何らかの削平行為が過去に行なわれたことをうかがわせる。しかし海拔7.5m付近からは層厚が次第に増大し、ⅡF区東部の東端および南半部からは、南部低湿地への移行を示す土層変化が確認できた。微高地全域が緩い傾斜をなし流水の影響を受けやすいことが、土砂堆積を妨げる一要因となったと考えられる。

C 低湿地

1997年発掘区の20～22列以南、ⅡG区の16列以東では、未分解有機物層が堆積し、低湿地へと移行する。両地区の未分解有機物層には、いずれも古墳時代前期を主とする多量の遺物が含まれており、湿地に面した本遺跡の立地環境を明示する。同層の最大厚は、ⅡG区で1.2m、1997年発掘区の南部で1.1mを測る。後者の南部で実施した1995年の試掘調査によれば、その層厚は南に向かって次第に増大し、3m以上に達することが確認された。1997年発掘区の21列以南では、未分解有機物層下に暗褐色粘土が堆積しており、縄文時代の遺物包含層が形成されていた。1997年発掘区の南端部では、未分解有機物を上下に挟んでシルト層が堆積していた。この地点は、1958年～59年の耕地整理時まで存在した矢垂川の下流域に近接しており、その成立が上記堆積層の形成以前に遡ることをうかがわせる。

(2) 2003年調査区の微地形と層序

本年度調査区における各地区の微地形的な位置と基本層序は次のとおり。

① ⅡE区

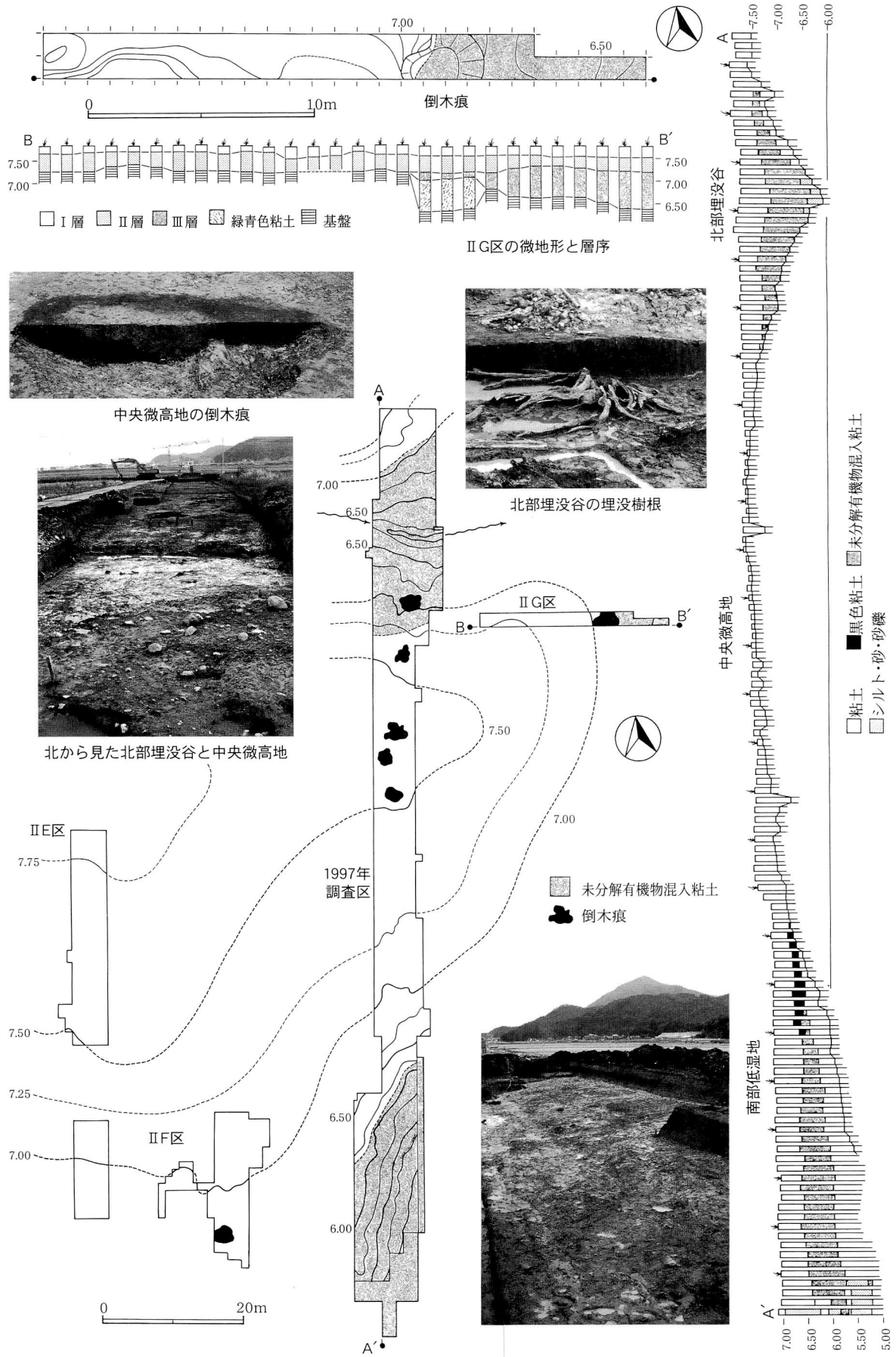
これまで実施した本遺跡調査地の中では最も高域部にあたり、最高点での海拔は7.85mを測る。調査区は全体に南へ向かって緩やかに傾斜する。しかし高低差は最大35cmにすぎず、ほぼ平坦な地形をなしている。土砂の堆積量は極めて少ない。黄褐色粘土（基盤層）までの深度は、北端で15cm、南端で30cmに留まっており、耕作土（Ⅰ層）およびその直下に堆積する青褐色粘土（Ⅱ層）が確認できたのみである。両層からは、縄文時代から近・現代に至る少量の遺物が混在状態で出土した。本地区ではプライマリーな遺物包含層が存在しておらず、遺構を埋積する黒褐色粘土内から大半の遺物が出土した。

② ⅡF区

ⅡE区の南方20m～35m、1997年発掘区南部（21～25列）の西方12m～52mほどに位置する。最高点は東部地区北端の7.15mで、ⅡE区に較べ35cm下位にあたる。本地区もⅡE区同様の緩傾斜地をなしており、南端部との比高は40cmを測る程度である。西部地区～東部地区北西の層序はⅡE区南部と大差なく、基盤粘土に掘り込まれた遺構の覆土にのみ黒褐色粘土が堆積していた。一方本地区では、H-1・2区以東とF-3区～G-3区以南のⅠ・Ⅱ層下に黒褐色～灰褐色粘土（Ⅲ層）が分布する。きわめて緻密な堆積土で、古墳時代前期の遺物包含層である。南部低湿地に発達する未分解有機物層への移行層とみられる。

③ ⅡG区

1997年発掘区で確認された北部埋没谷の南岸東部に位置する。本地区では、西側の7.25mラインで東西に走る傾斜変換点を認めるが、10列以東で走行が変わり、東へ向かって下降する地形となる。基本層序は、耕作土（Ⅰ層）・灰褐色～黒褐色を呈する軟質粘土（Ⅱ層）・未分解有機物含有粘土（Ⅲ層）・灰褐色粘土（Ⅳ層）である。このうちⅢ層は15列以東に分布し、低域へ向かうにつれてイネ科植物などを多量に含む軟質粘土へと移行する。東部のⅣ層内には、本地区にかぎり多量の礫が含まれる。Ⅱ層・Ⅲ層の包含遺物は古墳時代前期を主とするが、Ⅱ層内において少量の古代～中世遺物も確認された。



第11図 御井戸B遺跡東部の地形と1997年発掘区・II G区の層序

3 遺 構

調査区内から多数のピットなどを確認した。前節でふれたように、今回の調査地は1997年発掘区と隣接するため、その概要についてもふれながら時代順に記述していく。

(1) 縄文時代

1997年発掘区を含め、本時代の所産と断定できる遺構は確認できなかった。構築時期の決め手に欠けるが、ここでは形態的に縄文時代の「陥穴状土坑」に類似したⅡE区ピットNo.60（第13図）について述べる。

本土坑はⅡE区の中央西端に位置する。平面形は長軸1.2m・短軸0.9mほどの楕円形、基盤上面からの掘り込み深度は0.9mを測る。坑底の形状は南部を除き膨らみをもち、いくぶんオーバーハングする。基盤部には黒褐色を呈する軟質土が堆積しており、最大長16cm・20cm・1.5kg～4.2kgの大型円礫3点が底面から出土した。中部から上部にかけては、基盤粘土の微粒子を混入する硬質粘土に黒褐色粘土が挟在し、自然堆積の状態を示していた。なお、坑底の中央部に直径3cm前後の樹木片3本が垂直に存在したが、樹木分析をつうじハンノキ属の根材と判明したため、人為的な構築物と判断するには至らなかった。

(2) 弥生時代

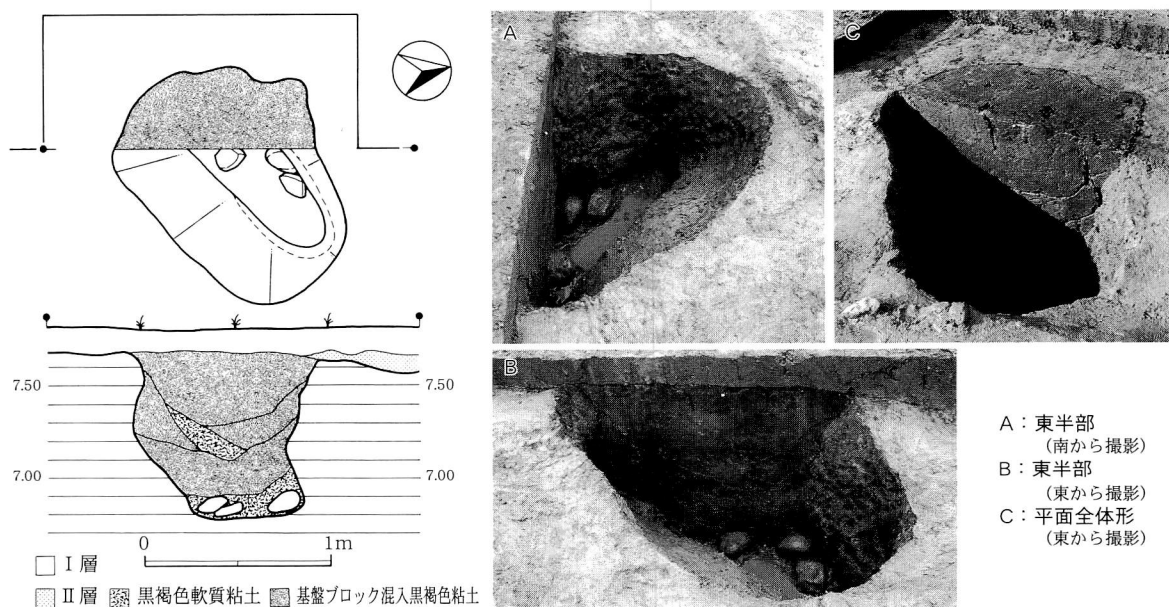
東部地区からこれまで確認された確実な弥生時代遺構は、1997年発掘区の微高地南部に位置する長楕円形土坑1基に限定される。第29図左に示す長楕円形土坑がそれである。最大長1.2m・幅80cm・最大深度40cmを測り、自然堆積とみなすべき埋積状況を示していた。中部層に微細な焼骨と炭化物片が多数堆積し、埋積土内からは中期後半の土器片が出土した。

(3) 古墳時代

微高地南部に位置するⅡE区の南端からⅡF区にかけて多数のピットや溝が確認された。東に隣接する1997年発掘区からも微高地南部を中心に遺構群が分布しており、第14図に平面図を示した。

A 建物跡

本年度の調査で確認されたピット群のうち、掘り込み規模からみて柱穴の可能性のあるものは64箇所（ⅡE区：12箇所・ⅡF区：52箇所）を数える。相伴土器によって時期の特定が可能な例は限られているが、出土遺物の量的割合から判断するに限り、大多数が本時代の遺構と考えて差しつかえなからう。微高地上に立



第13図 ⅡE区の陥穴状土坑

第5表 ピット一覧

(土器：実数は口端遺存資料数、+は体部資料が存在)
(柱状ピット：最大深度20cm以上)

地区	No.	長・幅・深(cm)	縄文土器	弥生土器	土師器	石器	備考	地区	No.	長・幅・深(cm)	縄文土器	弥生土器	土師器	石器	備考
ⅡE区	1	28・20・5			+			ⅡF区	31	20・16・18					
	2	18・16・8			+				32	23・21・14	+			砥石?1	1号建物跡柱穴
	3	21・21・22			+		柱状ピット		33	21・ー・36			2		柱状ピット
	4	21・18・10							34	70・ー・14					
	5	13・11・13							35	16・ー・16					
	6	16・14・13			+				36	15・14・28					柱状ピット
	7	65・59・19			+				37	17・13・7					
	8	30・23・30					柱状ピット		38	17・13・6					
	9	11・11・7			+				39	13・11・12					
	10	55・34・24			1	剥片:1	柱状ピット		40	34・27・15			+		
	11	22・ー・25			1		柱状ピット		41	ー・11・8					
	12	ー・20・23					柱状ピット		42	ー・12・5					
	13	13・10・6			+				43	16・15・28			+		柱状ピット
	14	13・12・14							44	13・13・6					
	15	14・13・5			+				45	16・16・12					
	16	22・20・17							46	11・10・6			+		
	17	30・19・14			+				47	17・15・20					柱状ピット
	18	19・10・5							48	17・16・20			+		柱状ピット
	19	16・16・8			+				49	16・14・22					柱状ピット
	20	ー・17・27					柱状ピット		50	19・16・23			+		1号建物跡柱穴
	21	ー・27・39					柱状ピット		51	11・10・6					
	22	24・14・10			+				52	21・ー・26					柱状ピット
	23	17・14・9							53	ー・24・19			2		
	24	24・22・32					柱状ピット		54	22・20・5					
	25	32・ー・21					柱状ピット		55	30・ー・23					柱状ピット
	26	20・18・9							56	29・20・31			+		1号建物跡柱穴
	27	17・15・15							57	30・46・21			+		柱状ピット
	28	56・16・9			+				58	163・52・23			1	石核:1	柱状ピット
	29	42・29・11							58	63・52・23			+		柱状ピット
	30	24・21・24			+		柱状ピット		59	80・70・24			+		柱状ピット
	31	13・12・8							60	16・15・28			2		1号建物跡柱穴
	32	17・13・16							61	68・64・26			1		柱状ピット
	33	14・14・17			+				62	46・28・48			1		柱状ピット
	34	22・13・19			+				63	21・16・8			+		
	35	22・ー・11							64	27・20・9			+		
	36	13・12・19							65	25・20・26			+		柱状ピット
	37	16・14・16			+				66	22・20・24			1		柱状ピット
	38	13・12・15							67	23・ー・9					
	39	24・20・14			+				68	30・26・13					
	40	15・15・5							69	23・ー・30					柱状ピット
	41	13・11・6							70	19・14・12					
	42	16・14・17			+				71	24・18・33			+		1号建物跡柱穴
	43	19・15・13			1				72	23・21・24					柱状ピット
	44	13・12・15							73	15・11・5					
	45	16・16・13							74	19・11・9					
	46	13・13・8							75	23・18・13					
	47	16・14・6							76	20・19・15			+		
	48	17・14・6							77	18・16・12					
	49	31・18・10							78	21・ー・18					
	50	14・10・6							79	19・19・12					柱状ピット
	51	18・16・25					柱状ピット		80	19・19・22					
	52	14・ー・9							81	29・ー・35					
	53	16・15・12							82	22・20・10					
	54	21・20・19							83	19・16・20					柱状ピット
	55	ー・ー・28					柱状ピット		84	18・14・9					
	56	17・16・12							85	27・21・26					柱状ピット
	57	16・14・10			+				86	23・22・29					柱状ピット
	58	20・15・7							87	15・15・7					
	59	110・100・37			31	剥片:1			88	23・ー・26					柱状ピット
	60	116・90・91					陥穴状土坑		89	21・19・28					柱状ピット
ⅡF区	1	24・23・29						90	18・17・6						
	2	24・20・16						91	27・22・29					柱状ピット	
	3	24・22・38					柱根遺存	92	24・19・18						
	4	24・15・9						93	22・20・23			+		3号建物跡柱穴	
	5	23・17・12						94	14・13・12			+			
	6	16・15・12						95	65・55・16			+			
	7	19・18・38					柱状ピット	96	20・14・5						
	8	26・16・8						97	29・25・21					3号建物跡柱穴	
	9	20・15・18						98	39・26・43			1		3号建物跡柱穴	
	10	36・21・18	+				砥石?1	99	19・19・10						
	11	52・36・42			+			100	28・23・41					3号建物跡柱穴	
	12	30・23・35			+			101	18・17・10						
	13	ー・25・5			+			102	21・ー・41			1		柱状ピット	
	14	25・ー・17						103	24・19・27			+		柱状ピット	
	15	26・25・14						104	26・22・36					柱状ピット	
	16	18・16・20					柱状ピット	105	13・ー・18						
	17	76・54・44		+	+		2号建物跡柱穴	106	12・ー・23					柱状ピット	
	18	60・ー・41			+	剥片:1	2号建物跡柱穴	107	14・ー・22			+			
	19	50・46・6						108	29・15・15			+			
	20	82・68・9			1			109	18・ー・30					柱状ピット	
21	64・50・56			2	剥片:1		110	11・ー・7							
22	24・ー・21			2	剥片:1	2号建物跡柱穴	111	22・ー・27			+		柱状ピット		
23	20・16・5			+			112	ー・247・40			1		倒木痕		
24	22・20・38					柱状ピット	ⅡG区	1	42・25・10						
25	28・18・11							2	36・25・13						
26	24・17・17							3	32・26・22						
27	16・16・10							4	ー・380・39					倒木痕	
28	12・10・26							5	75・68・35						
29	30・15・8							6	ー・128・45			+			
30	19・ー・11														

地するためか、柱根の遺存例はⅡF区南端に位置するピット№5の1箇所にとどまった。調査区内においてプランが完結する建物跡は計3軒で、いずれも4本柱からなる長方形家屋である。このほか、1997年発掘区の微高地南部からも4本柱の長方形家屋が2棟確認された(第14図)。3.0m×2.6mと4.0m×2.4mの規模をもち、前者は地床炉を伴うものである。同地区では、周囲に多数の柱穴状ピットや焼土1箇所が分布するところから、さらに相当数の建物が調査地内に存在するものと予想できる。以上の建物方位は、微高地の傾斜とおおむね同一方向を長軸とする点が特徴的である。

1号建物跡(第17図)

ⅡF区東部の北端に位置する。最大幅16cm～30cm、深さ23cm～33cmのピット4本を柱穴とみなした。プランは長軸3.6m・短軸2.1mの長方形を呈する。中央のいくぶん南寄りに最大長50cm・厚さ6cmの焼土および炭化物層が存在しており、これをもって住居跡と判断した。周囲には、幅30cm前後・深さ10cm弱の溝がめぐる。建物プランとは方位に若干のズレをもつものの、一辺5.9m～5.6mの方形をなしており、本住居の周溝とみなされる。溝の東側ラインは、基盤層の下降により確認でなかった。西側ラインの中央部には、幅1mの欠落箇所(ブリッジ)がある。建物の中心軸にほぼ対応するところから、出入口と考えられる。

溝を含めた本遺構の範囲には、東部にのみⅢ層が堆積し、後述のような古墳時代前期初頭の土器が包含されていた。周溝はこれを掘り込むものである。ピットや建物プラン内から時期の特定が可能な土器はえられなかったが、周溝内部からⅢ層とほぼ同時期の土器が出土しており、構築時期を推定する手がかりとなる。

なお本建物跡の構造については、地表面からの確認深度が20cm～25cmにすぎず、周囲が削平された竪穴住居の可能性も考慮された。しかし本遺跡では、Ⅲ層分布域の2号建物跡を含め竪穴住居が確認されておらず、土砂の堆積が乏しい地形的な特性からも平地住居と考えるのが妥当と判断した。

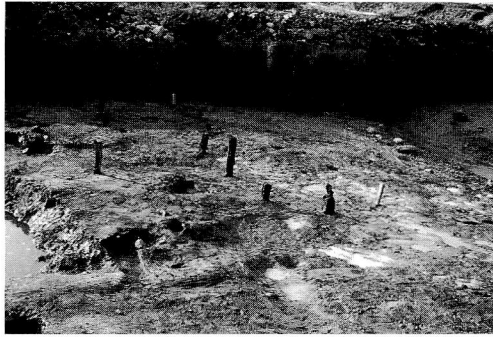
2号建物跡(第18・19図)

1号建物跡の南約2mから、全体形が隅丸方形をなすとみられる大規模な溝が確認された。溝の幅は60cm～30cm、平均的な深さは15cmほどを測る。北側ラインは緩やかにカーブしながら構築され、一辺の長さは11m程度。その両端から南西方向に向きを変え、東・西ラインへと移行する。南部への広がりには、後述のような倒木痕や矢垂川の旧河道によって断ち切られ、南方8mまでの確認にとどまった。区画範囲のほぼ全域にはⅢ層が堆積する。層内に包含される土器は大多数が細片であるが、溝の東側ライン内部に偏る状態で高杯や壺の完形～準完形土器が出土した。いずれも古墳時代の中期初頭に限定されるものである。これらの出土レベルは、溝の下底部から遺構確認面上位までの幅をもつ。

区画内部の北東コーナー付近からは、長軸3.8m・短軸2.2mあまりの掘立柱建物が確認された。構築方位は溝とほぼ同一で、東側ラインとの位置関係は僅か50cmを隔てるのみである。柱穴はいずれも平面楕円形をなし、長さ55cm～75cm・幅30cm～55cm・深さ40cm～55cm程度を測る。柱穴内部には、基盤粘土の微粒子を多量に含む黒褐色粘土が堆積していた。柱痕の確認には至らなかったものの、他と比較して大型柱が使用されていたことは確実である。内部に地床炉などの関連施設は存在しなかった。柱穴覆土からの遺物は僅少で、時期の特定可能な土器はえられなかった。本建物と周囲の溝との厳密な年代関係は明らかでないが、構築方位の一致を重視すれば、密接な関連性を求めるのが妥当であろう。後者を周溝と考え、大きく偏る建物位置に着目した場合、類似規模をもった別棟が区画南西部に存在する可能性も十分想定できる。

3号建物跡(第16図)

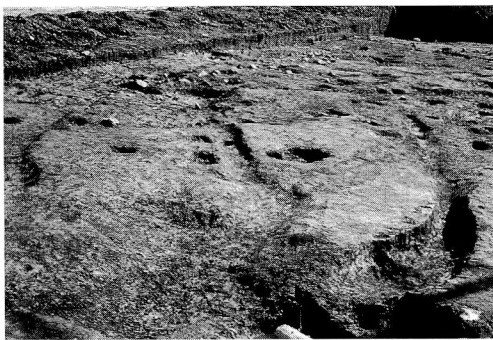
2号建物跡の周溝西端から西方約10mに位置する。幅20cm～26cm・深さ23cm～43cmのピット4本をもって建物跡とみなした。長軸2.7m・短軸1.4mを測り、他の家屋に比べ小規模な遺構と言える。地床炉は確認できなかった。ピット内から少量の土師器片が出土したのみで、構築時期は明確でない。



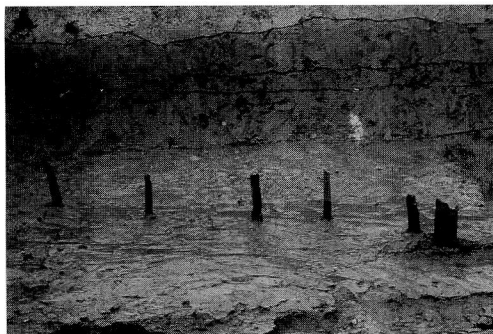
北部埋没谷南岸の杭列
(東から撮影)



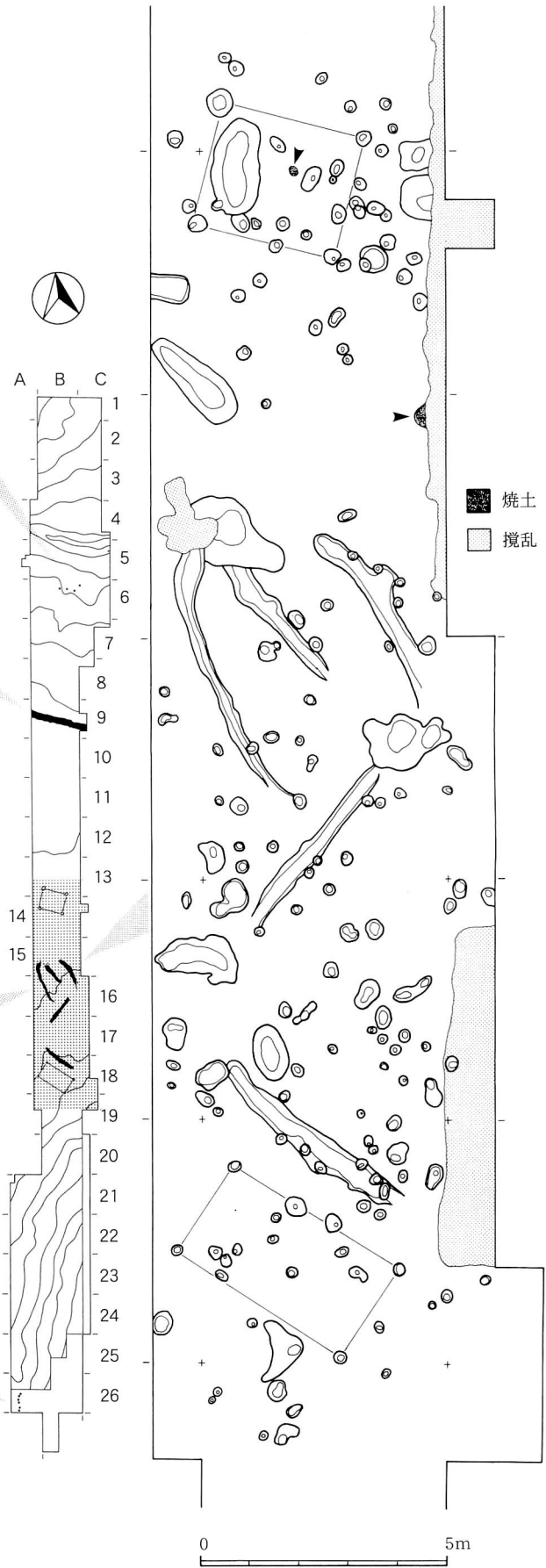
中央微高地北部の溝
(西から撮影)



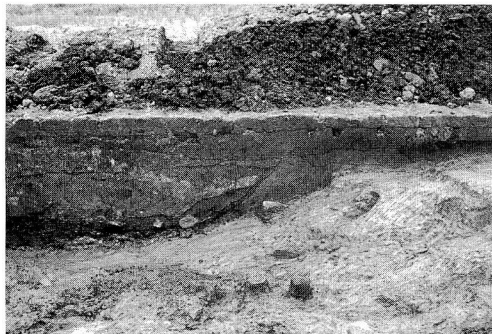
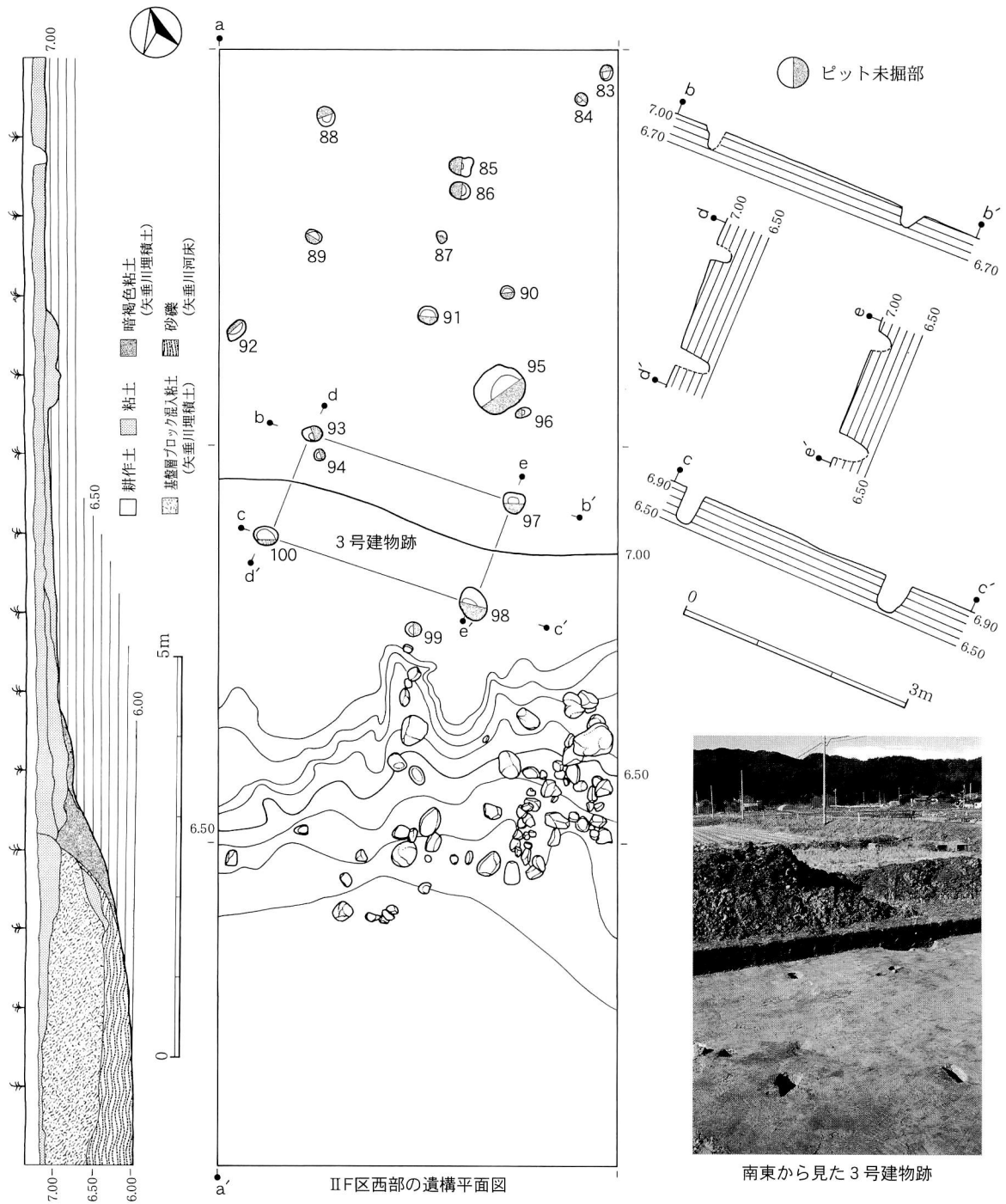
中央微高地南部の溝とピット群
(北西から撮影)



南部低地の杭列
(東から撮影)



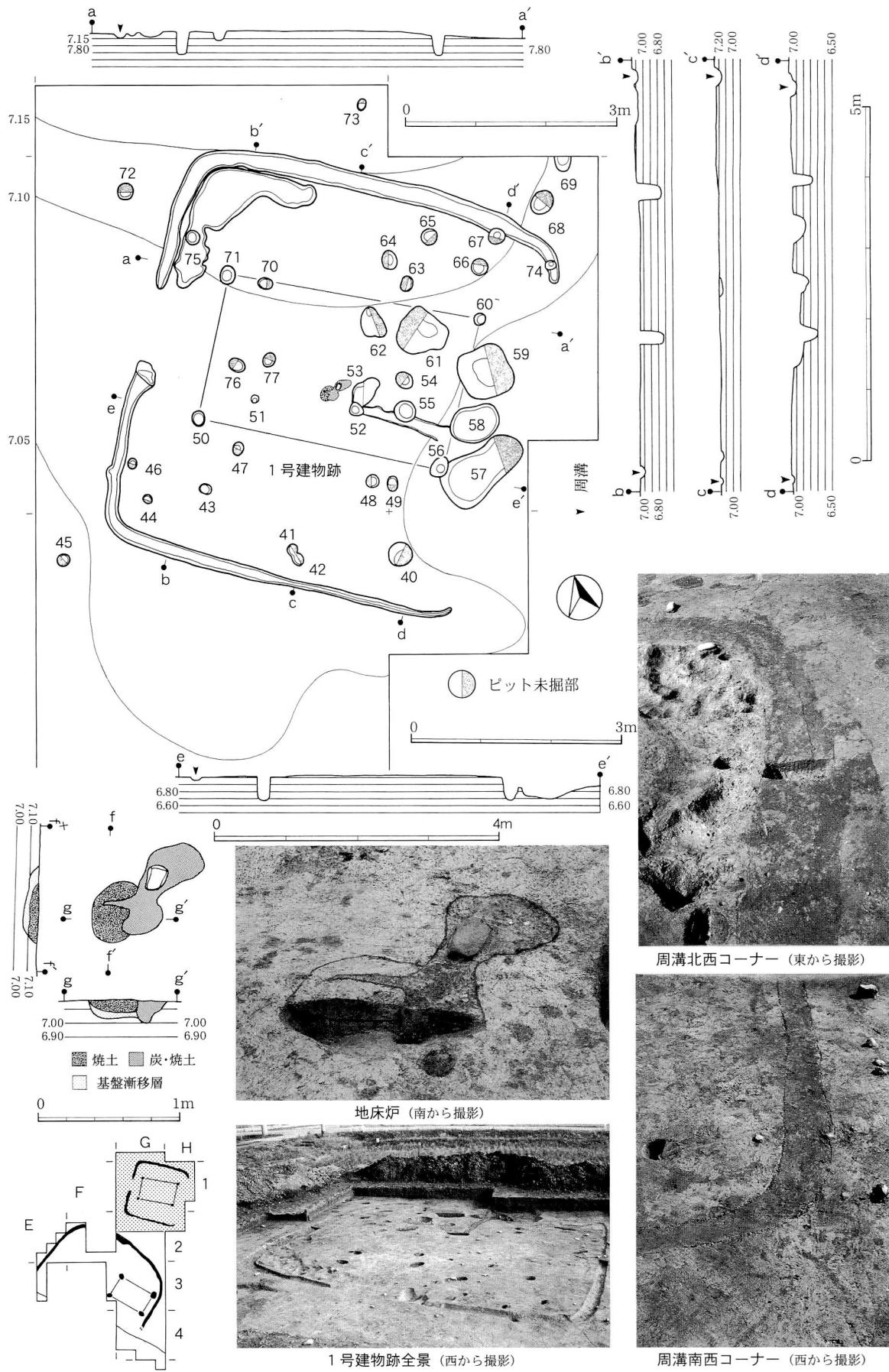
第14図 1997年発掘区の遺構



矢垂川旧河道の地層断面



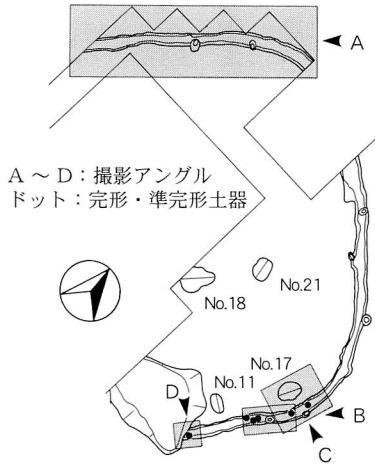
矢垂川旧河道古段階の河岸斜面 (南から撮影)



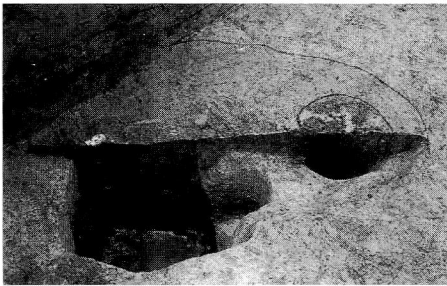
第17図 IIF区東部の遺構-1



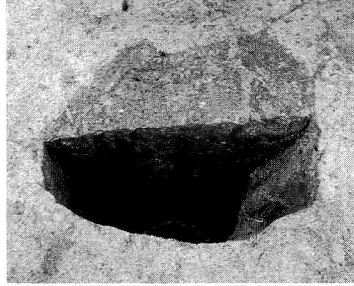
周溝西部 (アングルA)



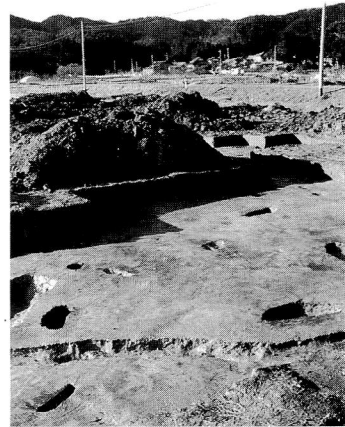
北西から見た周溝東部の確認状況



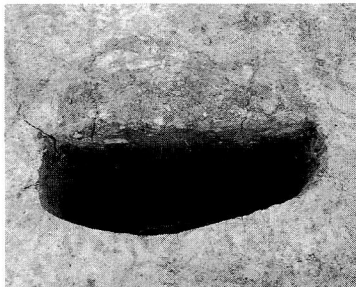
南東から見たピットNo.18



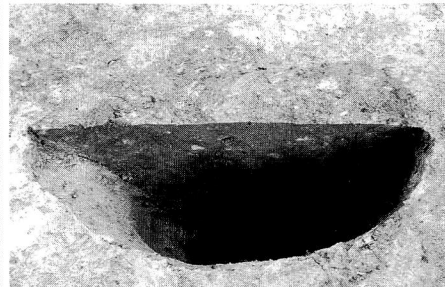
東から見たピットNo.21



南東から見た2号建物跡



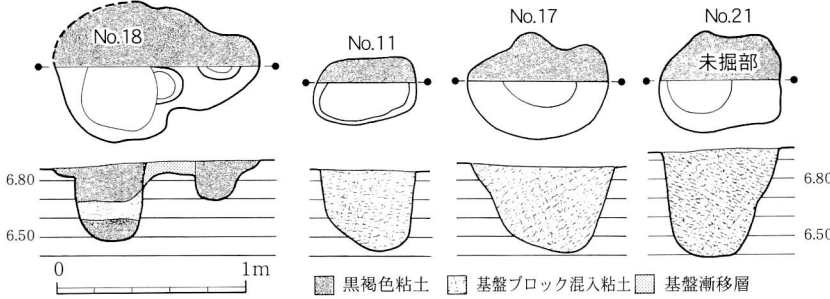
北東から見たピットNo.11



北西から見たピットNo.17



周溝東部の一括土器 (アングルB)



周溝東部の一括土器 (アングルD)



周溝東部の一括土器とピットNo.17 (アングルC)

B 溝

微高地南部のⅡE区南端と北部埋没谷南岸のⅡG区から1条の溝が確認された。このほか、1997年発掘区の微高地においても南部と北部に溝が構築されていた(第14図)。規模や形状はまちまちであるが、いずれも微高地の傾斜と同一ないしは直交方向に走る点の特徴である。

ⅡE区溝(第15図)

幅20cm～30cm・深さ10cm前後を測り、調査区南端を北西-南東方向に直線的に横切るものである。埋積土(黒褐色粘土)内から古墳時代前期初頭の土器が若干出土した。溝の連なりは調査区内7mの間で確認したにすぎず、全体規模や性格は明らかでない。

ⅡG区溝(第20図)

微高地最高部の東端付近に位置する。幅30cm・深さ8cmたらずの小規模な溝で、谷と直交方向に掘り込まれているが、調査面積の制約により存在のみが確認できただけである。周囲のⅡ層内から古墳時代前期初頭の土器が比較的まとまって出土しており、ほぼ同時期の遺構と考えられる。

C 土坑

本年度の調査区からは、合計178箇所の大小ピットが確認された。このうち比較的規模が大きく、土器を伴ったものは次の3基である。

ⅡE区No.59(第15図)

溝の北東70cmたらずに隣接する。平面形は長軸1.1m・短軸1.0mの不整楕円をなす。最大深度は37cm。基底部から上面に至るまでは、堆積土と遺物の出土状態に明確なレベル差を認める。下部(4層)は黒褐色粘土と基盤粘土ブロックの混在層である。中部層(3層)の上半には軟質、下半には緻密な黒褐色土が堆積する。このうち最上部(1層)の中央部には、最大5cmの厚さをもった焼土層が90cm×45cmほどの範囲にレンズ状に堆積し、同層下面(2層)には焼土粒子や大型木炭が多量に含まれていた。

土坑内からは、口縁部遺存資料集計にして31個体分の土師器が出土した。ほとんどが上部層からの出土で、焼土層下に大型破片、最上面に微細破片が密集していた。前者の資料は時期幅があり、溝出土資料との接合関係を認める資料1個体を含む。後者については、意図的に破砕された可能性もある。

ⅡF区No.57(第17図)

1号建物跡周溝の東部想定ライン上から、その内側にかけて存在する。平面は不整形な長楕円をなし、長軸1.6m・短軸0.5mを測る。最大深度20cmほどの皿状の落ち込みで、埋積土(Ⅲ層)の上部から遺存率の高い高杯2点が出土した。本土坑は1号建物跡と構築方位を異にしており、別個の遺構とみなされる。

ⅡG区No.6(第20図)

調査区東部の低湿地に位置する。トレンチ内の形状からみて、平面形は円もしくは楕円と予想される。セクション面での最大幅は1.3m前後、基盤層への掘り込み深度は45cmを測る。イネ科植物を多量に含む軟質粘土が土坑内全体に堆積しており、内部から古墳時代前期の土師器片が若干出土した。

倒木痕(第11・18・20図)

時期の特定は難しいが、ⅡF区・ⅡG区と1997年発掘区から、倒木痕とみられる落ち込みを見いだした。その根拠は、埋積土内において基盤粘土と上部堆積土が上下逆転するなどの錯綜した堆積状態を示すことによる[辻本1985]。ⅡF区ピットNo.112は全体に不整形な平面形をなし、第18図左下に示す堆積状況から倒木痕と判断した。ⅡG区17～20列のピットNo.4もこれと同様の特徴をもつ。このほか1997年発掘調査区では、北部埋没谷の南岸から微高地北部にかけて同様の落ち込みが比較的密に分布していた(第11図)。さらに、埋没谷の北岸斜面と1986年試掘区からは、樹根そのものも確認されている(第11図)。

D 集石 (第20図)

II G区の西部から垂角礫を主とする礫200点以上が密集状態で出土した。地形的には、北部埋没谷南岸の傾斜変換点付近に位置する。堆積レベルはII層下半で、古墳時代前期の遺物包含層内にあたる。構成礫のサイズは最大60cmを測るが、大半は拳大程度。礫の分布はA列以南に中心をもち、B列北半でまばらとなる。東西の分布幅は、調査区内で3.8mほどである。西に隣接して大型砥石2点が出土した。

(4) 古代以降

時期の特定には至らなかったが、古代以降に属することが確実な構築物は次のとおり。

A 木道 (第37図左上)

1997年発掘区の北部埋没谷上部から、谷を横切る樹木列が確認された。大型樹木30本を50cm前後の幅で全長12.3mにわたって配列するものである。使用される樹木は最長3.6mにおよび、一部に建築部材も含まれている。全体的な並びは下流方向の東側へカーブを描く。洪水などに伴い変形したためであろう。樹木群は、谷の埋積が進行し緩やかな窪地をなすに至った時点で集積されており、湿地の往来のために設けた「木道」と見なすのが妥当である。ただし同一層準から遺物は何ら出土しておらず、現時点において構築年代を判断することは困難である。

B 矢垂川旧河道 (第16図)

II F区西部と同地区東部の南端から、矢垂川の旧河道を確認した。前項で述べたように、本地区南部にかつて存在した矢垂川の流路は、古墳時代以前に成立したものと考えられるが、今回確認された河川跡には、新旧二段階の河岸が存在する。前者は、上面～中部層にかけて基盤粘土混入層を多量に含む点で、後者とは明瞭に区分できる。下底部に堆積する砂礫層内に近世～近・現代の遺物が包含されるところから、1958年～59年の耕地整理時に埋め立てられた「旧矢垂川」と断定できる。

一方古段階の流路は、軟弱な暗青褐色粘土に覆われる。層内からの遺物は乏しいが、近世以降の陶磁器類は一切含まれておらず、少量の須恵器片などが出土した程度である。斜度30°前後の河岸斜面には、最大50cmほどの円礫や垂角礫が東側を中心に分布していた。東端部では階段状をなした箇所もあり、流路の利用や護岸を意図した構築物とみなされる。

4 遺物

縄文時代前期から近・現代に至る遺物が出土した。中世までの遺物について、隣接する1997年発掘区出土資料の一部を含め記述する。土師器の出土量に関しては、小グリッドごとの集計数に基づいている。同一個体が複数グリッドにまたがる場合は別個に加算されており、実質的な個体量とは異なる点を明記しておく。

(1) 縄文時代

縄文土器と石器類からなる。住居跡などの遺構が確認できなかった点と呼応するように、遺物量は限定されている。

地区	縄文土器			弥生土器	古墳時代			古代須恵器	中世陶器	縄文・弥生時代の石器										管玉	中世銭貨	その他		
	前期	中期	後期		土師器	統縄文	須恵器			石鏃	礫石鏃	磨石	磨斧	石匙	石鏃	石棒	玉類	石核	剥片			砥石	土鏃	焼粘土
II E区	-	2	-	3	40	1	+	4	1	2	1	3	1	-	-	-	-	7	176	-	-	1	-	-
II F区西部	+	1	-	2	24	-	2	1	1	7	4	2	-	-	-	-	-	6	169	-	-	3	-	-
II F区東部	+	2	+	-	263	1	1	2	+	15	8	8	5	1	1	1	1	18	565	-	-	2	-	4
II G区	-	2	-	-	129	-	-	1	-	3	-	1	-	1	-	-	-	1	188	-	5	2	1	1
TP.10	-	-	-	-	20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	1	-	-	1	-

第6表 御井戸B遺跡2003年調査区出土遺物一覧 (土器類：実数は口縁部集計・+：体部資料が存在)

A 縄文土器

ⅡE区～ⅡG区から7個体・1997年発掘区から34個体出土した。時期的には、早期最終末ないし前期初頭から後期中葉までの資料が不連続な状態で見いだされ、御井戸A遺跡の主要形成期にあたる晩期土器群は確認できなかった。

早期最終末～前期前葉（第21図）

いわゆる含繊維土器。口端集計で5個体にとどまるが、南部低地に偏る形で比較的まとまった量の体部破片が出土した。若干の時期幅をもつようで、角田山麓の同時期土器群と比較しながら特徴を要約する。

1・2は、撚りの粗い0段多条原体を使用し、器表に斜縄文、裏面に条痕文を施す。このうち前者は、幅5mmほどの太い沈線を横位・斜位に加える。本遺跡の中では最も古様相を認めるグループで、早期最終末～前期初頭に位置づけられる。至近距離の豊原遺跡から従来断片的な資料がえられているものである。

6～11は、0段多条原体によって非結束羽状縄文が施される。縄文の一施文幅は、2.5cm～3.0cmほどを測る。口縁部文様帯を形成するものとこれを欠落するものがあり、8には縄（R）の側面圧痕と楔状刺突、7には口端にのみ刻目を加える。関東編年による花積下層式段階に対比できるグループで、角田山麓では新谷〔巻町1994〕・豊原〔小野ほか1998〕・南赤坂〔巻町教委2002〕に続く資料となる。体部に小段をもった3は、本段階～後続段階の時期幅の中でとらえられるものであろう。

12・13は突刺文が施される。時期の特定は困難であるが、布目～新谷段階に多用される手法である。12は横位の刺突列が密接施文され、器面全体が同一文様で覆われたことも想定できる。13は体部下端にラフな刺突が1列めぐり、底部は揚底ふうの平底をなし、その中央に径7mmの孔が焼成以前に穿たれる。前期初頭の北陸～新潟県南部では、底部穿孔尖底土器の存在が知られている。いずれも焼成前の穿孔によるものであるが、本例のような平底は皆無であり、極めて特異な資料と言わざるをえない。5は複節原体によって非結束羽状縄文を施す。これも現時点では類例が乏しく、編年的な位置づけは保留する。口縁下にみられる上下2孔は、焼成前の穿孔による。

中期前葉（第22図14～25・28）

口端集計で9個体を数えるが、破片総数としては減少化する。対照的に分布域が拡大し、微高地上や北部の谷周辺にまで遺物の散布を認める点が特徴である。本時期の資料も新旧3段階に区分できる。

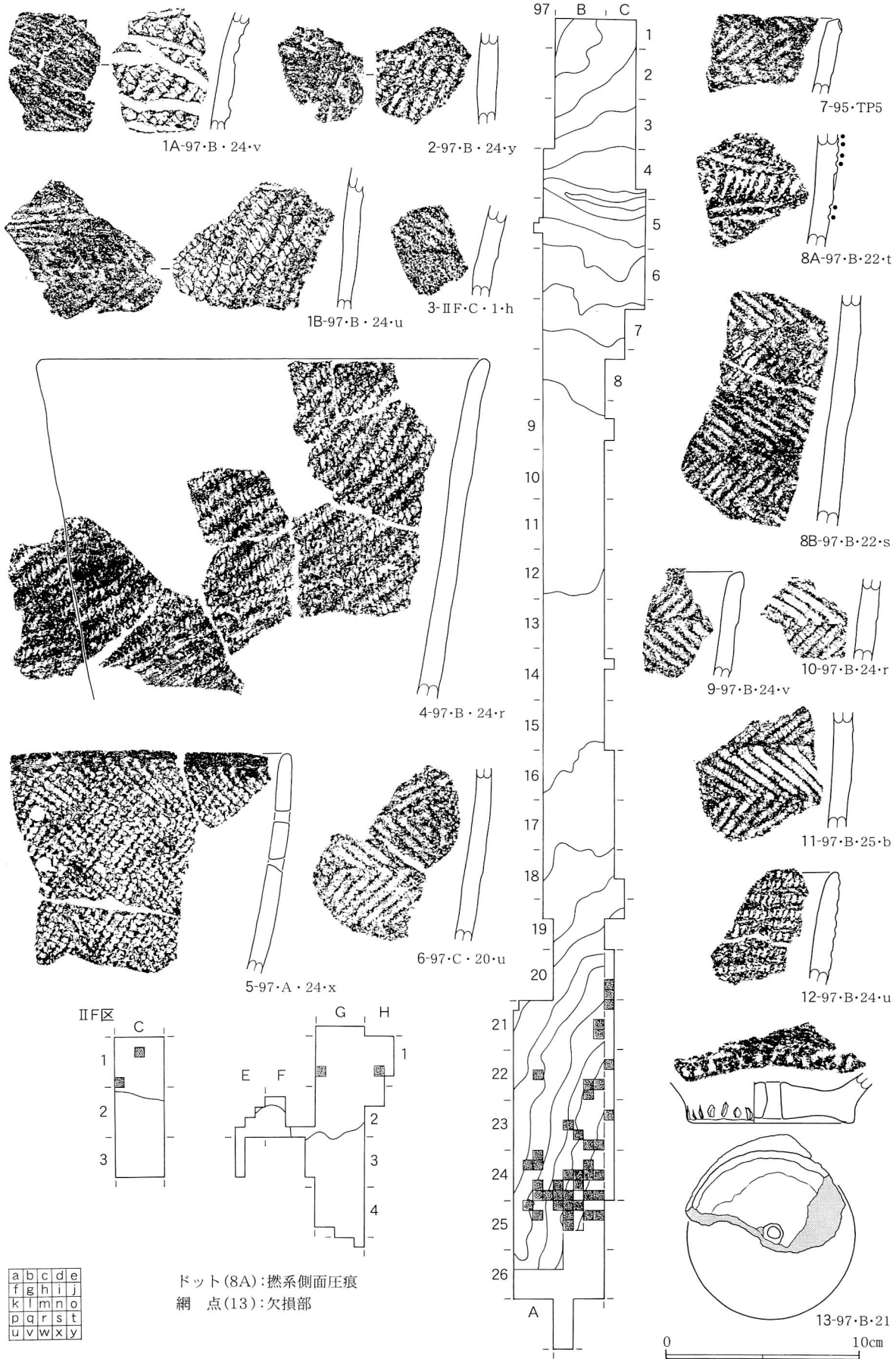
14は「く」の字状の断面形態をもった口縁部下端の小破片。幅4mmの細い竹管平行沈線によって、横位区画と斜位集合沈線を施す。中期前葉1期（中期初頭）の資料である。15の沈線幅は5mm。幅1cmの間隔をとりながら横位沈線を施したのち、口端下の区画内に縦位細線を充填する。前葉3期の資料と見られ、14とともに1例ずつがえられたのみである。

16～25は幅6mm以上の太めの工具を用いる。17～21は前葉5期の指標資料で、竹管工具の先端刺突によって蓮華文や楔状刻目文が施される。25も同時期と考えられ、口縁部の竹管沈線間に交互刺突が加えられる。28は縦位回転による結束羽状縄文。前葉4期～5期の所産であろう。

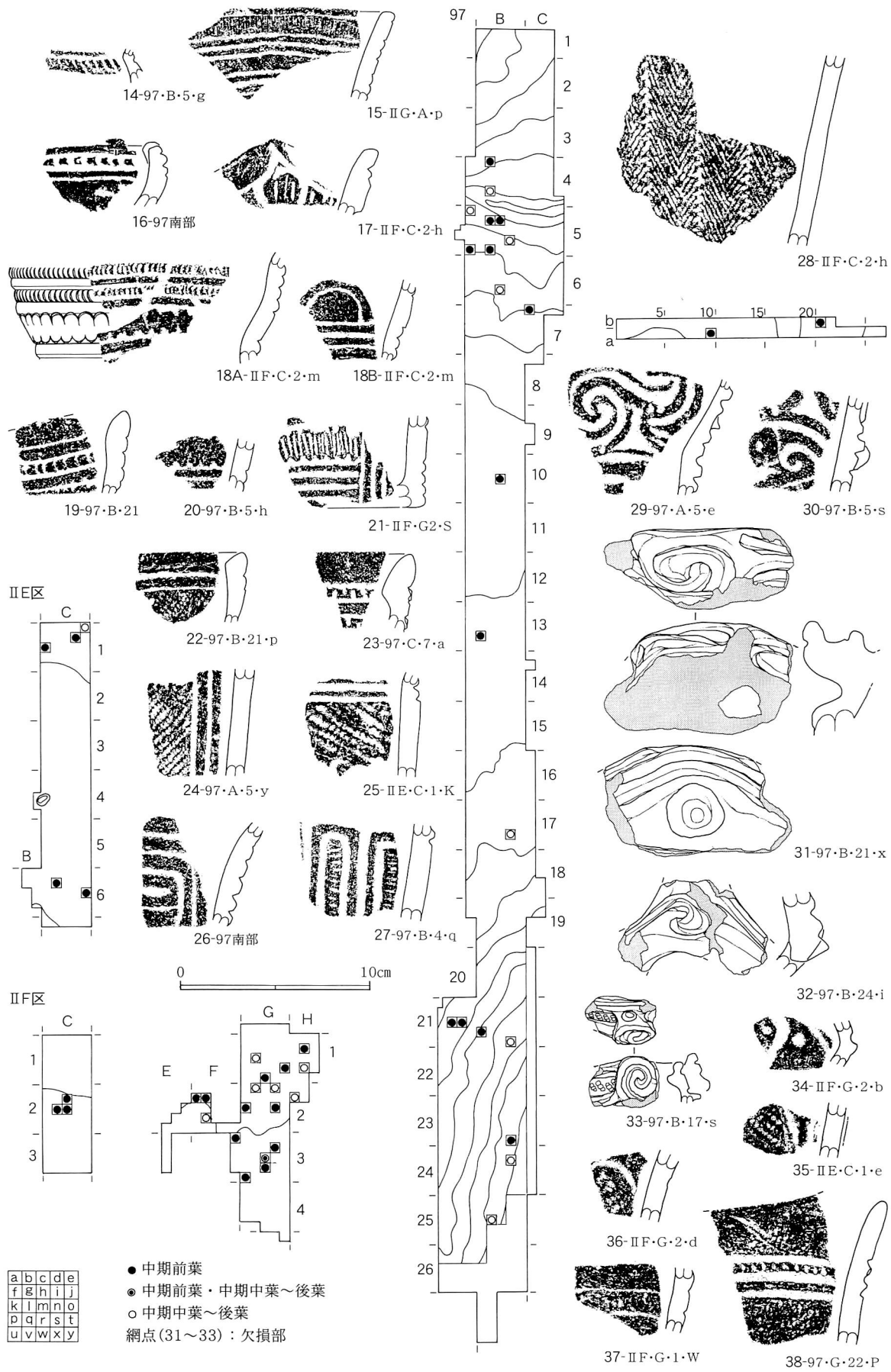
中期中葉～後葉（第22図26・27・29～37）

出土量はさらに減少し、中葉・後葉を合わせ5個体を数えるのみとなる。分布図には両者の別を示さなかったが、ともに中期前葉と類似した状況を示す。

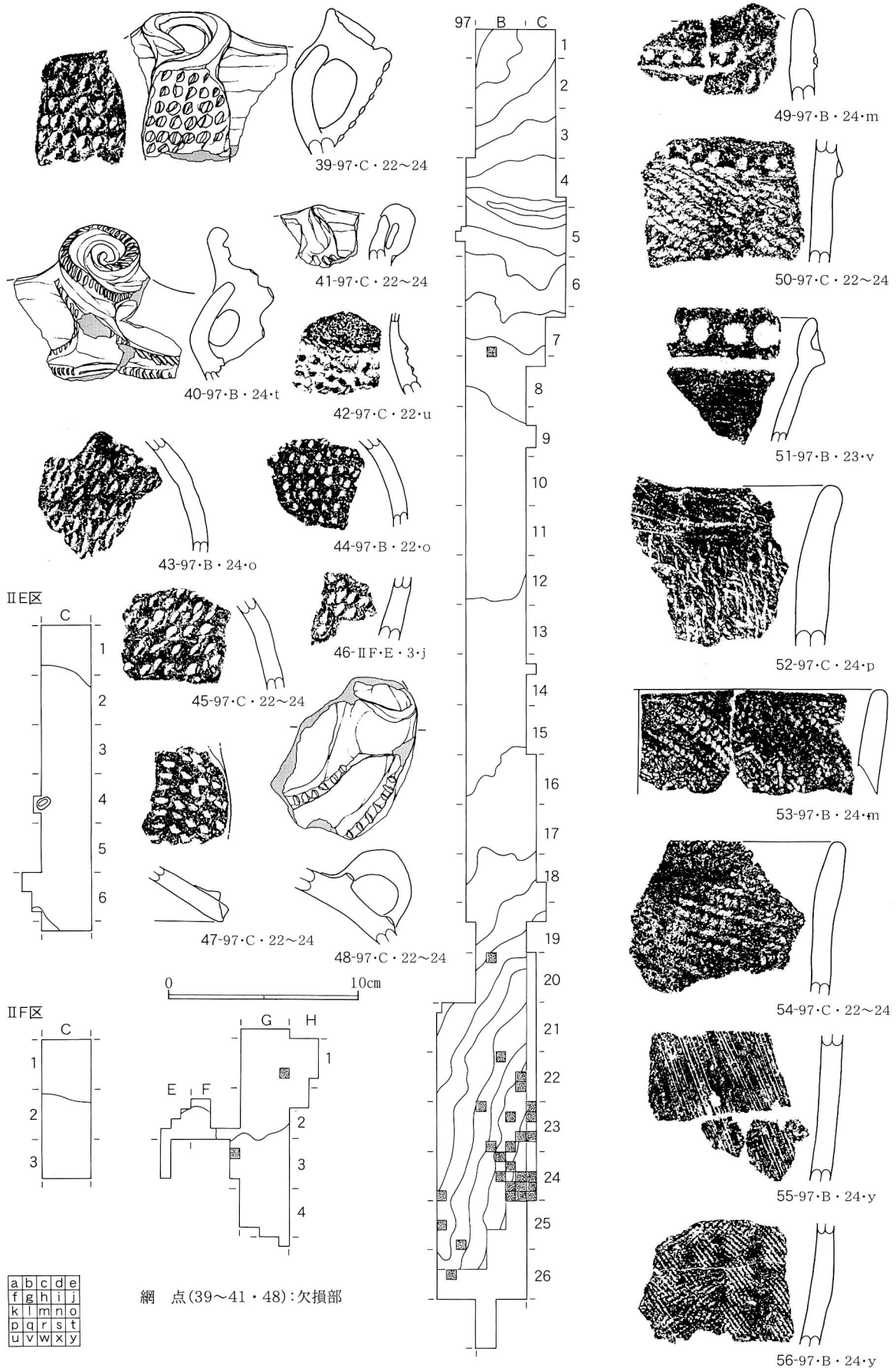
26・27は中葉前半の資料。竹管平行沈線を棒状工具でなぞり、前者の空白部には横位沈線が充填される。29～36は隆帯を文様要素とし、主として中葉に属すグループ。29・30は火炎類型、31～36は東北系列の土器である。37は磨耗により不鮮明であるが、櫛歯状工具によると見られる刺突が沈線間で観察できる。北陸の串田新系土器か。38は口縁部に横位沈線を施したのち刺突を加えるもので、所属時期は明確でない。



第21図 縄文土器-1



第22図 縄文土器-2



網点(39~41·48):欠損部

a	b	c	d	e
f	g	h	i	j
k	l	m	n	o
p	q	r	s	t
u	v	w	x	y

後期前葉～中葉（第23図）

口端集計による時期別の内訳は、前葉前半9個体、前葉後半2個体、細別時期が判然としない縄文・無文資料9個体である。本時期土器群は、前期と同様に南部低地へ偏りをもつ。

39～50は前葉前半の三十稲場式。口縁部に設けた隆帯下に刺突や縄文を施す甕・深鉢（39～42・49・50）と蓋（47・48）からなる。39～41は、この時期特有の橋状把手。51は前葉後半の南三十稲場式で、口縁部に設けた肥厚帯上に円形の凹みが連続的にめぐる。

52～55は、主として前者に伴う縄文・条線施文土器。56は繊細な縄によって非結束羽状縄文が施される。後期中葉の所産とみられ、現時点では本遺跡縄文土器の下限資料となる。

B 石器

時期の判然としない資料が大多数を占めるため、縄文～弥生時代の大枠でとらえられる石器を本項で取り扱う。本年度の調査で出土した石器類は、製品65点と石核・剥片類1,130点である。前者については食料の調達加工具（A群）・工具類（B群）・非生産用具（C群）に大別し、1997年発掘資料を含めた概要を述べる。

A群石器

石鏃30点・礫石錘72点・磨石・敲石類39点・石皿3点が出土した。前三者の特徴は次のとおり。

石鏃（第24図1～17）

ⅡF区を中心に出土した。石材はバラエティーに富んでおり、その別を番号末尾に示した。基部形態としては、弱度凹基（1～4）8点・強度凹基（5・6）2点・尖基（7）1点・有茎（8～17）11点を数える。以上の中には所属時期の特定がある程度可能な資料が存在しており、押圧剥離が入念な弱度凹基鏃（1・2）は縄文時代前期前葉、側縁が鋸歯状に加工された強度凹基鏃（6）は中期前半、基部にアスファルトが付着する有茎鏃（15）は晩期、基部が小さく作出された有茎鏃（14）は弥生時代の所産と考えられる。晩期土器群の欠落や弥生土器の安定的な存在から見て、有茎鏃の中に後者の資料が少なからず含まれる可能性もある。

礫石錘（第25図）

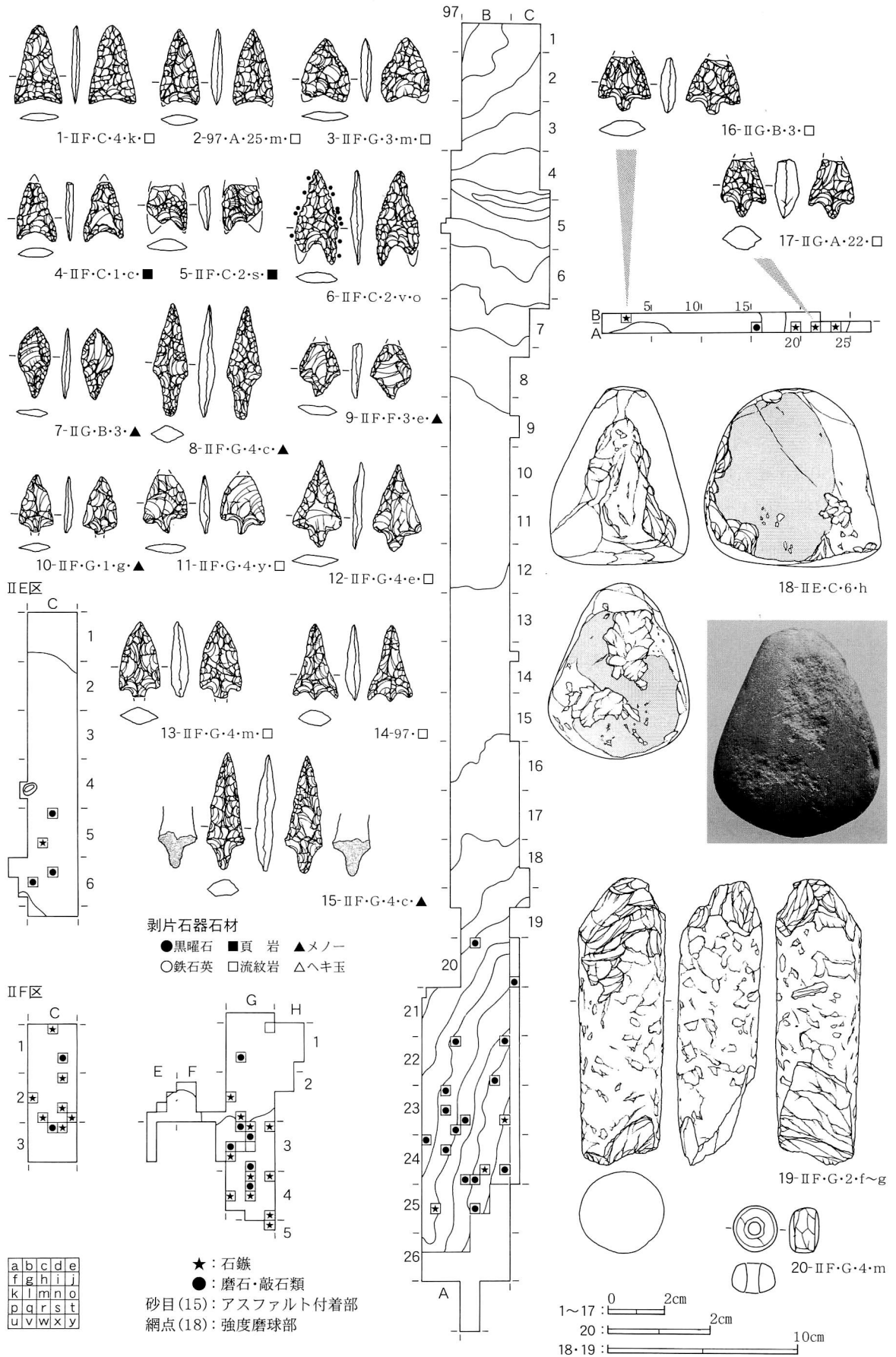
1997年発掘区の南部低地から、全体の78%にあたる56点が出土した。これに次いでⅡF区での出土量が多く、低湿地との関連性を示唆する分布状況をみせる。使用石材は安山岩を主体とする。

抉加工部間での計測幅と重量分布を第25図上段と中段に示す。近隣の新谷（前期前葉）および南赤坂（前期終末～中期初頭主体）と比較した場合、本遺跡のサイズはいくぶん小型傾向にある。右下は、上段に示すサイズ区分別に抉加工の在り方を表したものである。分類基準は、エッジの状態に基づき、丸みを帯びるもの（a）・やや先鋭（b）・シャープ（c）に大別し、保有部位を加えた組み合わせによって表下段のような細分を行なった。本遺跡におけるIa類の割合は31%を記録する。この数値は、南赤坂の58%を明らかに下回るもので、相対的に粗雑な作りと見ることができる。所属時期については、前期および後期土器群との分布の類似性が手がかりとなる。後期に属す礫石錘の多出遺跡が新潟県内において内陸部に偏る現状に基づけば、前期前葉に位置づけられる可能性が高いものと考えておく。

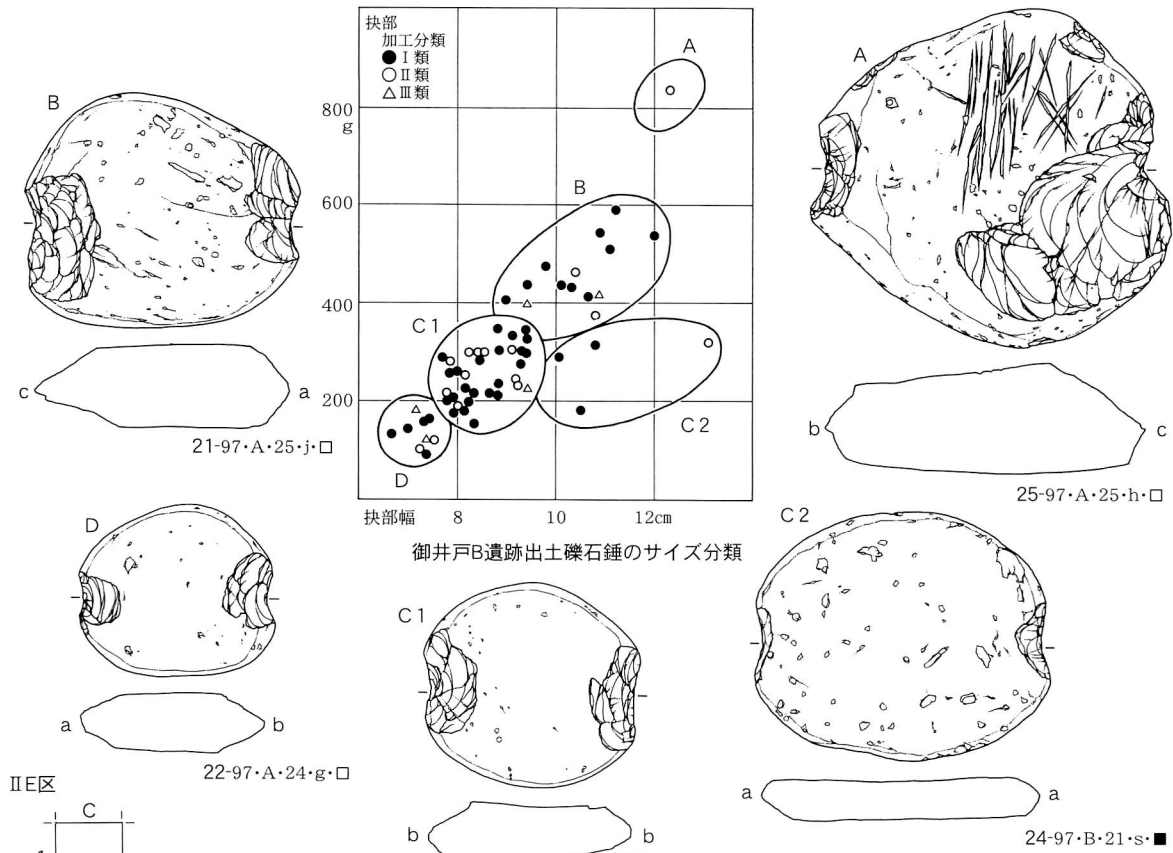
磨石・敲石類（第24図18）

微高地南部と南部低湿地を中心に出土した。使用痕の性状・部位に基づく出現率は、平坦面磨耗率77%・平坦面敲打率29%・側面敲打率19%・先端敲打率23%である。礫石錘と同様に、使用石材は安山岩を主体とする。所属時期が定かでない資料が大半を占めるため、特徴的な形態をもった1点のみを図示した。

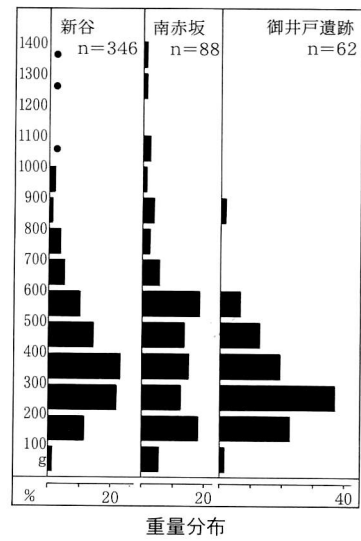
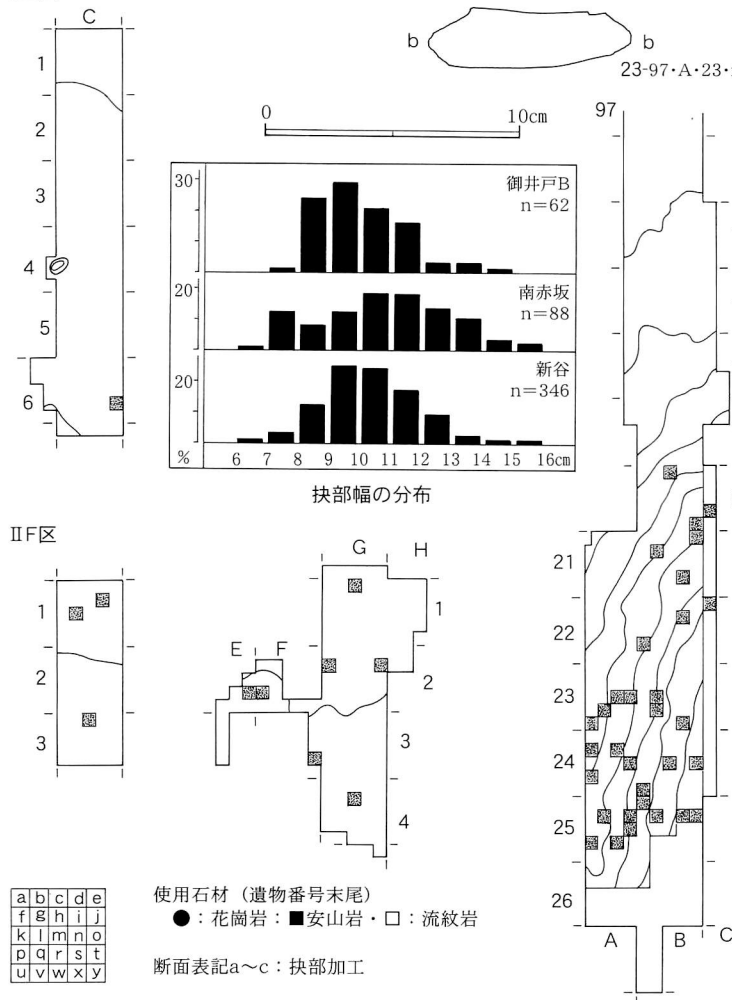
第24図18は、ⅡE区南部の古墳時代遺構集中域から出土した。石材は石英閃緑ヒン岩。全体にスタンプ形を呈し、下底面と側面平坦部に磨耗と部分敲打、上端と側面の稜に面的敲打を認める。近隣の新谷や布目に類例があり、前期前葉に属す可能性が高い。ただし本例底面の敲打痕は、磨耗面と風化の度合いに明瞭な



第24図 石器-1



II E区



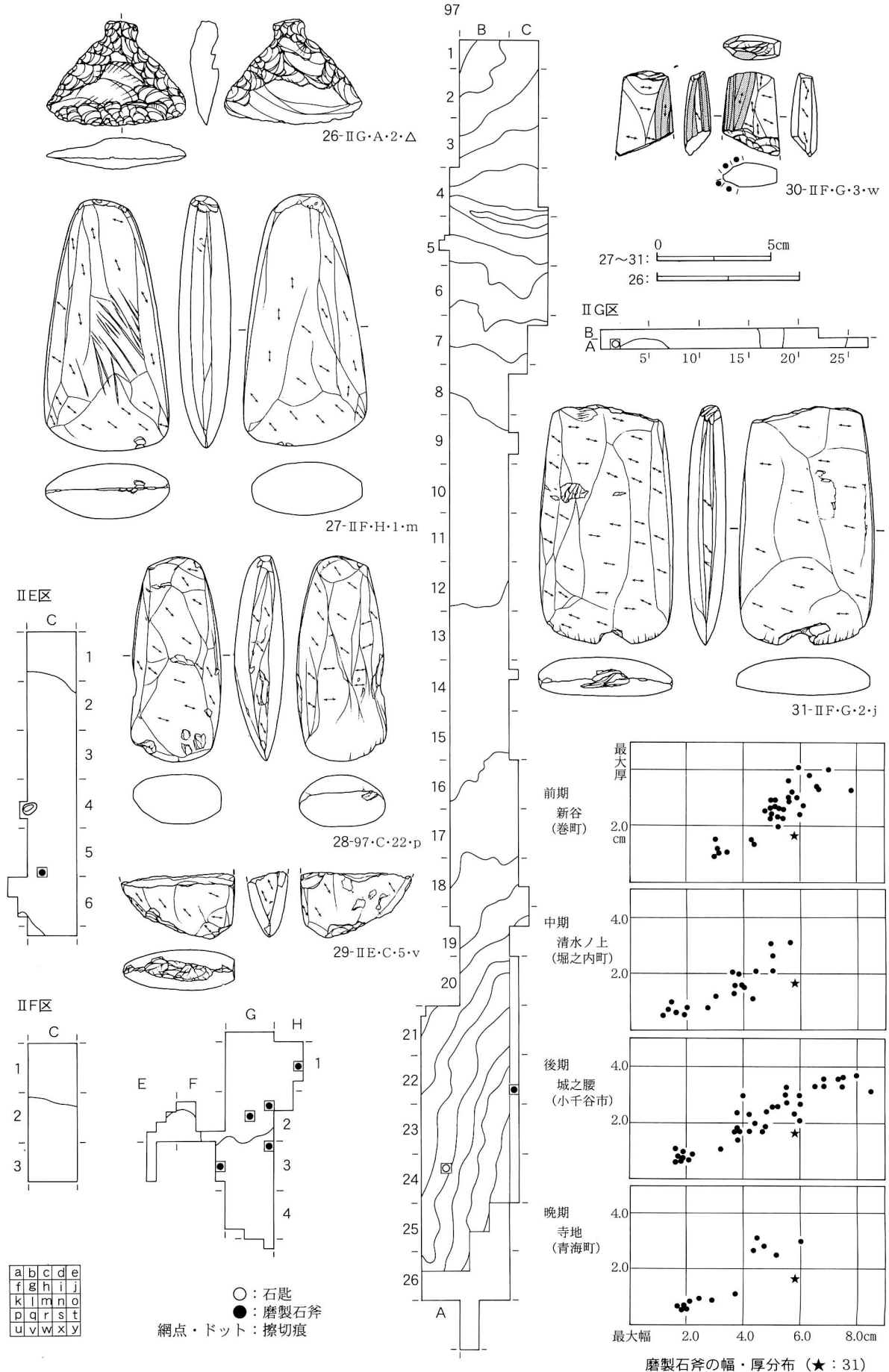
サイズ	I a	I b	I c	II a	II b	III	TOTAL
A					1		1
B	6	2	2	2		2	14
C1	10	10	3	4	6	1	34
C2	2	1		1			4
D	1	2	2		2	2	9
TOTAL	19	15	7	7	9	5	62

サイズ別に見た抉部加工

抉部加工分類

I a類: 加工a+a
 I b類: a+b
 I c類: a+c
 II a類: 加工b+b
 II b類: b+c
 III類: c+c

第25図 石器-2



第26図 石器-3

違いがあり、後年再利用されたことが明瞭にうかがえる。

B群石器（第26図）

石匙3点・磨製石斧8点・石錐1点が出土しており、石匙（第26図26）と磨製石斧（同図27～31）を示した。縄文時代に属す可能性が高い資料として、このほか粗粒砂岩製の砥石3点がⅡF区からえられている。

磨製石斧はバラエティーに富む。図示した資料の石材は、27が凝灰岩、28～30が蛇紋岩、31がロディン岩。このうち所属時期の特定がある程度可能な資料は30の小型石斧で、擦切痕をとどめる点から中期前半の所産と考えられる。28は断面楕円形をなした片刃石斧。類例に乏しいが、前期に属す可能性がある。

27は、側面が丸みを帯びた撥形石斧。ほぼ完全な形を留めるが、左主面に線条痕、右主面の中央に風化の度合いが異なる磨耗痕をもつ。刃先の中程には、刃部再生研磨とはみなしがたい面的研磨痕も認める。1号建物跡周溝内のⅢ層から出土しており、砥石として後世再利用されたことがうかがえる資料である。

31は1号建物跡の周溝南コーナー隣接地点から基盤層に一部貫入した状態で出土した。使用石材は、乳白色の岩体に黒褐色の縞が嵌入する。基端に敲打、刃部中央に欠損を認めるが、現存長は10.5cm、幅幅5.8cm・厚さ1.6cmを測る。新潟県内における各時期資料との幅・厚比の比較を第26図右下に示した。本例は類例に乏しい石材とともに、極めて扁平な形状をなす点においても縄文時代の石斧とは一見して異質な印象を与える資料と言える。所属時期ならびに系統については、今後の検討課題としたい。

C群石器（第24図19・20）

石棒・丸玉・石冠各1点が出土した。19は両端が欠損する粘板岩製の石棒で、1号建物跡の西側隣接地点から出土した。全面に粗い敲打整形痕を残す。20はⅡF区南端付近出土の丸玉。滑石を石材とする。ともに縄文時代後期の所産か。

石核・剥片類

縄文土器の出土総量をはるかに上回る石核・剥片類が出土した。主要な石材は流紋岩（44%）と玉髓（21%）で、黒曜石は僅か8点にとどまる。調査区別に見ると、ⅡG区において青みがかった流紋岩の出現率が目立って高く（51%）、同地区出土の有茎鏃（第24図16・17）も同一石材を使用する。御井戸A遺跡の剥片石器の中には類例が乏しいところから、弥生時代中期に属す可能性が指摘できる。

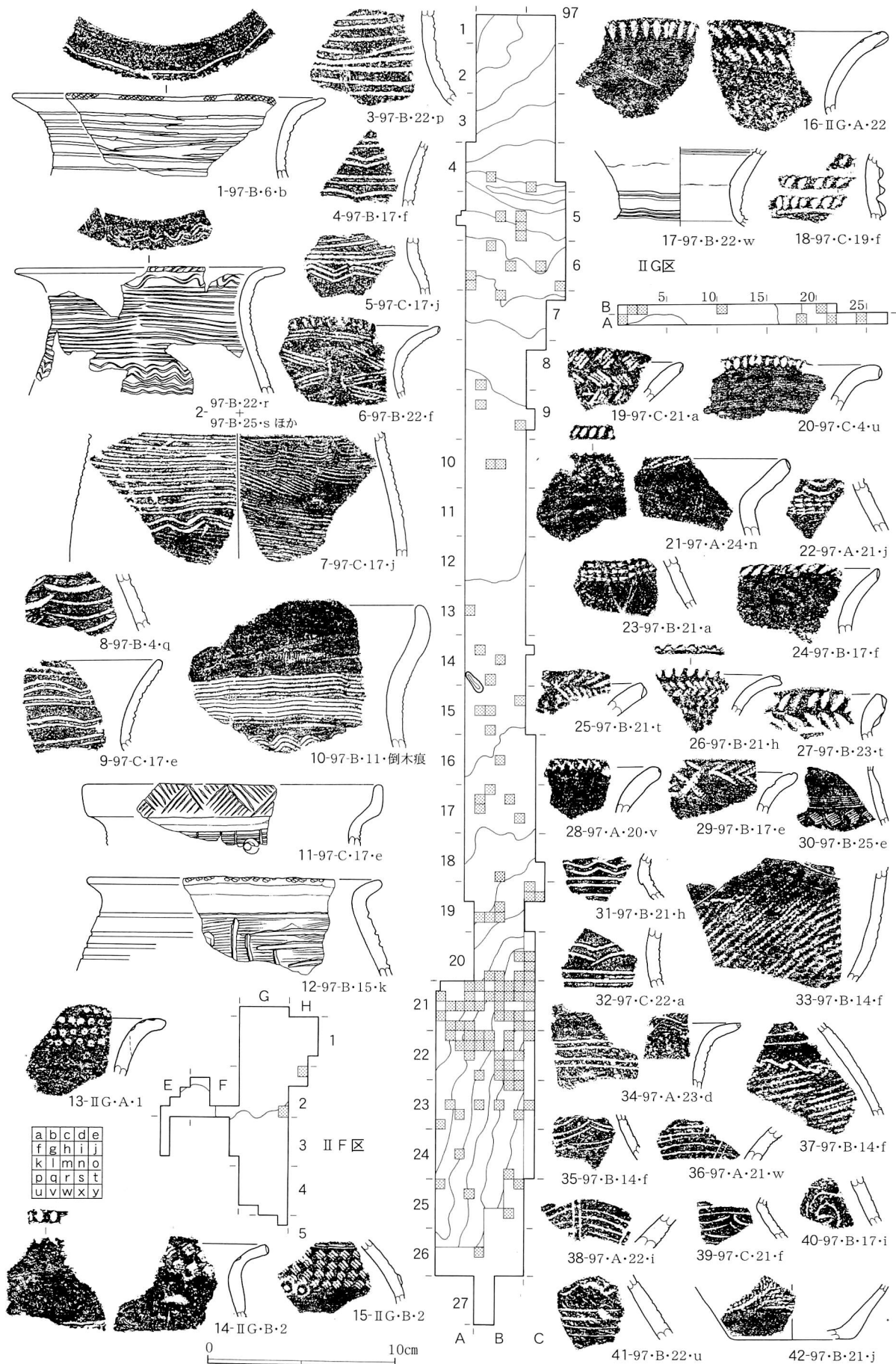
（2）弥生時代

比較的まとまった量の弥生土器と若干の石器が出土した。

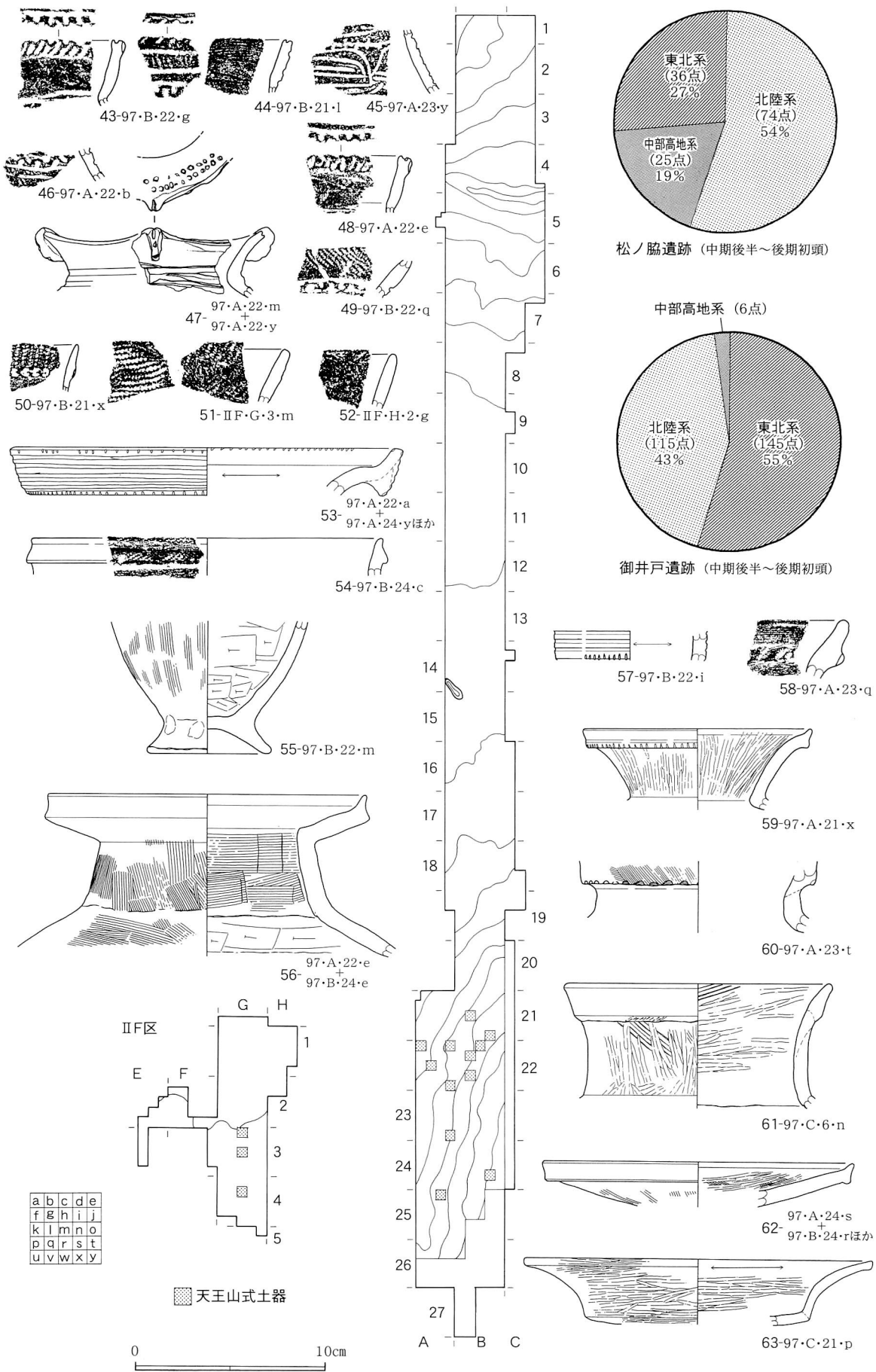
A 弥生土器

中期を主とする弥生土器がえられた。古墳時代土器との峻別が困難な資料を除く破片量は、2003年調査区から20点、1997年発掘区から326点である。型式別の内訳は、山草荷式89点、小松式57点、宇津ノ台式31点、栗林式6点、天王山式15点で、このほか櫛描文58点、捺糸文6点、縄文71点（ハケ目を複合19点）の各施文資料がある。第27図に中期後半土器群（山草荷・小松・宇津ノ台・栗林）、第28図に天王山式および弥生後期～古墳時代移行期の土器を示した。

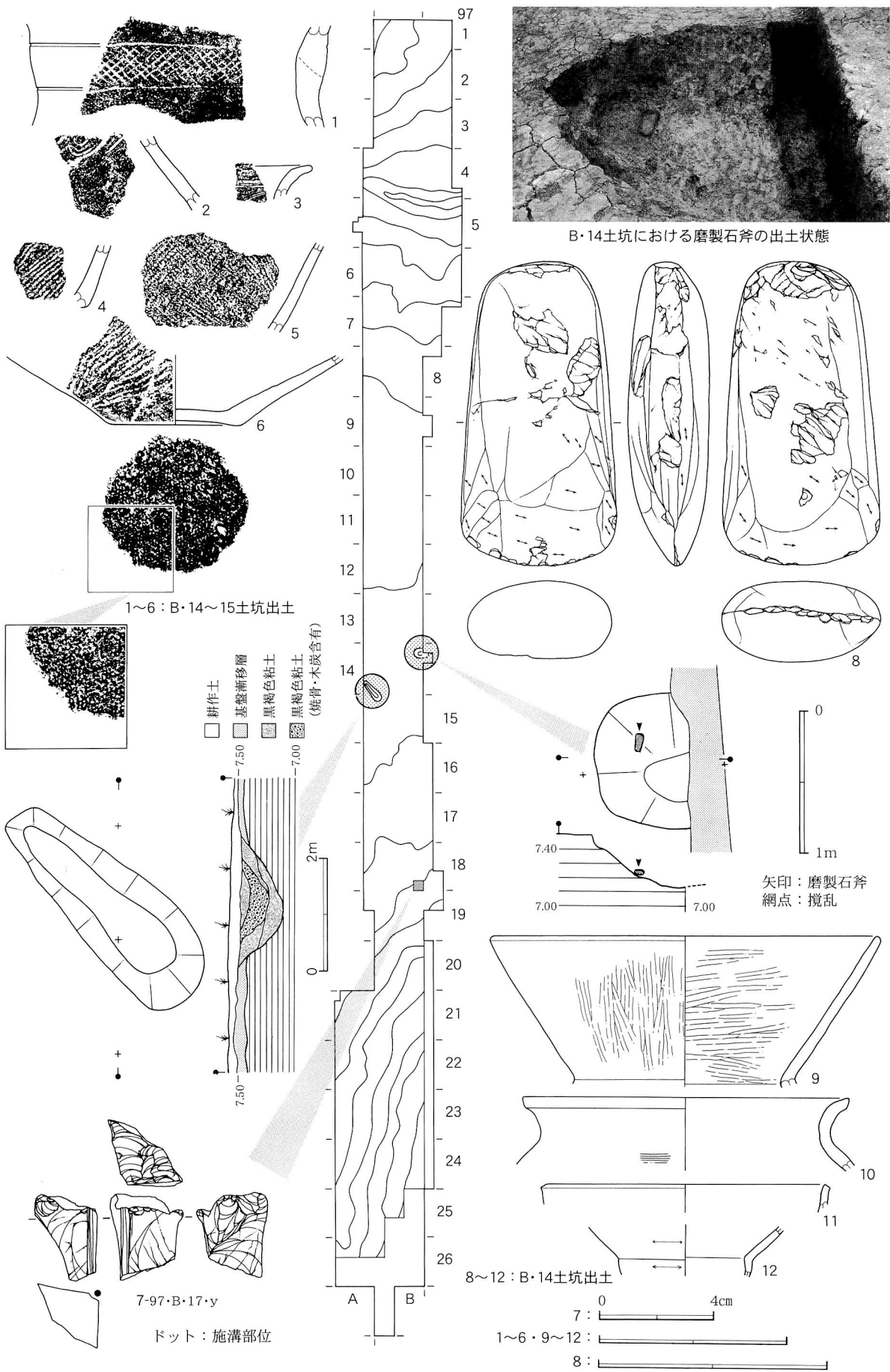
第27図1～9は宇津ノ台式（東北系）、10～12は栗林式（中部高地系）、13～30は小松式（北陸系）、31～42は山草荷式（東北系）に該当する。2は体部に波状文をめぐらしており、北陸的要素も合わせもつ。6の頸部には、櫛状工具による条線を斜めに引いたのち短い弧状沈線を加えて菱形文が描かれる。18は頸部に隆帯をめぐらしたのち、ハケ状工具によって刺突が加えられる。26は口縁端部に鋸歯状文、28は×状の刺突が口端に施されており、他の北陸系土器に較べ古い時期にあたる下谷地遺跡段階に属すものと考えられる。以上の資料は、南部低地を中心としつつ、中央微高地や北部埋没谷にも分布する。各型式に分布上の違いは見られなかった。



第27図 弥生時代中期後半の土器 (宇津ノ台・粟林・小松・山草加式土器)



第28図 天王山式土器と弥生～古墳時代移行期の土器



第29図 弥生時代の石器と遺構

第28図43～52は天王山式土器。47は波状の口縁に棒状の貼付けがなされ、その上端と口縁内面には円形刺突が加えられる。51・52はⅡF区から出土したもので、前者は表裏両面に縄文LR、後者は口端に斜めの沈線が施される。少数資料ではあるが、本型式資料の分布は南部に限定されている。同図53～63は、後期後半または文様をもつ土器群。54の口縁部には縄文LRが施され、口端は上に摘み上げられる。53・57・60は、有段部や口端に刺突がめぐる。58は隆帯上、60は有段部にハケ状工具による刻みが加えられる資料である。

第28図右上に、和島村松ノ脇遺跡と本遺跡における出土土器の系統別割合を示した。前者は報告書〔和島村教委1998〕の観察表掲載資料から作成したものである。中部高地系は栗林Ⅰ・Ⅱ式および百瀬式、東北系は山草荷・宇津ノ台・天王山式が該当し、おおむね中期後半から後期初頭の資料と言える。本遺跡では、これに加えて櫛描文を北陸系に加算した。ともに厳密な個体数の割合を示すものでなく、また本遺跡については土師器とした甕の中に北陸系土器が含まれるおそれもある。以上のような問題があるものの、両者を比較してみると、本遺跡で東北系が主体を占めるのに対し、松ノ脇では北陸系が主体を占め、なおかつ中部高地系の比率も上回る、という違いがある。松ノ脇遺跡は本遺跡の南38kmに位置する。両遺跡に見られる上記のような在り方は、土器系列における構成比率の境界を考える上で注目される。

中期後半土器群と天王山式土器の分布状況には、共通点と相違点が指摘できる。すなわち、南部低地に中心を置きつつも、後者の分布が南部に限定されることである。ⅡF区出土の弥生土器は計13点にとどまるが、このうち3点を天王山式が占める。同時にその数は、本型式の合計数15点の中でも少なくない割合である。分布に認める二つの側面は、天王山式土器の存続時期が長期に及んだ可能性を示唆している。

B 石器

本時代の石器としては、磨製石斧（第29図8）・管玉製作工程資料（同図7）各1点と、縄文時代の項で述べた石鏃およびその製作関連剥片がある。

磨製石斧は、ドレライト（粗粒玄武岩）を石材とするいわゆる「大型蛤刃石斧」である。側面を中心に弱い敲打痕を認めるほかは完全な形状をとどめる。長さ13.3cm・幅6.7cm・厚さ3.4cm・524g。本資料は1997年発掘区の中央微高地に位置する土坑の底面付近から出土した（第29図右）。この土坑は、攪乱によって東半部を失っていたが、最大幅96cm・深さ35cmを有し、墓壙に似た形状をもつ。埋積土から出土した土器（同図9～12）は5期（第11表）前後の土師器しか確認されておらず、位置づけが問題となる資料といえる。

管玉製作工程資料は、一辺に施溝がなされた典型的な弥生時代の玉作り資料である。石材は碧玉。管玉素材を作出したのち剥離が行なわれ、図示のような不整形な形状となったものである。意図は明らかでない。本例は、1997年発掘区の微高地南部から単独で出土した。

（3）古墳時代

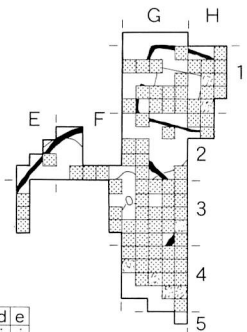
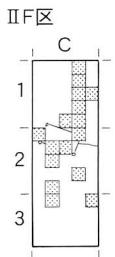
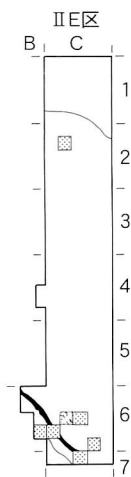
1997年発掘区から膨大な量にのぼる遺物が出土している。この中には梯子や機織り具などの木製品、杓子形土製品、各種装身具類、石製模造品、モモを主とする種実類・サケの脊椎骨などといった多様な資料が含まれており、第36図にその一部を示した。以下、本年度調査区出土資料を中心に記述する。

A 土器

① 土師器

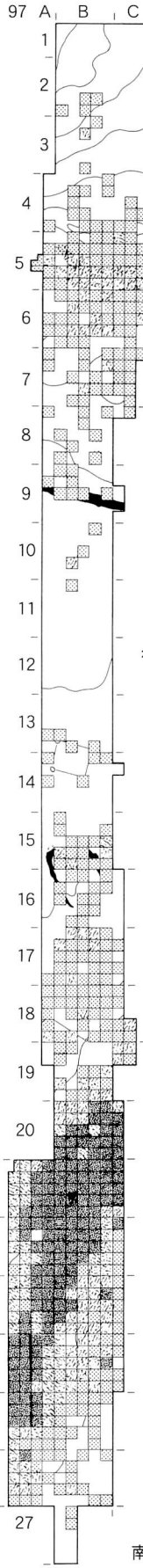
第31・32図に本年度調査区出土資料、第28図の一部・第33図に1997年調査資料を示す。本書Ⅳ章-3の区分で言えば、掲載資料は概ね4～10期の幅に収まるものとする。4期を古墳時代に含めるかどうかは研究者によって異なる状況にあるが、今回は便宜上土師器の項で扱う。

本年度調査区からの出土量は、口端にしてⅡE区：40点・ⅡF区西部：24点・ⅡF区東部：263点・ⅡG区：129点である。このうちⅡE区のピット59とⅡF区東部の2号建物跡周溝内から比較的残りが良くま



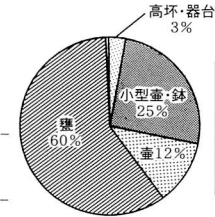
a	b	c	d	e
f	g	h	i	j
k	l	m	n	o
p	q	r	s	t
u	v	w	x	y

1~9
 10~49
 50以上



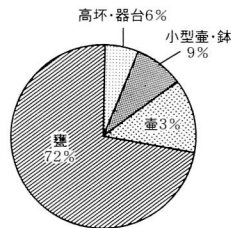
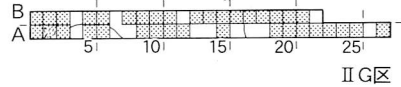
凡例

1. 計測は口端遺存資料に限られる。
2. 同一個体で複数グリッドから出土しているものは、個々にカウントした。
3. 内面黒色土器は除外した。時期比定が困難なものも存在するが、おおむね4~10期に収まるものとする。



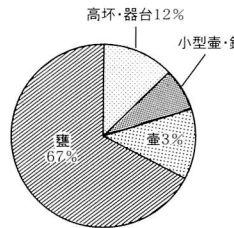
高環・器台	32
小型壺・鉢	264
壺	124
甕	624
ミニチュア土器	5

北部埋没谷 (97年調査区1~7列+II G区)



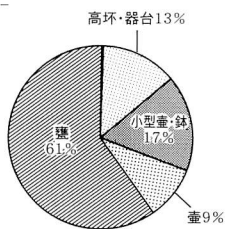
高環・器台	81
小型壺・鉢	126
壺	184
甕	1029
ミニチュア土器	1

微高地 (97年調査区8~19列)



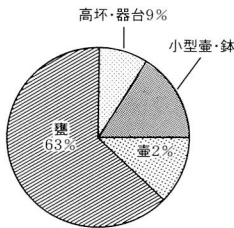
高環・器台	5
小型壺・鉢	3
壺	5
甕	27
ミニチュア土器	—

微高地 (II E区)



高環・器台	38
小型壺・鉢	49
壺	27
甕	172
ミニチュア土器	1

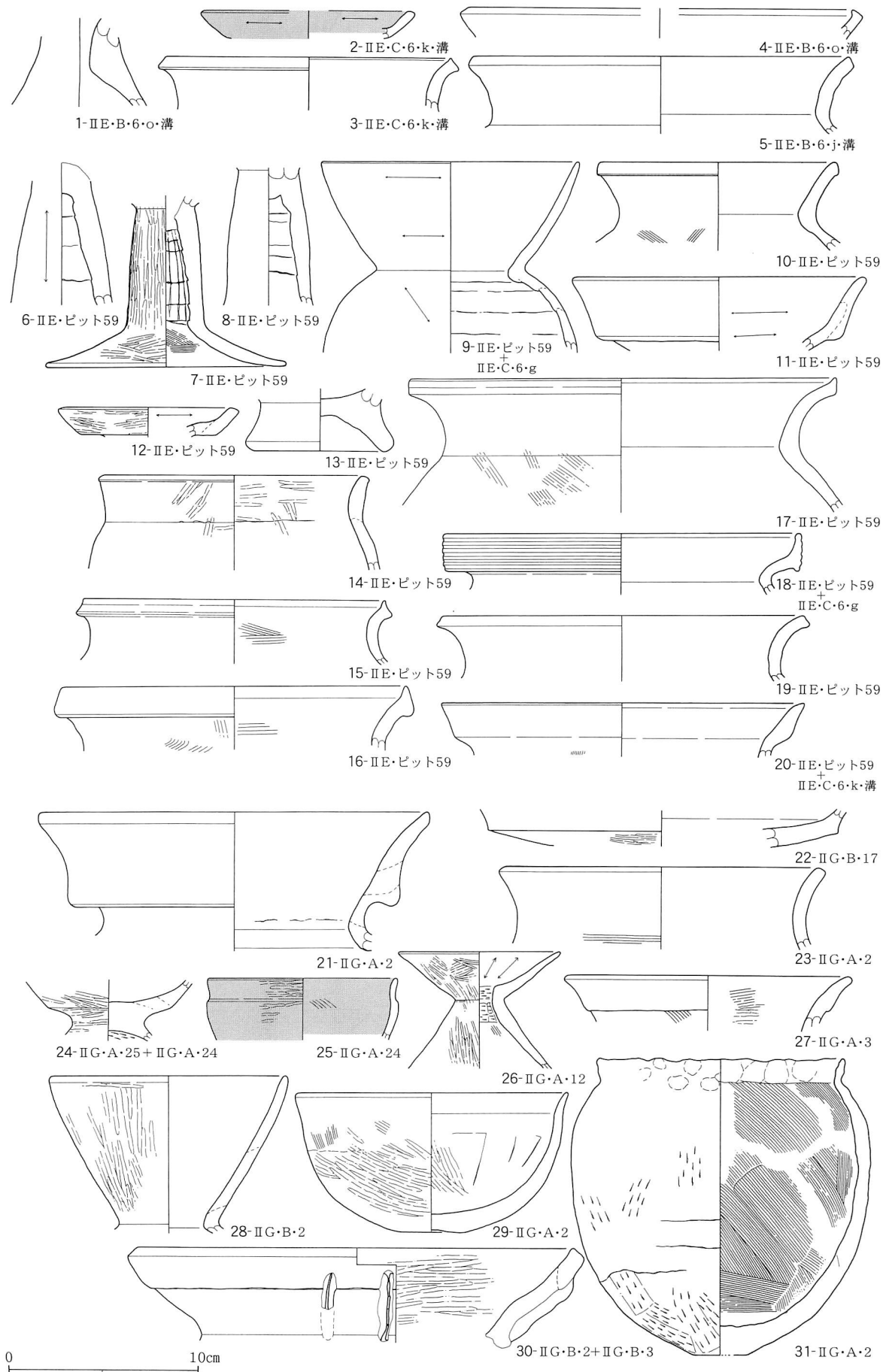
微高地 (II F区)



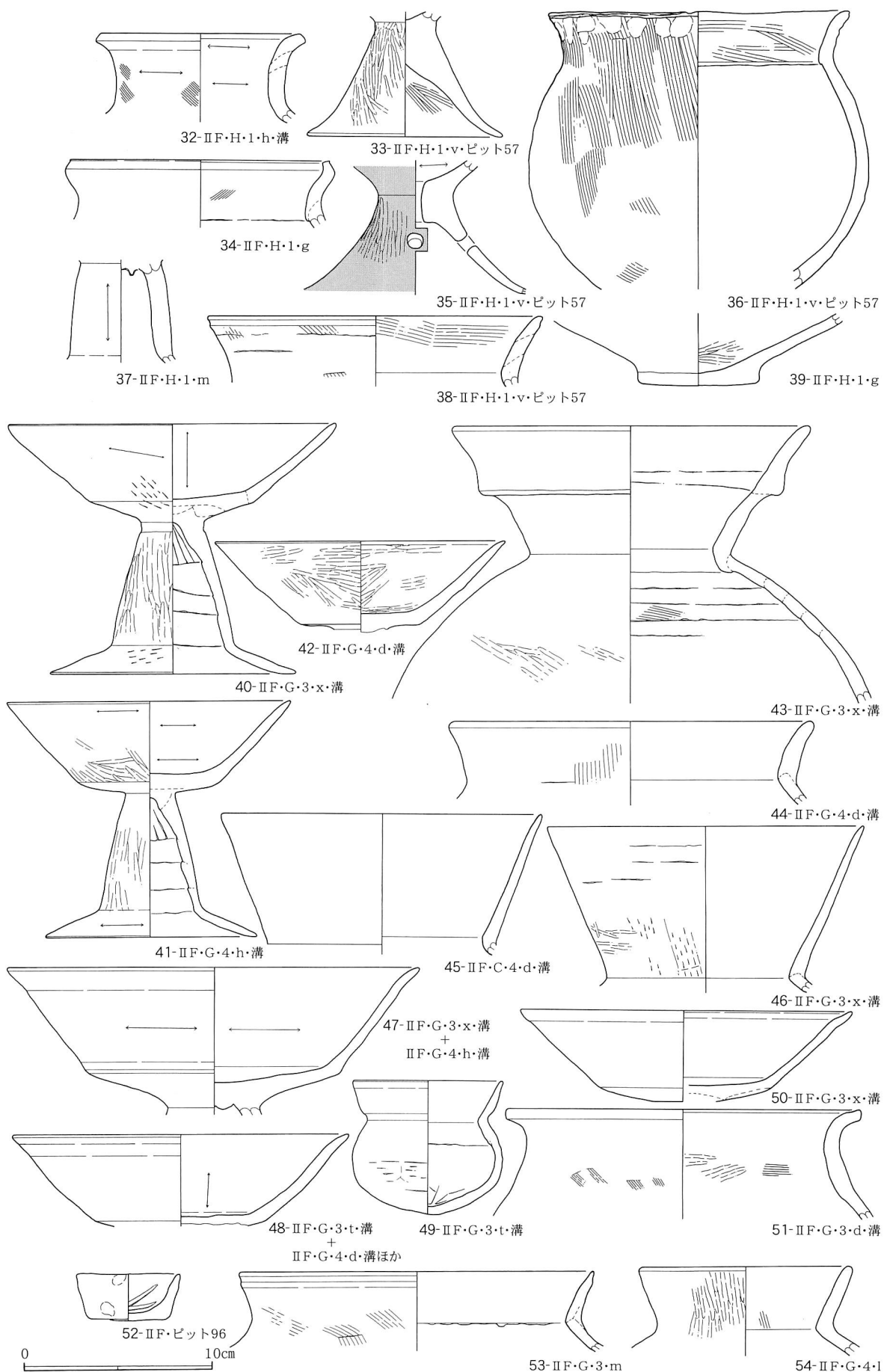
高環・器台	1722
小型壺・鉢	3243
壺	2416
甕	12619
ミニチュア土器	12

南部低湿地 (97年調査区20~27列)

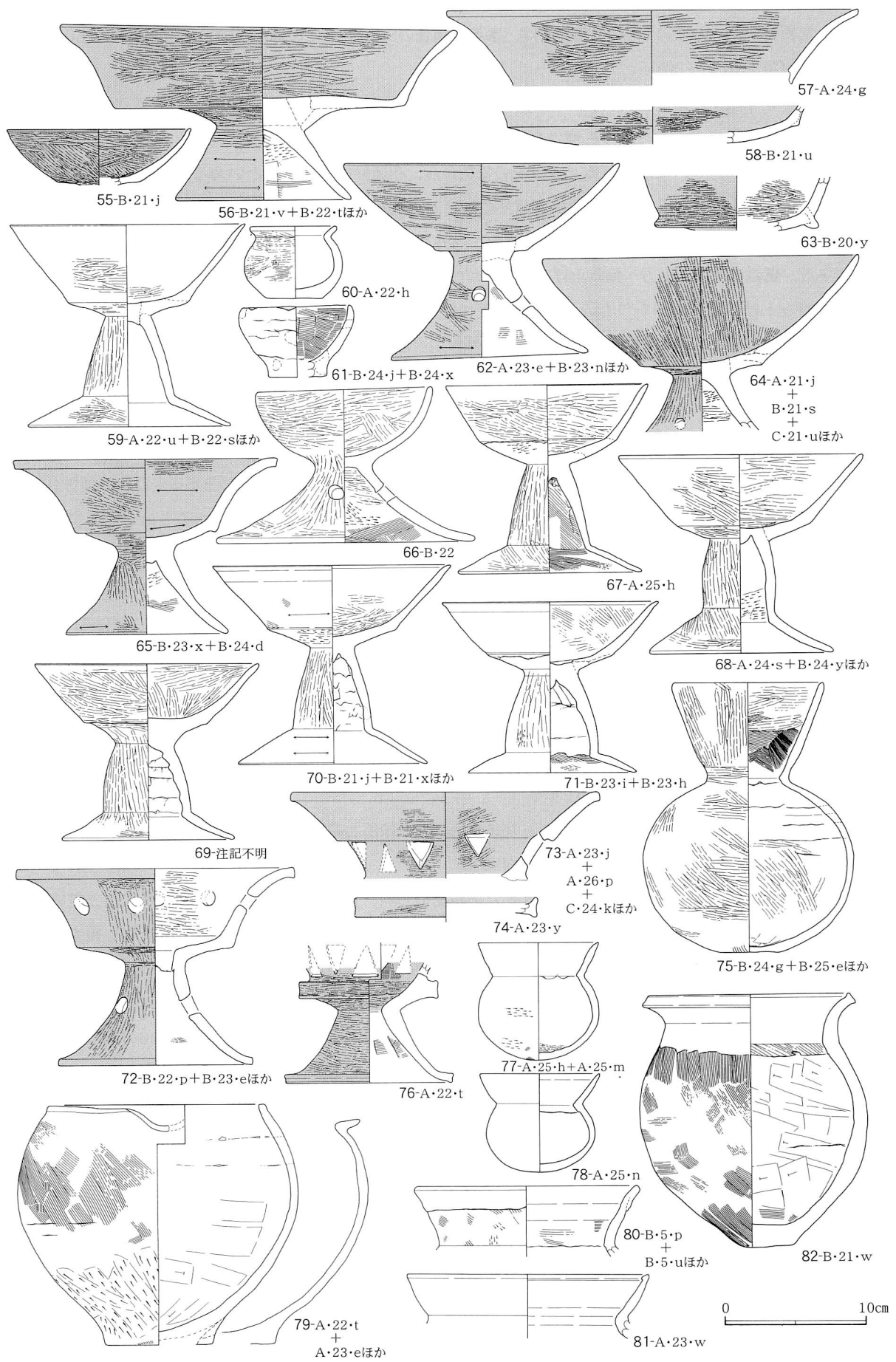
第30図 古墳時代土師器の分布 (写真は1997年南部低湿地における土器の出土状況)



第31図 土師器-1



第32図 土師器-2



第33図 土師器-3 (1997年調査出土資料)

とまった資料が出土した。1997年発掘区は、本年度調査の50倍近くにのぼる22,482点に及ぶ（第30図）。

II E区（第31図1～20）

溝（1～5）：高坏・器台・甕がある。器台（2）は受部が有段となる小型のもので、口縁端部は面をもつ。内外面ともに横方向のヘラミガキ。甕は口縁端部を摘み上げ内屈させるもの（4）と、口縁端部が面をもち内傾するもの（3・5）に限られる。4はその特徴から、布留傾向甕に属すといえる。

ピット59（6～20）：6～8は柱状屈折脚高坏の脚部で、内面には粘土紐接合痕を認める。小型器台（12）は受部が段をもち、口縁端部を平坦に仕上げる。内外面とも横位のヘラミガキが施される。13は台付鉢と推測する。甕の口縁は、上方へ摘み上げ口端外面が凹むもの（15）、口端が膨らんで上方にのびるもの（16）口端を摘み上げ外面に面をもつもの（17）、有段口縁の外面に擬凹線を施したもの（18）、口端が内傾して面をもつもの（19）、口縁部が有段となり端部を外へ引き出したもの（20）が認められる。なお、20の接合資料の中には、本調査区の溝出土資料が含まれる。

II F区（第32図32～54）

建物跡1（32・34・37・39）：32は溝、それ以外は覆土からの出土。壺（32）の口縁部は、直立気味にのびたあと、端部が外へ短く外反する。34は、いったん外反したのち短く内側に屈曲する受口状口縁をもち、端部は面をもちつつやや外側へ摘み出される。以上の特徴から、近江系の系譜にあたるものと推測する。

建物跡2（40～51）：いずれも溝内部から出土した。遺存率が高い資料は高坏と小型壺に限定される。

高坏はいずれも坏部に稜をもつもので、口縁部が内湾気味にシンプルにのびるもの（40・41）と、内湾気味にのびたあと端部が外へ短く外反・屈曲するもの（42・47・48・50）の二者がある。径は41・42が15cm台、40・48・50が17cm台。40・41の脚部は粘土紐の巻き上げ後絞り込んで成形しており、内面に粘土紐接合痕を明瞭に残す。また、脚柱部内面は縦位のヘラミガキ調整で、裾部は40でヘラケズリ、41で横位のヘラミガキが観察できる。両者とも下方に向かって内湾しながら広がる形態をもつ。口縁部の調整は内外面ともヘラミガキが多いが、同時にヘラケズリ痕を残すもの（40）もあるなど全体的に粗い。なお、内外面ナデ調整のみのもの（50）も存在する。

47は径が22.1cmと他に比べ大型の高坏で、坏部の底部と口縁部との境は他と較べより明瞭な稜・段をもつ。口縁部は内湾気味にのび、端部は外反・屈曲する。

43の二重口縁壺は、体部外面に粗いヘラミガキが認められ、内面には粘土紐接合痕を残すなど粗い作りである。小型壺46は、口縁部外面に粘土紐痕が認められ、ヘラミガキのほかにヘラケズリ痕も残すなど全体に調整が粗い。45は調整不明。49は丸底の底部と扁平な体部で、口縁部は弱く段をもったのち内湾気味にのび端を短く外へつまむ。調整は体部外面横方向のヘラケズリ、内面ヘラケズリで、粗い作りといえる。

ピット57（33・35・36・38）：38は外反してのびる口縁部で、端部は摘まれて尖る。36の甕は、口縁部から体部にかけての外面に縦位のハケメ調整をしたのち、口縁部上方を指圧で整える。高坏33は透かしをもたない。35は四方の透しを穿ち、赤彩が施される。

その他（52～54）：52はミニチュア土器である。外面には指頭圧痕、内面にはヘラケズリ痕を有す。53は口縁端部外面に凹みが認められる点で38と共通する。

II G区（第31図21～31）

22は在地系の有稜高坏、24は東海系の小型高坏である。23は口端に面をもち、水平気味に収まる。口縁部内面には炭化物が付着する。細かい長石・石英を多量に含むなど、胎土は他に比べ異質で、南赤坂遺跡の折衷土器に類似する。26は全体的にシャープな作りである。27は関東系の折り返し口縁壺で、外面にハケ、内面に横位のヘラミガキが観察される。小型壺28は、幅の狭い頸部から口縁部が内湾して外へ広がる。外面は縦位

のヘラミガキ。30の壺は、口縁部に2本の棒状浮文が貼り付けられており、端部は面をもつ。31は指圧で形成された短い口縁をもつ甕で、体部外面にヘラケズリと粘土紐接合痕、内面には密なハケメ調整痕を残す。

1997年発掘区（第33図）

整理途中ではあるが、本年度出土資料との比較を目的として高坏を中心に掲載した。いずれも南部低地からの出土である。

高坏に関しては、在地系（56～58・65）、東海系（55・62・64・66）、畿内系（59・67～71）、突帯付高坏（63）などがある。在地系の高坏は大型で赤彩されたものが比較的多く、いずれも調整は非常に丁寧である。56は、八字状に広がる短脚を特徴とする。東海系も大半が赤彩され、調整も丁寧なものが多い。64は、内外面ともに縦位のヘラミガキが施される。畿内系では、坏部内外面と脚部外面のヘラミガキを基本とするが、底部外面をヘラケズリするもの（67・70）や口縁部のヘラミガキが粗くハケメ痕を残すもの（70）もある。また、71は坏部内外面にヘラミガキがほとんど認められず、内面にハケメ痕を残すなどの点で特に調整が粗い。脚部内面に関しては、粘土紐接合痕が調整により確認できないもの（59・67・68）、確認できるもの（69・71）、その中間のもの（70）がある。

器台は、結合（装飾）器台に限り掲載した。72は口縁部に1cm前後の正円形の孔が8箇所穿たれ、脚部にも3方で透かしが入る。73・74は同一個体の可能性が高い。73・76の口縁部には、三角形の透かしが上下交互に配置されている。また73からは、口縁部を作ったのちに透かしが穿たれたことがわかる。当遺跡では、細片を含め少なくとも10個体分の結合器台がこれまでに出土している。このうち口縁部の透かしの形がわかるのは6個体で、円形が2個体・三角形を上下交互に配置したものが4個体を占める。いずれも調整は非常に丁寧で、赤彩されたものが多い。なお、76ではススの付着も認められる。以上の結合器台は県内において一般的な形態と言えるが、透かしを上下交互に配置する例は少なく〔滝沢2003b〕注意される。

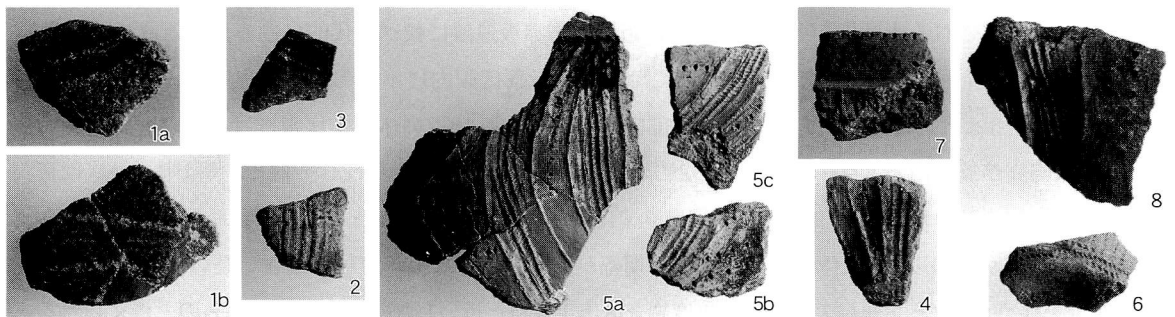
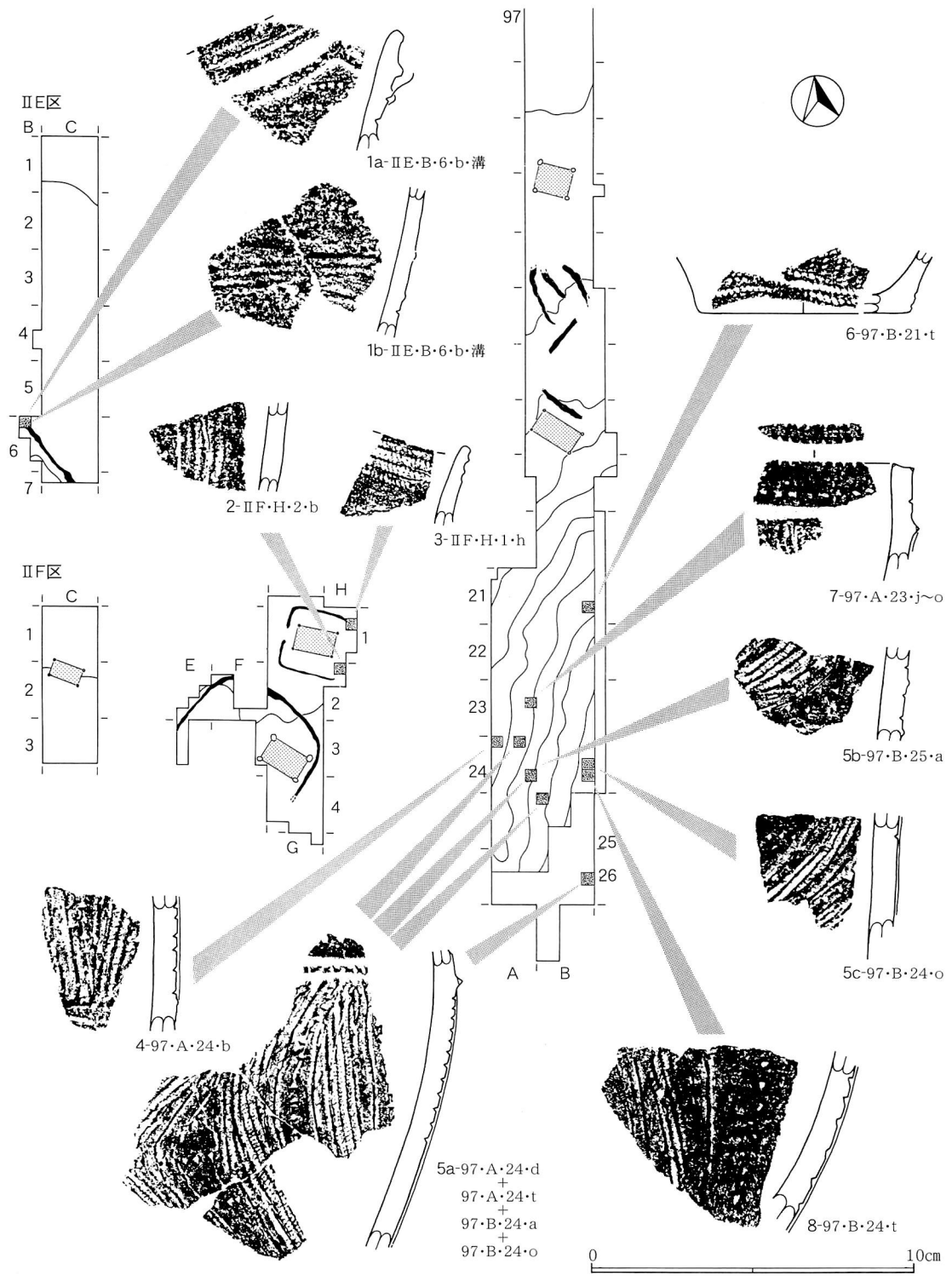
小型丸底壺は、77で内外面にナデとケズリ、78でナデ調整が確認できる。片口土器は、これまで6点の出土をみる。79は外面の上位にハケ、下位にヘラケズリ、内面にヘラナデを施しており、内外面とも粘土紐接合痕を残す。関東系の折り返し口端壺は、80と本年度調査区資料の計2点、布留甕は81など2点が97年調査で出土している。81は白色系の色調を呈し、胎土も含め他の土器と異なる。

② 続縄文土器（第34図）

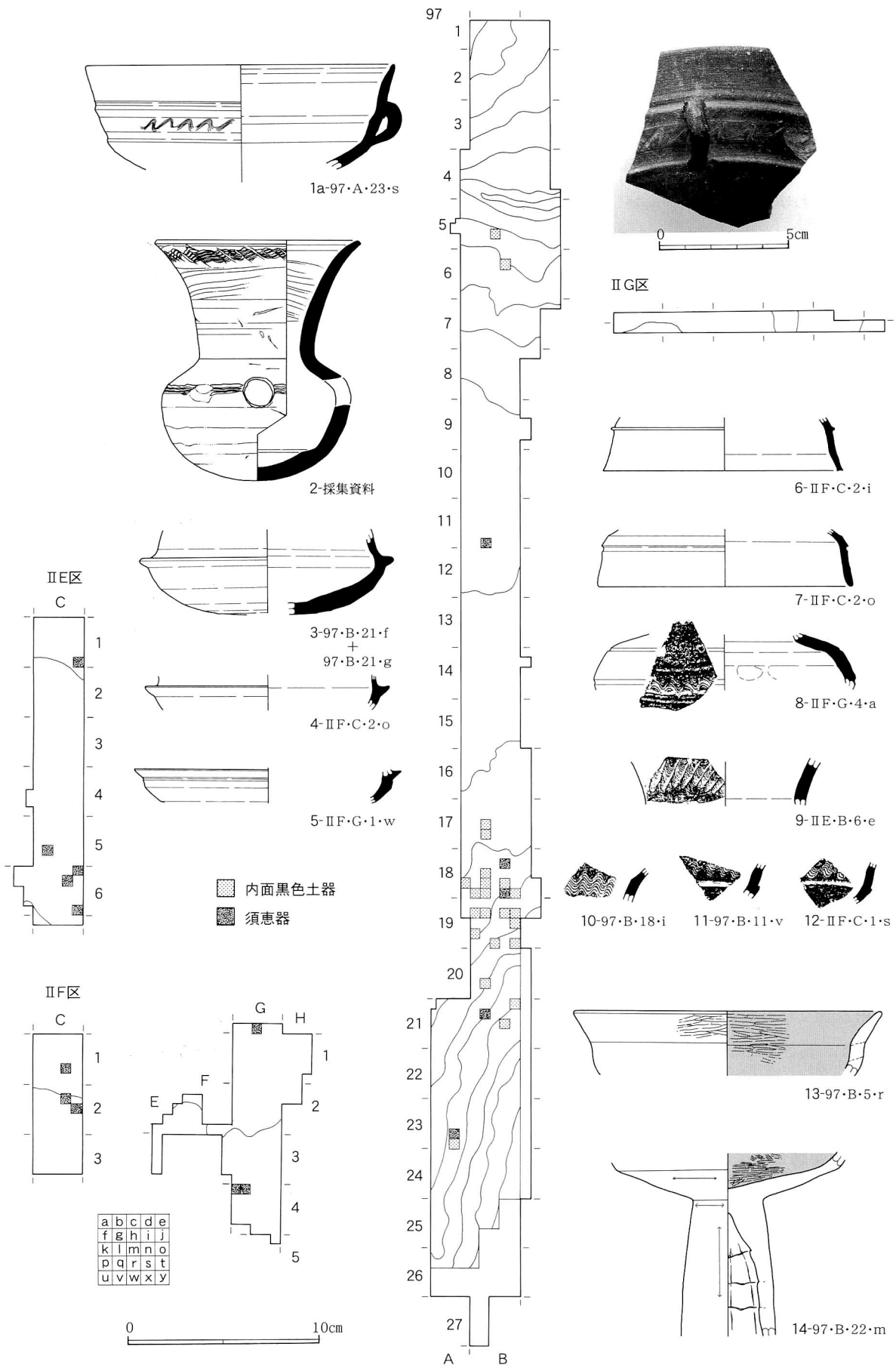
本年度の調査区から2個体、1997年発掘区の南部低地から5個体が出土しており、全資料を第34図に示した。いずれも後北C2-D式に該当するもので、現時点においては日本海側の南限資料となる。

1はⅡE区の溝から出土。波状をなした口縁部（1a）とその体部破片（1b）である。前者は口縁部に2条の隆帯をめぐらし、隆帯下の区画内に横位2列の三角形刺突を施す。後者は破片上端に横位の三角形刺突列、中ほどに微隆起線と帯状縄文を配す。2・3は、ⅡF区1号建物跡周溝範囲内のⅢ層から出土した。3は波状口縁の上端に帯状縄文を施し、微隆起線とみられる痕跡が無文帯下で観察できる。2は縦位の帯縄文を施す体部破片で、縄に沿って2条の沈線が並走する。いずれの胎土にも長石の微粒子を多量に含む。以上は4期～5期と推定される土師器が相伴しており、近隣の南赤坂遺跡に較べ年代的に遡る資料となる。

4～8は1997年発掘資料。7は口端の内外面に刻目、口縁部区画内に不整形な三角形刺突、口縁下に刻目付隆帯を配す。5は口端を欠くが、同様の口縁部区画帯をもつ。4～7の体部文様帯には、微隆起線・三角形刺突・帯状縄文が施される。4・5・8では、2に類した沈線が微隆起線と平行して残る。6は唯一の底部資料で、下端に横位、それ以上に縦位の帯状縄文を施す。いずれの胎土にも長石などの鉱物微粒子が多量に含まれる。南部低地からの以上5個体は相伴土器に時期幅があり、良好な編年資料とは言い難い。しかし4・5・8は、沈線を伴う点で2と共通しており、本年度調査区出土資料と近似した年代関係にあるものと考えられる。



第34図 続縄文土器



第35図 古墳時代の須恵器と内面黒色土器

③ 内面黒色土器 (第35図13・14)

本年度の調査では確認されなかったが、1997年発掘区から29点出土している。新潟県内の内面黒色土器の出現は少なくとも11期までは確実に遡り、12期以降盛行する。当遺跡では、後述の須恵器とともに出土量が非常に少なく、それ以前の衰退を示唆する。これまで出土した土器からは、10期を境に衰退したと想定され(第43図)、遺物量の推移からはそれが急激な形で訪れたと推測される。

14はいわゆる柱状屈折脚高坏であるが、県内では少なくとも12期にこの種の脚部はほぼ消滅するものとする。加えて、今のところ県内で10期まで遡る内面黒色土器の確実な例が無いことから、11期の位置付けが現時点で妥当と考える。ただし、坏部の形態も含め、古い特徴を有しているといえる。

④ 須恵器 (第35図1～12)

1997年発掘区と本年度調査区において、確実に古墳時代とみなされる須恵器は18片出土した。このうち時期が明確な資料は古手のものに限られており、大半は10～12期の間に収まるものとする。分布としては微高地を中心とする傾向があり、後述の古代遺物に類似する。

1・11・12は高坏で、いずれも坏体部に櫛描波状文がめぐり、1は無脚短脚高坏。把手一つが遺存するが対になるかは不明である。10期もしくは11期に属すると考える。

2・8～10は、波状文をもつ甕。2は1958年～1959年の耕地整理に際し、ⅡE区の西に隣接する区画から採集された資料である。口径10.7cm・器高13cmで、体部上位に波状文を施したのち1孔を穿つ。なお、意識的かどうか不明であるが、波状文はほぼ8等分の間隔でナデにより切れる。外面には、体部下半に粘土紐接合痕を残すとともに、頸部を中心として一部自然釉が付着している。底部は、穴を閉塞したのちナデ調整されているが、外面に接合痕、内面に段を残す。ロクロは右回転である。時期は12期と考える。

杯身は、かえりがほぼ水平にのびる3と、やや上方へ突き出る4・5がある。3は口端を欠くが、推定口径11cm前後と小振りで、形態からは古式のものといえる。杯蓋6の天井部と口縁部の境は突出する。口縁部は八字状に広がり、口端は中央が凹んだ形態となる。7は天井部と口縁部との境に沈線がめぐり、天井部のヘラケズリは鋭い。6・7ともに他より器壁が薄く、シャープな作りである。7のような沈線がめぐり、杯蓋は尾張系との指摘もあり、関東地方の窯跡で多く確認されている[鶴間2002]。なお、6～8の胎土は黒色粒子を含む点で共通している。

B 土製品と石製品

いわゆる生産用具について述べる。1997年発掘区と2003年調査区から出土した土製および石製品のうち、本時代に属する可能性がある資料には土錘と砥石がある。

第20図2はⅡG区B-19から出土した土錘。全体に不整形な球状を呈し、指痕によるラフな成形痕を全面に残す。長さ3.1cm、最大径2.8cm・29.7g。砥石は時期の判断が難しく、出土状況から古墳時代の所産と見なされるⅡG区出土資料の一つを第20図1に示した。使用初期の一例で、石材は凝灰岩。

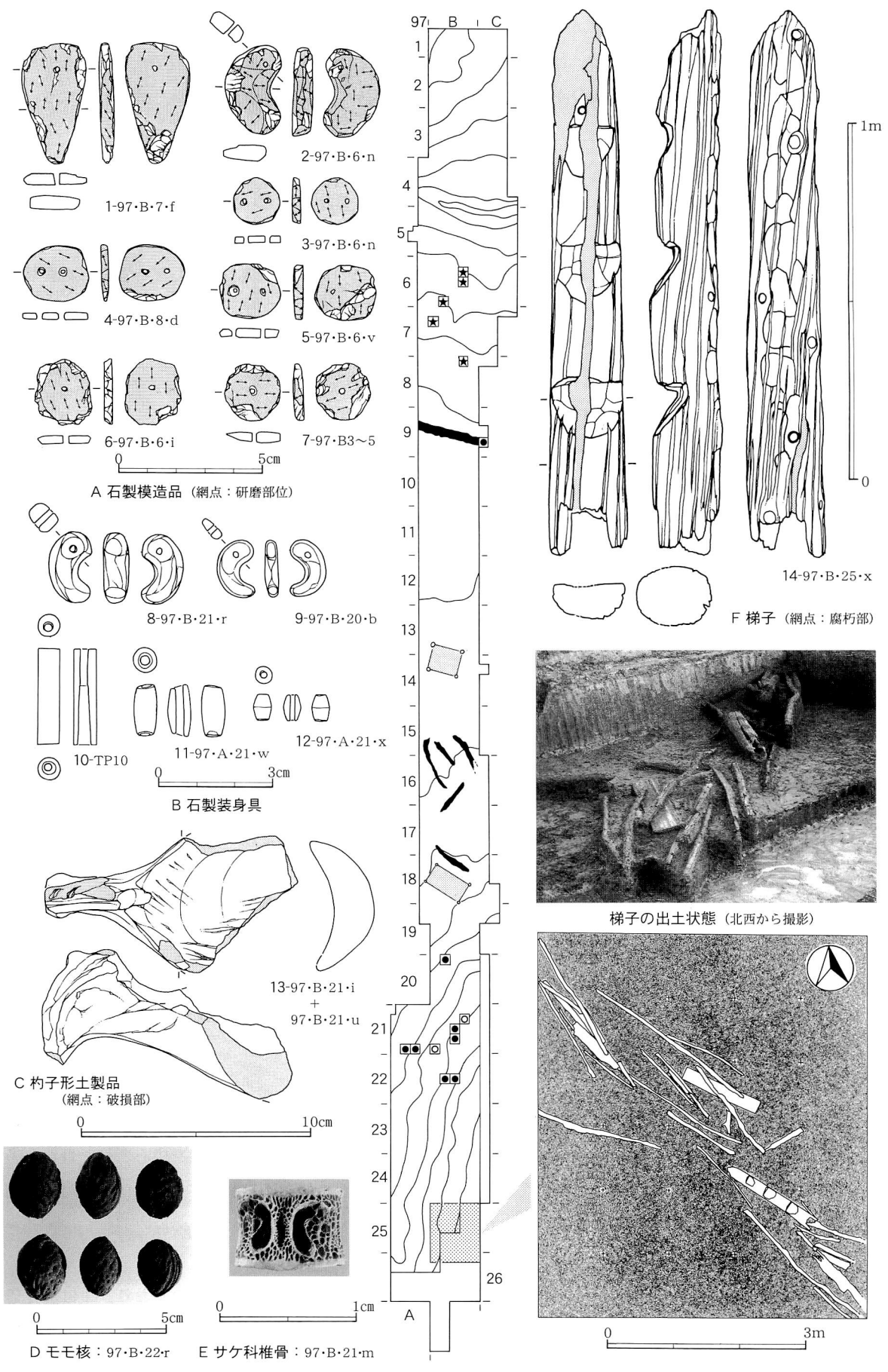
C 特殊遺物

1997年調査区などから各種特殊遺物が出土している。本遺跡の性格を考える上で少なからず重要な資料と考えられるので、第36図に一部を掲載した。

① 装身具 (第36図8～14)

南部低湿地を中心に、勾玉(8・9)2点・管玉(10)4点・棗玉(11・12)2点・ガラス小玉2点が出土した。勾玉と棗玉は蛇紋岩、管玉は凝灰岩および緑泥石岩を石材とする。いずれも古墳時代前期の大枠でとらえられる資料である。

② 石製模造品 (第36図1～7)



第36図 特殊遺物と動・植物遺体 (★：石製模造品・●：装身具・○：杓子形土製品)

北部埋没谷の南岸斜面から計 7点が出土した。形態別の内訳は、剣形 1点・勾玉形 1点・円板形 5点（一孔 2点・二孔 3点）である。石材は、蛇紋岩を微量に含む滑石。整形研磨は総じて粗雑で、一孔を穿つ円板形製品にその傾向が強い。集中的な分布や限定された点数からみて、一括性の高い資料と考えられる。

③ 杓子形土製品（第36図13）

南部低地から 1点出土。半球状の頭部に短い柄が付く形態で、後者の形状は鶏頭を模したものであろう。この種の土製品の性格については、例数の乏しさから非実用的な製品と考えられている〔渡辺1985〕。

④ 梯子（第36図右）

南部低地の一角から板や自然木と共に列をなして出土した資料の一つ。上端が腐朽しているが、現存長で 157cmを測る。最大径22cmの丸木材を使用し、下端中央に深さ12cmほどの方形の挟り、側面に 3段のステップを作出する。樹種はヒノキ。本遺跡における高床家屋の存在を明示する資料である。

（4） 古代

1997年発掘区を含め、古代に属す遺物と判断できるものは、須恵器21点と土師器 1点に限られる。古墳時代の須恵器と同様に、本時期の遺物は微高地上を中心的な分布域とする。ちなみに、本年度調査区の出土量が1997年発掘区を上回る点については、後者の表土を重機で除去したことに起因する恐れも否定できない。しかし、南部低地における遺物量の減少は古墳時代後期以降著しいものがある。前述のように、古墳時代の須恵器の分布には古代へつなげる動きを見てとることができた。このことは、古墳時代後期を前後する時期から居住域や廃棄場所に変化が生じ、それが古代へも継承されていった状況を示す現象と理解できる。

A 須恵器（第37図 5～8・10～12）

坏蓋 5 のつまみ部はボタン状を呈しており、中央が凹む。6 は口縁端部が丸く収まる坏蓋で、全体的にシャープさに欠ける。胎土は砂質で、きめの粗いざらついたものである。本例は、9世紀を前後する時期に操業した重稲場窯跡出土資料に類似し、口径が大きい点でも一致する。

坏の底部にあたる7は、回転ヘラ切りののちナデ調整が行なわれ、底部中央に向かって上方に膨らむ。胎土の特徴から佐渡小泊窯産と推測され、9世紀後半を中心とした時期のものと考えられる。

8 は円面硯。遺存部の左右 2箇所縦方向にのびる透かしの側面が観察できる。角田山麓では、下稲場遺跡に次いで 2例目となる資料である。胎土は、重稲場窯跡出土資料に類似する。

B 土師器（第37図 9）

9が唯一の資料。内外面にタタキ目をもつものである。

（5） 中世

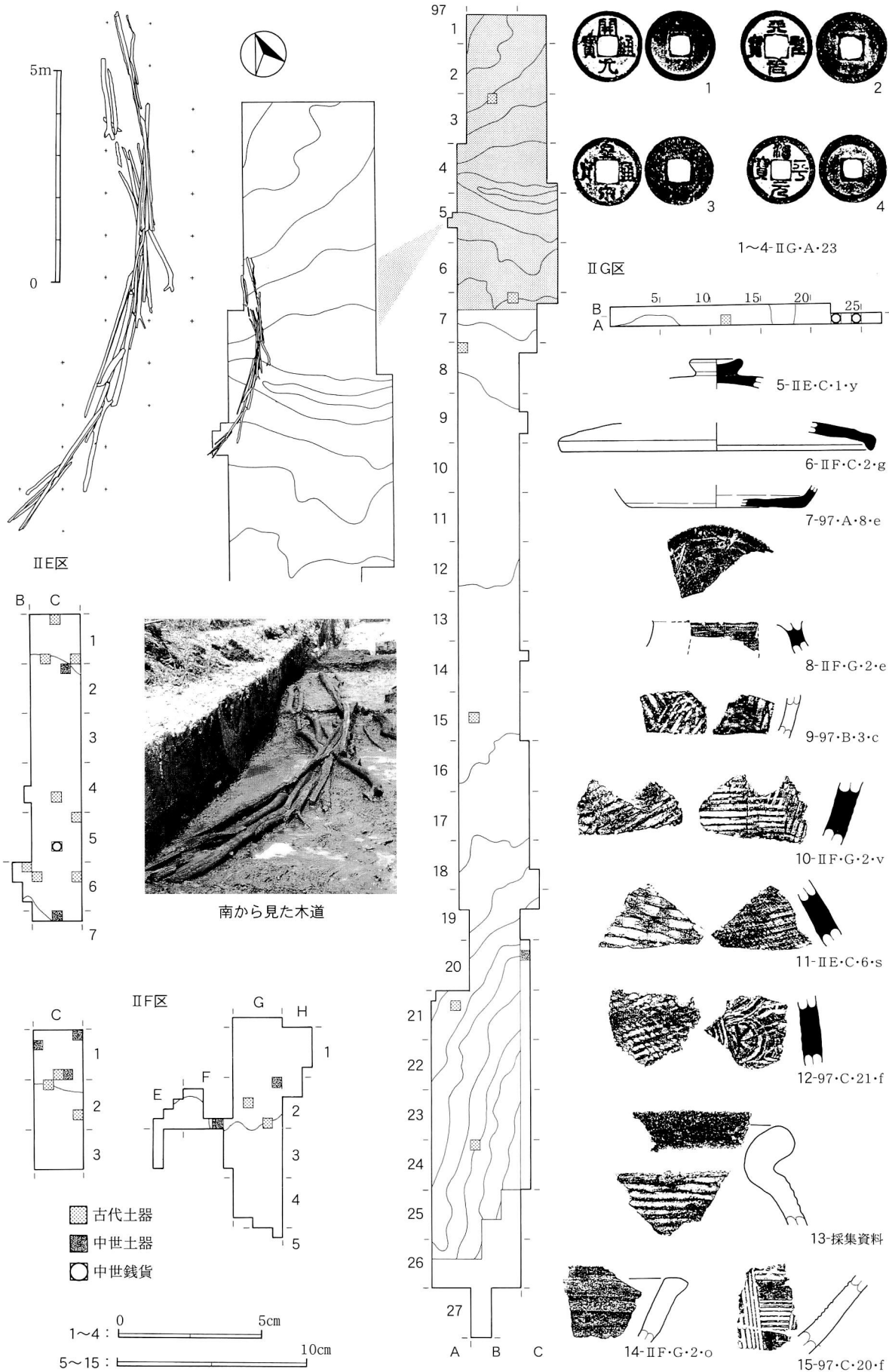
2003年調査区と1997年発掘区から、珠洲焼8点と銭貨5点が出土した。中世遺物の分布は微高地にほぼ限定されており、古代の在り方と変わらない。

A 珠洲焼（第37図13～15）

甕（13）・摺鉢（15）・鉢（14）を示した。13は1997年発掘区の西に隣接した微高地北部からの採集品。15の摺目条線は、いくぶん間隔を置いて施される。14の口端形態からも、14世紀代を中心とした資料と考えられる。土師質土器が欠落する点については、微高地全般に土器の保存状態が良好でなく、所属時期を明確にできないものの中に該当資料が含まれる恐れもある。

B 銭貨（第37図1～4）

II G区 A-23から密着して出土した 4点の一括資料を図示した。内訳と初鑄年は次のとおり。1は開元通宝（621年）・2は天聖元宝（1023年）・3は皇宋通宝（1039年）・4は治平元宝（1064年）である。このほか単独出土資料として、紹聖元宝（1094年）と政和通宝（1111年）が 1点ずつえられた。



第37図 古代・中世の遺物

5 自然科学分析

前報 [パリノ・サーヴェイ株式会社2003] では、縄文時代から古墳時代にかけての古環境変遷に関する分析成果を報告した。しかし古墳時代の堆積物に関しては保存状態が悪く、十分な情報を得ることができなかった。今回は古墳時代の遺物を包含するⅡG区のⅢ層を中心に、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析・樹種同定を行い、当時の古環境に関する情報を得る。

(1) 試料

土壌試料は、ⅡG区のA-24南壁から採取した12点である。分析には、植物遺体を多く含む層を中心に5点(試料番号1・4・6・10・12)を選択し、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を実施する。各層には主として古墳時代前期の遺物が包含されるが、上部層(試料番号1)では古代・中世遺物も若干含まれる。

樹種同定用試料は、ⅡE区・ⅡF区の溝やピットから出土した炭化材10点と後者のピット5に遺存していた木柱である。

(2) 分析方法

樹種同定については、本書14頁のとおり。

A 珪藻分析

試料を湿重7g前後秤量し、過酸化水素水・塩酸処理・自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪酸化化石を濃集する。検鏡に適した濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の側線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計測する(化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、[原口ほか1988]・[Krammer 1992]・[Krammer and Lange-Bertalot 1986,1988,1991a,1991b]などを参照する。

同定結果は、淡水～汽水生種・淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能を示す。また、環境指標種はその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、産出率3.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、淡水生種については[安藤1990]、陸生珪藻については[伊藤・堀内1991]、汚濁耐性については[Asai and Watanabe 1995]の環境指標種を参考とする。

B 花粉分析

試料約10gについて、水産化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛:比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理の順に物理・化学処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し光学顕微鏡下で全域を走査し、出現する全ての種類(Taxa)について同定・計測する。結果は、木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いたものをそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図化する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区分が困難なものである。ただし図中では、形態的に分類が可能であっても、紙面の関係上ハイフンで結び、まとめて表示したものもある。

C 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水、塩酸処理、沈定法・重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。400

倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下短細胞珪酸体と呼ぶ）、および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を〔近藤・佐瀬1986〕の分類に基づいて同定し、計測する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や稲作について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体ごとに、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

(3) 結果

A 珪藻分析

結果を第8表に示す。珪藻化石は全般に保存状態が悪く、珪藻化石の破片が見られる。特に試料番号1では、珪藻化石の破片が多数確認された。産出数は、いずれの試料も100個体以下であるが、試料番号1では74個体産出する。その他の試料は、産出数が1~4個と極めて少ない。

試料1では産出率の極端に高い種はないが、好流水性種の*Cocconeis placentula* var. *liniata*、流水不定性種の*Amphora affinis*・*Cymbella cuspidata*、流水不定性種・沼沢湿地附着性種の*Pinnularia viridis*〔安藤1990〕等が7~17個体産出する。なお、沼沢湿地附着性種は、水深が1m前後で、一面に水生植物が繁茂するような沼沢や浅い湿地に生育する種である〔安藤1990〕。

B 花粉分析

結果を第9表・第39図に示す。全体的に草本花粉の割合が高いが、試料4のみ木本花粉の割合が高くなっている。木本花粉をみると、12~4まではクリ属とハンノキ属が増加傾向を示し、試料4では、それぞれ木本花粉全体のほぼ半数を占めるようになる。他は、スギ属・マツ属・ブナ属・コナラ属・ニレ属-ケヤキ属などが検出される。いずれの花粉も減少傾向にあるが、特にニレ属-ケヤキ属が顕著である。

試料1は、クリ属はほとんど検出されなくなるが、ハンノキ属は引き続き多産する。その他、スギ属・クマシデ属-アサダ属・ブナ属・コナラ属・ニレ属-ケヤキ属などが検出される。

草本花粉をみると、試料6~12はヨモギ属の割合が高く、試料10で極大になる。その他、イネ科・クワ科・タデ属・ツリフネソウ属などが検出される。

試料4は、草本花粉が少なくなるが、試料1ではイネ科の割合が急に高くなり、ガマ属・オモダカ属など水生植物の花粉化石も見られるようになる。

C 植物珪酸体分析

結果を第7表・第41図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。土壌試料のうち、1を除く試料でクマザサ属を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やイチゴツナギ亜科などが検出される。また、栽培植物のイネ属に由来する機動細胞珪酸体や穎珪酸体もわずかに認められる。試料

第7表 植物珪酸体一覧

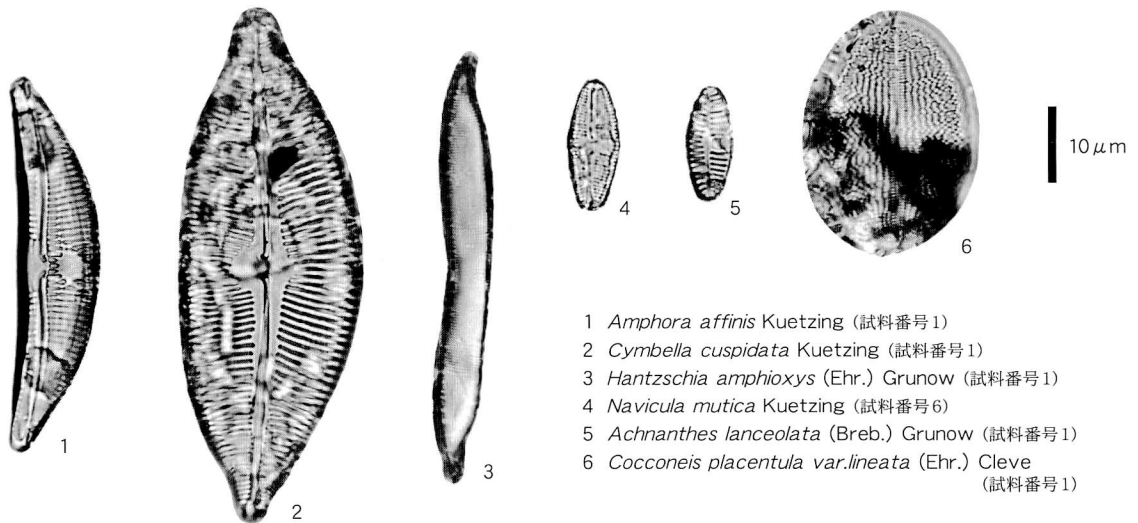
種 類	試料1	試料4	試料6	試料10	試料12
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	17	—	—	—	—
タケ亜科クマザサ属	69	85	98	114	103
タケ亜科	4	—	—	4	3
ヨシ属	25	1	3	4	2
ウシクサ族コブナグサ属	1	—	—	—	—
ウシクサ族ススキ属	3	3	—	2	—
イチゴツナギ亜科オオムギ族	3	4	—	—	—
イチゴツナギ亜科	2	11	—	8	4
不明キビ型	11	3	8	5	3
不明ヒゲシバ型	3	1	1	—	—
不明ダンク型	6	1	1	1	—
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	45	1	—	2	1
タケ亜科クマザサ属	41	91	92	100	108
タケ亜科	2	7	8	2	1
ヨシ属	26	2	2	10	2
ウシクサ族	11	—	—	2	—
不 明	10	—	—	—	—
合 計					
イネ葉部短細胞珪酸体	144	109	111	138	115
イネ葉身機動細胞珪酸体	135	101	102	116	112
総 計	279	210	213	254	227
珪化組織片					
イネ属穎珪酸体	20	2	—	2	—
イネ属短細胞列	6	—	—	—	—
イネ属機動細胞列	2	—	—	—	—
ウシクサ族機動細胞列	5	—	—	—	—

第8表 珪藻分析結果

	生態性 塩分 pH		流水 環境 指標種	試料1	試料4	試料6	試料10	試料12
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph T	1	—	—	—	—
Achnanthes lanceolata(Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph K,T	1	—	—	—	—
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind U	17	—	—	—	—
Caloneis silicula(Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	1	—	—	—	—
Cocconeis placentula var.lineata(Ehr.)Cl	Ogh-ind	al-il	r-ph T	7	—	—	—	—
Craticula perrotettii Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	1	—	—	—	—
Cymbella aspera(Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind O,T	3	—	—	—	—
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	7	—	—	—	—
Cymbella tumida(Breb.ex Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind T	4	—	—	—	—
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	—	—	—	—
Diploneis spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	—	—	—	—
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk	2	—	—	—	—
Fragilaria ulna(Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	2	—	—	—	—
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph O	1	—	—	—	—
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	1	—	—	—
Hantzschia amphioxys(Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind RA,U	3	—	—	—	—
Navicula confervacea(Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind RB,S	—	—	1	—	—
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind RA,S	1	—	1	1	1
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk	1	—	—	—	—
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph O	—	—	—	—	1
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind RA	—	—	1	—	—
Pinnularia macilenta(Ehr.)Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-ph	1	—	—	—	—
Pinnularia viridis(Nitz.)Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind O	7	—	—	—	—
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk	3	—	—	1	—
Stauroneis acuta W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	1	—	—	—	—
Stauroneis phoenicenteron fo.hattorii Tsu.	Ogh-ind	ind	ind O	2	—	—	—	—
Stauroneis phoenicenteron var.signata Mei.	Ogh-ind	ind	ind	4	—	—	—	—
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk	2	—	—	—	—
Stephanodiscus spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	—	—	2	—
珪藻化石総数				74	1	3	4	2

凡例

- H.R. : 塩分濃度に対する適応性
 - Ogh-ind : 貧塩不定性種
 - Ogh-ind : 貧塩嫌塩性種
 - Ogh-ind : 貧塩不明種
- pH : 水素イオン濃度に対する適応性
 - al-bi : 真アルカリ性種
 - al-il : 好アルカリ性種
 - ind : pH不定性種
 - ac-il : 好酸性種
 - unk : pH不明種
- C.R. : 流水に対する適応性
 - l-ph : 好止水性種
 - ind : 流水不定性種
 - r-ph : 好流水性種
 - unk : 流水不明種
- 環境指標種群
 - K : 中～下流性河川指標種・O : 沼沢湿地付着生種 (以上は [安藤1990])
 - S : 好汚濁性種・U : 広域適応性種・T : 好清水性種 (以上は [Asai・Watanabe1995])
 - R : 陸生珪藻 (RA : A群・RB : B群 [伊藤・堀内1991])

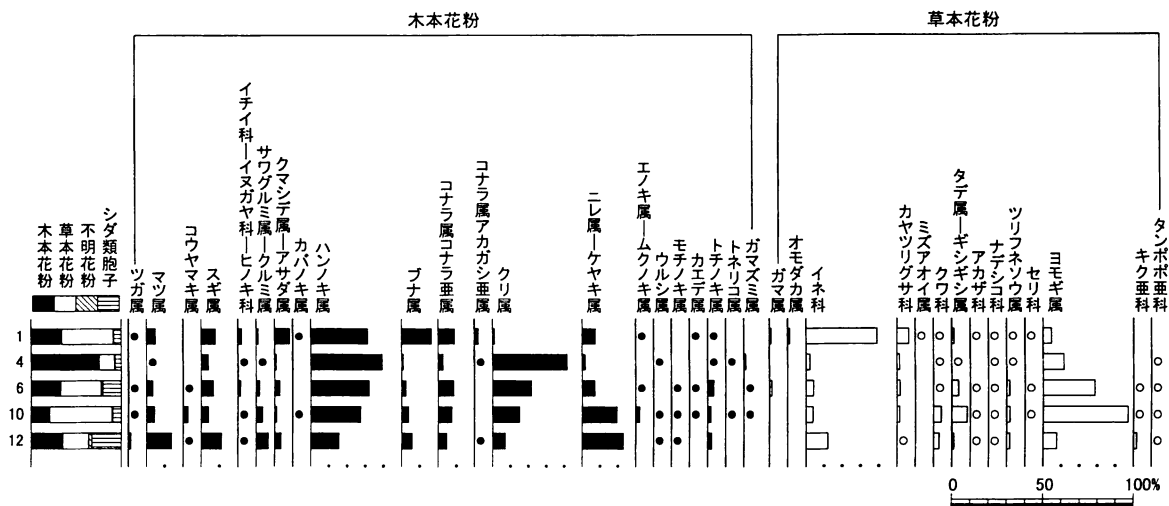


1 *Amphora affinis* Kuetzing (試料番号1)
 2 *Cymbella cuspidata* Kuetzing (試料番号1)
 3 *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (試料番号1)
 4 *Navicula mutica* Kuetzing (試料番号6)
 5 *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (試料番号1)
 6 *Cocconeis placentula* var.*lineata* (Ehr.) Cleve (試料番号1)

第38図 II G区の珪藻化石

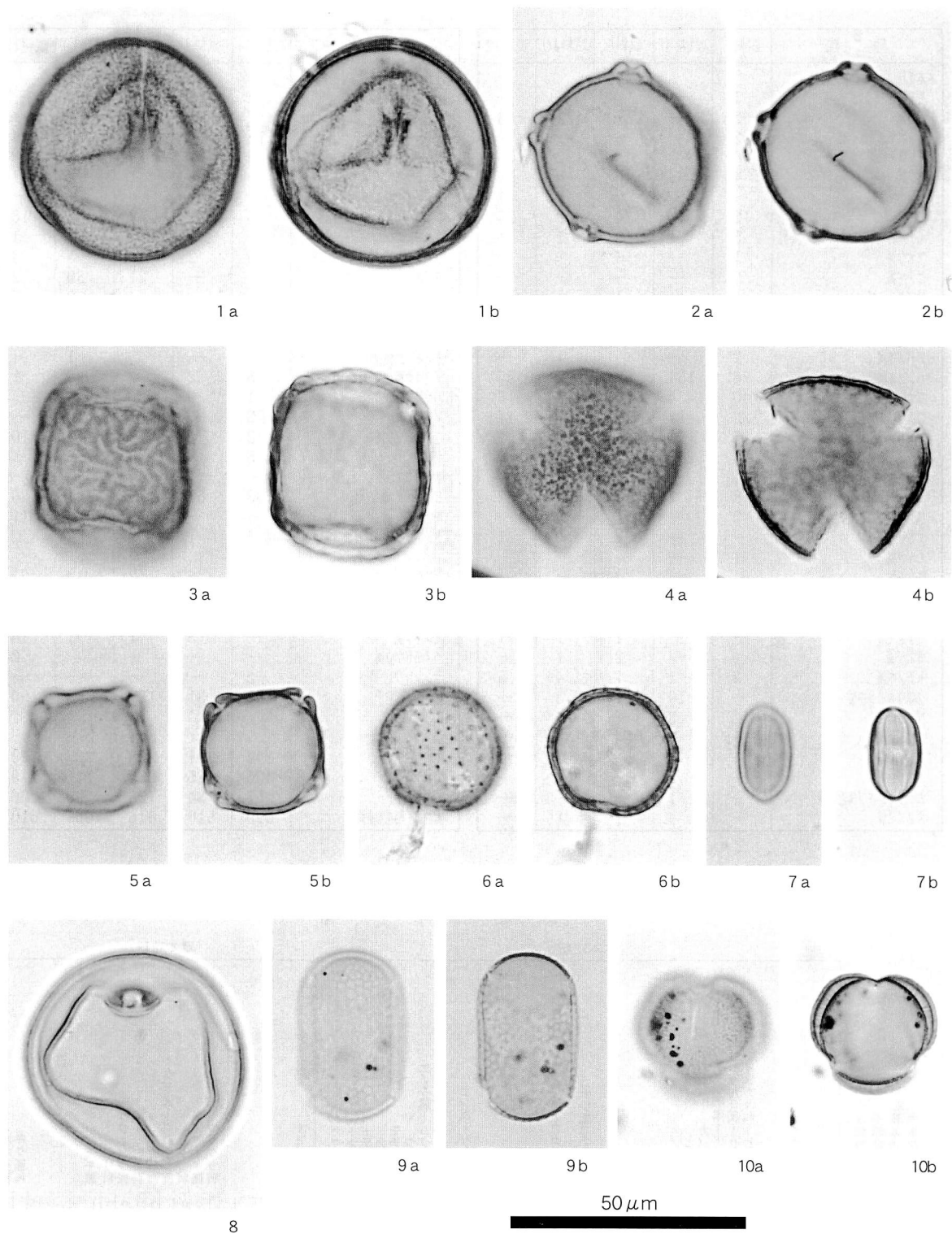
第9表 花粉分析結果

種類	試料1	試料4	試料6	試料10	試料12	種類	試料1	試料4	試料6	試料10	試料12
木本花粉						草本花粉					
モミ属	1	—	—	—	—	ガマ属	7	—	8	—	—
ツガ属	2	—	1	1	3	オモダカ属	7	—	—	—	—
マツ属単維管束亜属	2	—	—	—	—	イネ科	273	11	25	42	74
マツ属複維管束亜属	6	3	1	2	5	カヤツリグサ科	45	7	10	15	3
マツ属(亜属不明)	4	—	6	8	26	ツクサ属	—	—	1	—	1
コウヤマキ属	—	—	2	6	1	ミズアオイ属	1	—	—	—	—
スギ属	19	16	14	9	25	クワ科	5	1	2	45	18
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	5	1	3	1	1	ギンギシ属	—	—	2	2	1
マオウ属	1	—	—	—	—	サナエタデ節-ウナギツカミ節	9	2	—	5	4
ヤナギ属	2	—	—	—	—	タデ属	—	—	21	80	2
サワグルミ属	—	—	1	—	—	アカザ科	1	—	4	9	3
クルミ属	3	2	3	8	15	ナデシコ科	3	2	5	2	3
クマシデ属-アサガ属	20	4	6	3	8	カラマツソウ属	—	—	2	1	—
カバノキ属	2	—	—	1	—	キンポウゲ科	1	—	—	1	1
ハンノキ属	76	154	67	62	35	アブラナ科	5	2	1	2	1
ブナ属	40	4	5	9	13	バラ科	1	—	—	—	—
コナラ属コナラ亜属	22	11	18	17	11	マメ科	2	—	1	10	—
コナラ属アカガシ亜属	5	1	—	—	1	ツリフネソウ属	2	1	10	19	10
クリ属	3	163	45	34	16	セリ科	5	—	3	2	—
シイノキ属	1	1	—	—	1	ネナシカズラ属	—	—	4	—	—
ニレ属-ケヤキ属	18	7	15	44	52	ヨモギ属	33	58	175	501	45
エノキ属-ムクノキ属	2	—	1	5	—	キク亜科	—	—	3	3	11
ヤドリギ属	—	—	—	—	1	タンポポ亜科	—	1	3	2	2
カツラ属	1	—	—	—	—	不明花粉	4	5	12	14	23
キハダ属	—	—	4	—	—	シダ胞子	—	—	—	—	—
アカメガシワ属	1	—	—	—	2	ゼンマイ属	—	3	1	1	14
ウルシ属	—	1	—	1	1	イノモトソウ属	—	—	—	—	2
モチノキ属	—	—	1	1	1	サンショウモ	2	—	—	—	—
カエデ属	1	—	2	1	—	他のシダ類胞子	55	31	127	98	190
トチノキ属	2	1	7	4	5	合計					
クロウメモドキ属	—	10	1	3	—	木本花粉	242	391	208	225	225
ブドウ属	2	3	—	—	—	草本花粉	400	85	280	741	179
ウコギ属	—	—	4	2	—	シダ類胞子	57	34	128	99	206
エゴノキ属	1	2	—	1	2	総計(不明花粉を除く)	699	510	616	1065	610
トネリコ属	—	2	—	1	—						
ムラサキシキブ属近似種	—	1	—	—	—						
ガマズミ属	—	4	1	1	—						



第39図 II G区における花粉化石群の層位分布

(出現率: 木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数として百分率で算出。
●・○: 1%未満)



- 1 ブナ属 (資料番号1)
- 2 クマシデ属-アサダ属 (資料番号1)
- 3 ニレ属-ケヤキ属 (資料番号1)
- 4 コナラ属-コナラ亜属 (資料番号1)
- 5 ハンノキ属 (資料番号1)

- 6 オモダカ属 (資料番号1)
- 7 クリ属 (資料番号4)
- 8 イネ科 (資料番号1)
- 9 ツリフネソウ属 (資料番号10)
- 10 ヨモギ属 (資料番号10)

1と4では、栽培種を含む分類群であるオオムギ族も認められる。ただし、植物珪酸体の形状からは、栽培種か否かの判断は難しい。

D 樹種同定

同定結果を第10表に示す。同定された種類は、針葉樹1種と広葉樹7種である。古墳時代にのみ認める4種について解剖学的特徴などを記す。

●スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

●クマシデ属イヌシデ節 (*Carpinus* subgen. *Eurpinus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に2~4個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状~交互状に配列する。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~40細胞高のもの集合放射組織がある。

●タラノキ (*Aralia elata* (Miq.) Seemann) ウコギ科タラノキ属

環孔材で、孔圏部は4~5列、孔圏外への移行は緩やかで、小道管は2~3列が接線状に模様を描きながら連なる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~5細胞幅、4~70細胞高。

●エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

散孔材で、横断面は楕円形。単独または2~4個が複合し、年輪界に向かって径を漸減させながら散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~20細胞高。

第10表 同定樹種一覧

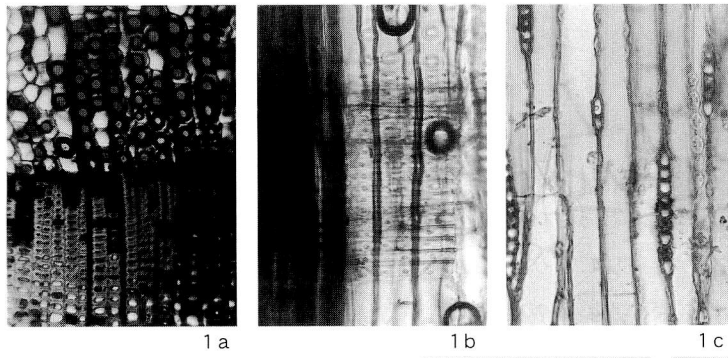
地区	出土地・層位	種類	樹種
II-03E区	pitNo.59 2層	炭化材	広葉樹(環孔材)
	pitNo.59 2層	炭化材	広葉樹(環孔材)
	pitNo.59 3層	炭化材	広葉樹(環孔材)
	pitNo.59 3層	炭化材	ケヤキ
	pitNo.59 3層	炭化材	クスノキ科
II-03F区	pitNo. 5	生木(木柱根)	スギ
	pitNo.11	炭化材	エゴノキ属
	pitNo.21	炭化材	クマシデ属イヌシデ節
	G-3-j・溝	炭化材	クリ
	G-3-j・溝	炭化材	ブナ属
	H-1-k. III	炭化材	タラノキ

(4) 考察

A 堆積環境

珪藻化石は、試料1で74個体産出する以外は、産出数が極端に少ない。一方、花粉化石や植物珪酸体は含まれている。堆積物自体は、植物遺体を含む砂混じりのシルト層で、層相や立地条件から、湿地性の堆積物と見られる。珪藻化石の産出が少ない理由ははっきりしないが、植物珪酸体の保存も悪いことから、堆積後に珪酸分が溶脱するような作用が起こっていた可能性がある。珪藻化石を構成するシリカは、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度が高いほど溶解度が高くなり、溶けやすいと考えられている [千木良1995]。また、土壌が風化する早い段階で、ガラス質が粘土化する可能性も指摘されている [近藤1988]。このような作用により、堆積物中の珪酸分が溶脱し、珪藻化石が消失したり、植物珪酸体の保存が悪くなった可能性がある。

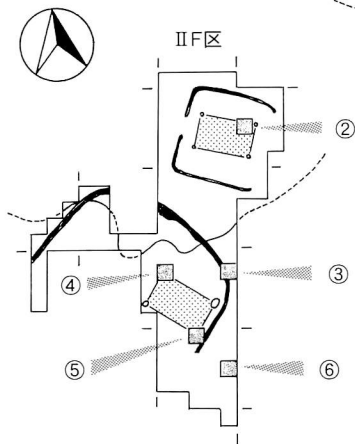
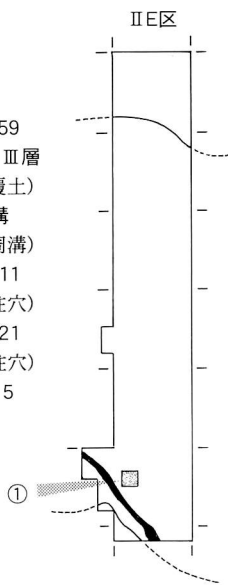
珪藻分析の結果から当時の堆積環境を推測することは難しいが、堆積物の状況から湿地のような堆積環境にあったとみられる。これは、花粉化石で湿地林を構成する種類が多産していることから裏付けられる。なお、試料1の珪藻化石群集は、産出数は100個体以下ではあるが、好流水性種・流水不定性種・沼沢湿地付着性種等が若干産出し、湿地のような環境にあったと考えられる。この層位では、水生植物の花粉化石が多産する点やイネ属の植物珪酸体が多産することから、稲作が行なわれていたと考えられる。このことからII層は、水田に適した状態になったため稲作が行なわれるようになったか、あるいは人為的に稲作に適した



- 1 スギ (試料⑥・木柱根)
- 2 クスノキ科 (試料①・炭化材)
- 3 タラノキ (試料②・炭化材)
- 4 エゴノキ属 (試料④・炭化材)
- 5 クマシデ属イヌシデ節 (試料⑤・炭化材)

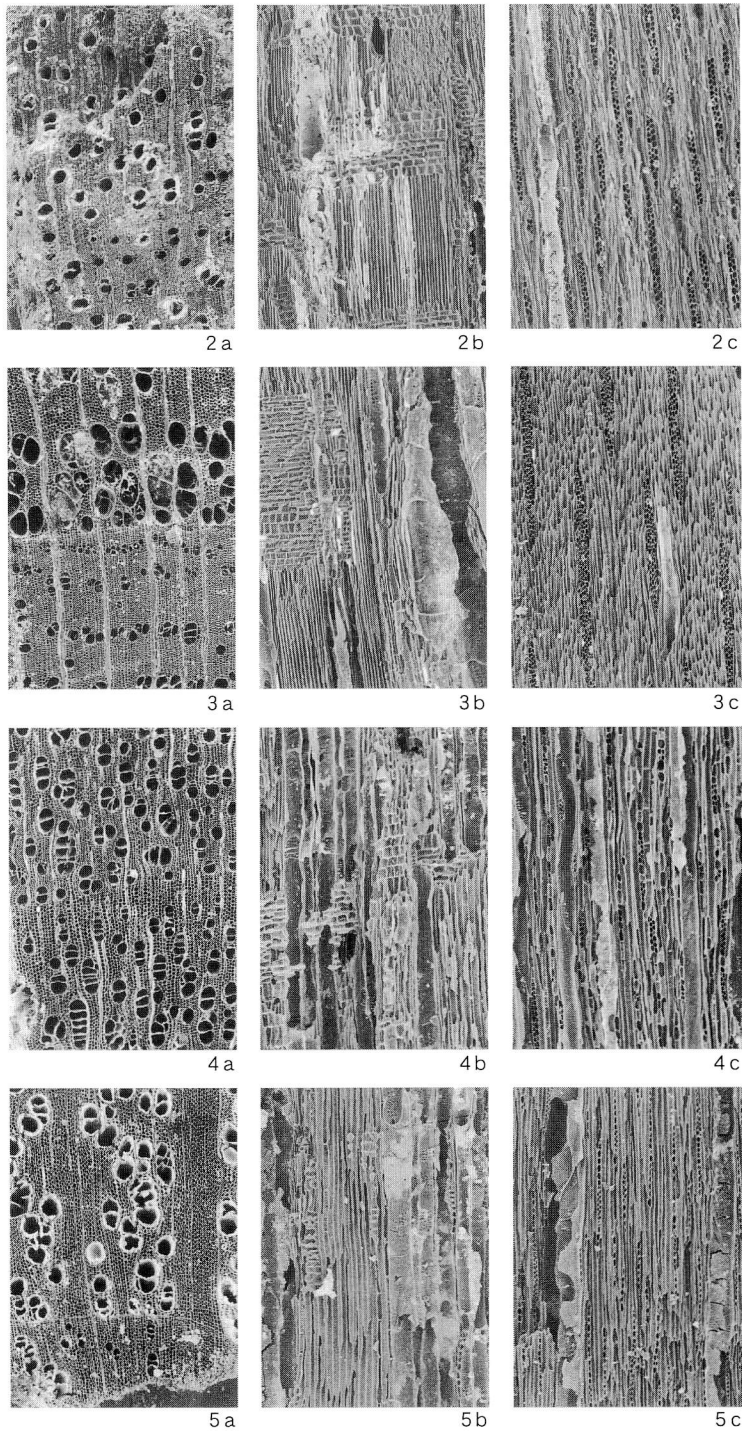
樹種同定試料

- ① IIE区ビット59
- ② IIF区H・1・k・Ⅲ層 (1号建物跡覆土)
- ③ IIF区G・3・j溝 (2号建物跡周溝)
- ④ IIF区ビット11 (2号建物跡柱穴)
- ⑤ IIF区ビット21 (2号建物跡柱穴)
- ⑥ IIF区ビット5



a: 木口・b: 柱目・c: 板目

1 a: 200μ
 2 a~5 a:
 b・c:



第42図 IIE区・IIF区出土の木材

状態に改変したかのいずれかであると思われる。

B 古植生と植物利用

古墳時代の花粉化石群集をみると、木本花粉では全体を通してハンノキ属が多く、クマシデ属－アサダ属コナラ亜属・ニレ属－ケヤキ属などがみられる。これらは河畔や湿地に生育する種であることから、これらは沖積地の河畔や谷地などを中心に生育していたと思われる。スギは現在では山間部にその分布が限定されているが、富山県入善町には低地に天然林が存在しており、富山県魚津市の海底からはスギの埋没林が検出されている。また、北陸地方の遺跡からはスギの木製品や自然木が多数検出されていることから、かつては低地にスギが多く生育していたと考えられている [鈴木2002など]。このことから、当時本遺跡周辺の低地にもスギが分布していたと思われる。その他の種類として、ブナ属の花粉化石が検出される。ブナ属は冷温帯林の代表的な種類の一つで、山地に安定した森林（極相林）を作る。角田・弥彦山地では、標高180m付近に暖温帯と冷温帯の境界があると考えられており [宮脇編1985]、標高の高い場所にはブナ属などの落葉樹が生育していたと推測される。なお、植物珪酸体ではクマザサ属を含むタケ亜科が多く検出される。日本海側の多雪地域においては、ブナの林床はチシマザサが発達する [宮脇編1985]。チシマザサは林床に生育するだけでなく、森林が失われた空間に侵入し、ササ林を作ることがある。このことから、検出されたクマザサ属は、ブナ林の林床に生育していたものや、山地に点在するササ草原などに由来すると考えられる。

一方、クリやナラ類は、安定した森林が何らかの理由で破壊されたときに生じる二次林の構成種である。また、これらの種類は種実が食用になり、木材も建築材や薪炭材として有用であることから、かつては「里山」の主要構成種として維持・管理が行われてきた。里山林の成立と管理がいつの時代にさかのぼれるかは定かでないが、すくなくとも当時の山間部では人為的な植生干渉が行なわれ、その結果クリやナラ類などの二次林が成立していた可能性がある。

なお、試料1ではイネ属類珪酸体や短細胞列とともに、イネ属の植物珪酸体が多産する。草本花粉組成をみると、これまで多産したヨモギ属が減少し、イネ属花粉を含むイネ科が多産する。また、これに伴って、ガマ属・オモダカ属など水生植物の花粉化石が検出されるようになる。このことから、試料1では水田が行なわれるようになったことが示唆され、試料1の層位が水田耕土であった可能性がある。これに伴ってヨモギ属が減少することから、低地にあった草地在り切り開かれ、水田として利用されるようになった可能性がある。また、イネ属珪酸体の急増に伴い、クリ属花粉が急減するのも特徴である。これは、植物利用の中心がクリなどの果実からイネに移ったためと予想される。この点に関しては、周辺遺跡や本遺跡での分析成果を蓄積しながら、さらに継続して検討していきたい。

C 木材利用

古墳時代の木材・炭化材は、すべて遺構から出土したものである。このうちピットや溝から出土した炭化材は、建築材等に由来する可能性もあるが、いずれも微細片であるため、混入した可能性もある。同定試料には8種が認められた。このうちスギは、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。また、クリ・ケヤキ・イヌシデ節・エゴノキ属は重硬で強度が高く、クリやケヤキでは耐久性にも優れる。これらの種類については、建築材として利用されたとしても問題ない。一方、タラノキは高木になるが、材の強度や保存性は低い。また、ブナ属も強度は比較的高いが、保存性は低い。これらはいずれも花粉化石で検出された種類であり、建築材だとすれば周辺に生育していた木材を利用していただと考えられる。しかし、いずれも微細であることから、建築材かどうかについては疑問が残る。古墳時代の建築材については、周辺地域で樹種を明らかにした例がほとんど無いため、現時点では建築材の種類構成等の詳細は不明である。今後、焼失住居などから出土した明らかに建築材と判断できる試料の樹種同定を行い、資料を蓄積することが望まれる。

IV 調査の成果と課題

確認調査2年目にあたる本年は、御井戸B遺跡東部における古墳時代集落の実態把握と昨年からの継続調査となるA遺跡II A区「植物遺体層」の精査に主眼をおいた。広大な範囲にわたるこの遺跡の全体像解明には未だほど遠い感があるが、調査によって明らかになった主要事項と課題を示し、今後の調査に備えたい。

1 II A区の「植物遺体層」をめぐって

御井戸A遺跡のII A区は、縄文時代地区の中でも西側の範囲限界付近に位置し、たび重なる河川の氾濫によって全域が砂礫層に覆われていた。問題とする植物遺体層は、砂礫層上面に形成された緩やかな窪地の底に存在する浅い落込みの中に堆積していたものである。この落込みは北に向かって傾斜し、半裁状態の大型樹木が行く手を遮るように横たわっていた。大型樹木の東側には、間隙に粘土を介在させる大型礫が分布し、人工的に造られた澱みの可能性を強く示唆している。下底部を覆う粗粒砂の中には、樹枝や木葉などが自然堆積するのみで、澱みの性格を直接的に示す資料の入手には至らなかった。しかし、上面には破損したトチの内果皮700個体あまりが廃棄され、何らかの関連性を考慮させる状況にあった。

トチの実是非水溶性のサポニン・アロインを含み、食用に至るまでにいくつかの複雑な加工工程を必要とする[渡辺1975・滝沢2003a]。一連のアク抜き作業の中で水場との関わりをもつのは、採集直後の「虫殺し」、内果皮の除去に先立つ「ふやかし」、皮むき後の「水晒し」である。これらは何れも煮沸と灰あわせに先行して行なわれるもので、居住地内での作業が不可欠なわけでない。本遺跡のII C区では、未利用状態のクルミ約1,100個体からなる集積箇所が確認されており[巻町教委2003]、台地下の氾濫原が採集種実の保管場所として利用されたことが判明している。このような状況から推測すれば、上記のいずれかの工程で澱みが利用されたことも十分考えられる。そして若干の期間を置いたのちトチの皮むきが付近で行なわれ、不要となった果皮を埋没半ばの窪地に廃棄した、というプロセスも想定できるのではないかと。本遺跡の低地地区が置かれた不安定な環境を考慮すると、類似施設が周辺に多数存在することも十分予想できる。

ところで本調査区の食料残渣は、小規模ではあるが「トチ塚」と呼ぶべき種実構成をもつ。これに対し、1991年調査区の植物遺体層では、グリッド・層位ごとに数量の多寡は認めるものの、ドングリ類やクルミ・ヒシといった多様な種類から構成されていた[前山1996]。II A区の食料残渣は、単純な種実組成や、限定された分布域・堆積厚の薄さ、からみて一時点における活動内容を反映している可能性が高い。ちなみに、長岡市中道遺跡51号住居跡(中期後葉)の一角からは、火災によって炭化した完形トチが多量に出土しており、屋根裏貯蔵時の姿を留めた希少な資料と考えられている[長岡市教委1998]。前山の試算によれば、その総量は800個体前後と推定され、本地区と相似た数を示す点が興味深い。

本年度の自然科学分析をつうじ、クリの生育場所に関する一つの見解が示された。II A区植物遺体層においてクリの種実や樹枝が全く確認できないところから、近傍での生育に否定的である、というものである。一方本遺跡においては、1991年発掘区の晩期終末層準とII B区の後期中葉包含層からクリ属花粉の多産が確認されている[巻町1997・巻町教委2003]。前者は台地の掘立柱建物に隣接した氾濫原、後者は居住地内部の堆積土壌からえられたデータである。これとは対照的に、居住域から離れたII C区の堆積土(晩期中葉)ではクリ属花粉の出現率がさほど高くなく、本地区での状況とあい通じるものがある。1994年発掘区などで確認された縄文時代晩期の木柱群は、大多数がクリ材を使用する。今回同定された炭化材の中にクリが高い割合を示す点は重要な関連要素であり、間伐や剪定などの人為的な働きかけが頻繁に行なわれたことの表れ[西田1981]と理解できるであろう。古環境分析に供しうる良好な試料の入手に努めながら、晩期集落における植物利用の実態を明らかにしていきたい。

2 古墳時代前期～中期前半集落の在り方

御井戸B遺跡で実施した本年度の確認調査は、東端付近に位置する1997年発掘区の東西隣接区画を対象とした。1997年の調査で一端が明らかになった古墳時代集落と旧地形との関係を面的に把握したいと考えたからである。調査期間の絶対的な制約により、得られた情報は未だ断片的ではあるが、現時点での確認事項を以下に要約する。

本年の調査をつうじ、64箇所の柱穴状ピットを確認した。このうち建物柱穴と判断できたものは3軒分にとどまる。しかし限定された調査範囲を考慮すると、調査区内での実質的な建物軒数は、その数倍に及ぶのではないかと予想する。ピットの分布はII G区およびII E区の中央以北を疎とし、II E区南部からII F区にかけて集中していた。1997年発掘区の知見も合わせれば、御井戸B遺跡が盛期を迎える古墳時代前期～中期前半の居住空間は、低湿地に面した微高地南部に東西の帯状分布を示す可能性が高まってきたといえる。

微高地上の各所には、南部を中心に小規模な溝が掘り込まれていた。構築方位は、おおむね微高地の傾斜と同一もしくは直交する点が特徴である。II F区東部で確認された2軒の建物跡では周溝が確認されているが、その方位もまた溝とほぼ同一である。集落が立地する微高地は、南東に向かって緩やかに傾斜した地形をなす。そのため流水の影響を受けやすく、居住環境の保全には排水作業が不可欠となる。かつての沼地に接したこのエリアは、排水に適した条件を備えており、上記のような集落の広がり規制する大きな要因となったと考えるのが妥当であろう。

近年新潟県内では、沖積地に立地する古墳時代前期集落の調査例が次第に増えつつある。豊栄市正尺C・三条市吉津川・長岡市五斗田・上越市津倉田・佐渡市(旧畑野町)蛭場などでは、周溝を伴う平地住居や方形区画溝が確認され、本遺跡との共通性を示している。類似遺構は関東地方でも少なからず存在するようで〔飯島2000〕、沖積地内に所在する集落ならではの施設と見ることができる。

御井戸B遺跡からこれまで確認された6軒の建物跡は、いずれも4本柱からなる長方形プランをもつ。周溝や地床炉の有無、柱穴規模の大小によっていくつかの分類が可能であるが、長軸方向はほぼ一致しており排水や季節風に対する配慮と見ることができる。このうち2号建物跡は、周溝の全体規模や柱穴の太さからして、他とは異なる性格を想定させる遺構である。上記の特徴に基づけば、共同管理下に置かれた高床家屋の可能性が高く、東方約25mから出土した大型丸木梯子との関連性も考慮に値する。周溝東列に分布する高坏や壺の完形～準完形品については、溝の確認面上部からも出土したところから、遺構の機能が停止した後、何らかの祭祀行為に伴う捨て場として利用されたことをうかがわせる。

II F区東に隣接する南部低湿地には、1万個体以上にのぼる土師器が捨てられていた。これらは、本遺跡盛期の全期間をカバーするとともに、該期の使用器種を網羅する内容となっている。このほか、装身具類などの特殊遺物や多量のモモ種実も出土しており、日常あるいは非日常的な諸活動によって生じた廃棄物の集中的な捨て場空間として長期にわたって存続したことがうかがえる。

北部の谷周辺においても、比較的まとまった量の土器類が廃棄されていた。ただし、南部低地に較べてその量は僅少で、所属時期も古墳時代前期にほぼ限定されている。谷の南斜面からは、年代的に下降する石製模造品が小範囲から出土した。水辺で執り行われた祭祀の一端を示す資料である。谷の南部から微高地中央部にかけては、遺構の分布密度が低い。この空間には、時期の特定が困難ではあるが、倒木痕が多数分布していた。今回II G区で実施した花粉分析によれば、ハンノキ属・クリ属・ニレ属・ケヤキ属といった木本類が比較的高率をもって出現しており、古墳時代前期～中期の微高地北部には、こうした樹種から構成される疎林が形成されていたのかもしれない。

今回行った植物珪酸体分析で、古墳時代における稲作を示す明確な資料の確認には至らなかった。本遺

跡内での水田位置は未だ明らかでない。西部に広がる未調査区を含めた広範囲にわたる探査が必要である。さらには、2002年の調査に際しⅡC区の谷もしくは窪地内から出土した大量の土師器群〔巻町教委2003〕をいかに位置づけるかという問題にも関連し、集落の西への広がりを確認する作業が不可欠となる。

3 古墳時代土器の編年的位置づけと御井戸遺跡の動向

以下では、今回の調査で出土した資料の時期比定とともに、角田山麓における土器の変遷等を概観し御井戸遺跡の動向を探りたい。なお、既存の編年案との並行関係は右表のようになると思われる。

本年度の調査で最も良好な資料が出土したのは、ⅡF区の2号建物跡周溝である。残りが良く、まとめて出土した点を含め一括性が高い土器群と捉えられる。高坏や壺の形態・調整などから9期の資料と判断するが、8期まで遡る可能性もある。

ⅡE区のピット59では、これに次いでまとまった量の土器が出土した。第31図6～8の柱状屈折脚高坏や9の小型壺などは7期に対比できる。一方で甕の口縁形態や台付鉢?と推測する13など明らかに古相を呈するものが認められ、おおむね4・5期の中に収まるものと推測する。また、

本ピットに隣接する溝からの資料は、器台や甕の口縁形態から4・5期に位置づけられるものとする。溝出土の2・ピット59出土の12の口縁部形態が類似し、さらには両者にまたがる接合関係が20で確認されたことから、同時に利用された時期があったことがうかがえる。

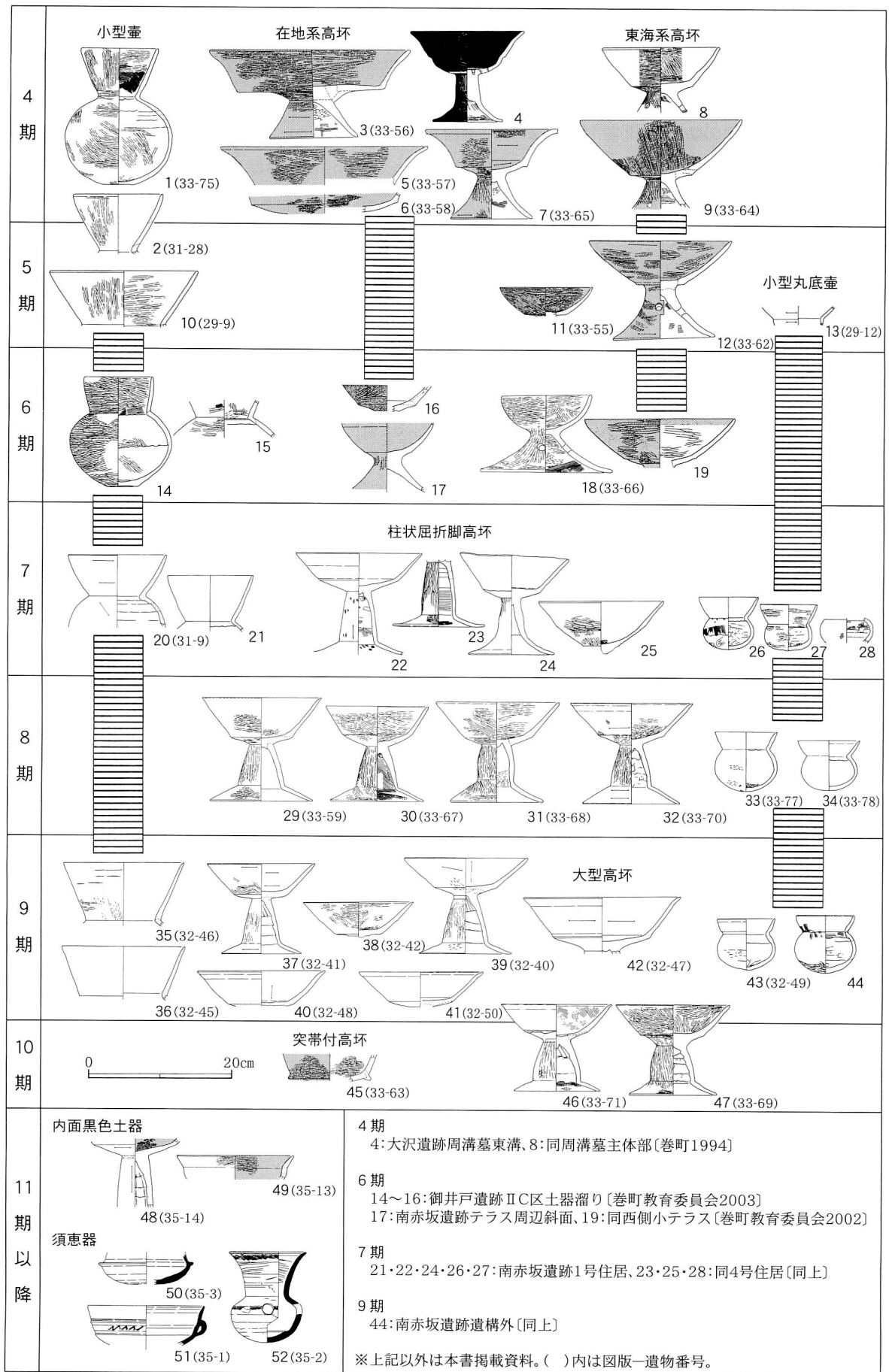
ⅡG区では時期が明確な土器を伴う遺構は認められなかったが、図示した資料はおおよそ4・5期の幅に収まるものとする。ⅡF区1号建物跡からは周溝や覆土から資料が出土しており、その東に隣接するピット57を含め、4期もしくは5期と推測する。

第43図は、古墳時代前期から中期を中心に、角田山麓の遺跡出土資料を用いて土器の変遷案を示したものである。角田山麓で遺構に伴うなど一括性が高いといえる資料は、これまでのところ、2期：大沢遺跡1号住居・K12-溝状遺構、4期：同遺跡周溝墓主体部・G14-6土坑、6期：御井戸遺跡ⅡC区土器溜り・南赤坂遺跡西側小テラス、7期：南赤坂遺跡1・4号住居、9期：御井戸遺跡2号建物跡周溝、がある。この他、南赤坂遺跡の下段テラス出土土器は6期を主体とするが、同テラスの建物想定範囲内からは8・9期の資料も認められた〔巻町教委2002〕。また、大沢遺跡の周溝墓の溝から出土した土器の中には、4期に位置づけ可能なものも含まれる。御井戸遺跡の1997年発掘区では大量の土器が出土したが、遺構に伴う資料はほとんどなく、大半が南部低湿地に時間幅をもって捨てられたものである。このため前後の基準資料との形態や調整の比較、他地域の編年案との比較によって個別に変遷案に位置づけた。

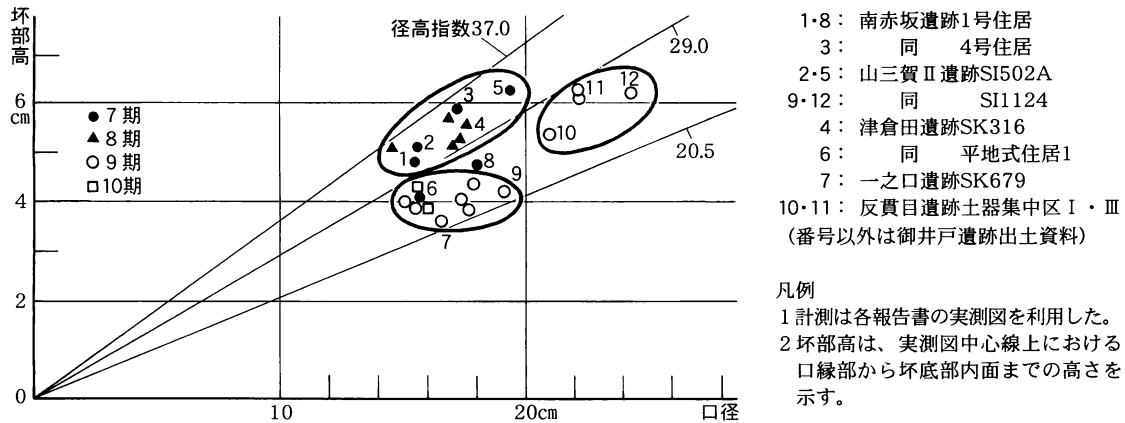
小型壺に関しては、新しくなるにつれて胴部が倒卵形から球状へと変化し、頸部径が大きくなる傾向がある。また、調整も次第に粗くなり、9期では口縁部内外面ともヘラミガキは部分的に確認できるのみで、35は口縁外面に粘土紐接合痕やヘラケズリ痕を残す。小型丸底壺については、新しくなるほど口縁部が短くなり、調整は粗くなる傾向がうかがえる。なお、13はB・14土坑（第29図）から出土したものである。共伴した甕の口縁部の外反が弱い点を重視し5期に位置づけたが、6期まで下る可能性もある。また、東海系の高坏は4・5期に盛行するが、柱状屈折脚高坏が出現・盛行する7期には確認できなくなる。

本書	南赤坂遺跡 [巻町教委2002]	緒立遺跡 春日 [1998]	上越編年 川村 [2000]	滝沢 [2000]	新潟シンボ [1993]	漆町編年 田嶋 [1986]
1期				1期	1期	1群
2期				2期(古)	2期	2群
				2期(新)	3期	(+) 3群
3期				3期	4期	4群
4期		1期	1段階	4期	5期	5群
		2期	2段階		6期	6群
5期	古墳Ⅰ期	3期	3段階		7期	7群
6期	古墳Ⅱ期		4段階		8期	8群
7期	古墳Ⅲ期		5段階		9期	9群
8期	古墳Ⅳ期	陶邑編年 [田辺1981]	6段階		10期	10群
			7段階		11期	11群
9期		TK73	8段階			12群
10期		TK216~TK208	9・10段階			13群
11期		TK23~TK47	11・12段階			14群
12期		MT15~TK10	13・14段階			15群

第11表 編年対比表



第43図 角田山麓における古墳時代前・中期を中心とした土器の変遷



第44図 新潟県内の主な柱状屈折脚高坏の口径・坏部高

以上の変遷案をもとに、ⅡF区2号建物跡溝出土の高坏の特徴を記すと、①坏部が浅くなり外傾度を増す②口縁端部が外へ短く屈曲・外反するものが多くなる、③脚根部の浅いものが多くなる、④全体的に小柄になる一方で大型の高坏が出現する、⑤全体的にヘラミガキ調整が省略または粗くなる、⑥脚部内面に粘土紐接合痕を明瞭に残すものが多くなる、⑦脚部と坏部の接合では円板充填法〔寺沢1980〕が減少し、坏底部内面が平坦なものが多くなる、といった点を指摘し得る。

第44図は、新潟県内における7期から9期の主な柱状屈折脚高坏を対象として、口径と坏部高を示したものである。これをみると、7・8期の資料と9・10期の資料でそれぞれまとまりを見いだすことが可能で、さらに9期の資料は口径15～19cm前後の小型品と21～24cm前後の大型品に分けられる。また、7・8期の資料がおおむね径高指数29～37なのに対し、9・10期は20～29に包括される。

これまでに御井戸遺跡から出土した該期の土器をみると、その量が増加するのは4期からと推測できる。包含層からの資料が大半であり時期比定が難しいものも多いが、それ以前に遡る可能性がある土器はごく少数と考える。以上のことから、4期が御井戸遺跡における一つの画期にあたるものと考えられる。4期は大沢遺跡が廃絶する時期にもあたり、両者の関連性が示唆される。また、山谷古墳下層遺跡では1・2期を中心とした資料が出土しているが、その時期は御井戸遺跡で資料が少ない時期でもあり注目される。しかしながら、両遺跡の土器量は、御井戸遺跡での4期以降と較べ明らかに少ない。なお、角田山麓外ではあるが、信濃川左岸に位置する緒立遺跡でも弥生時代後期の断絶後再び集落を形成する時期が4期と考えられており、広範囲にわたりこの時期大きな変化のあったことが推測される。

その後ⅡF区2号建物跡周溝の資料も含め、8・9期までは比較的安定した遺物量が認められる。越後平野では、古墳の断絶に呼応するかのように7期に衰退・断絶する遺跡が大半を占めるが、御井戸遺跡ではそのような状況は認められず、例外的なあり方を示す。御井戸遺跡で衰退が想定される時期は10期以降で、ここも一つの大きな画期に位置づけ得る。なお、内面黒色土器や須恵器の少なさは、急激な衰退を示唆する。

土器の分布について見れば、1997年発掘区の南部低地が他と較べ圧倒的な遺物量を誇る。この場所は廃棄として利用されていたが、出土遺物の量からは4期から8期までが中心時期と捉えられる。また、全体の量は少ないものの、弥生土器の分布もこれとおおむね一致している。

一方、遺跡の衰退後と位置づけられる古墳時代の須恵器は、南部低地から微高地上へと廃棄空間の中心が移っており、古代・中世の状況と類似する。以上のことは、遺跡の衰退と空間利用の変化との密接な関連性を示すとともに、その衰退が弥生時代以来の伝統を変化させるほどの大きな要因によるものであったことを示唆する。二つの画期をもたらした背景、移住の問題や遺跡間の関係などは今後の検討課題としたい。

文 献

- 飯島義雄 2000 「古墳時代前期集落の研究における排水溝の意義」
『一所懸命』 佐藤弘史君を偲ぶ会
- 上原甲子郎 1956 「弥彦角田山周辺古文化遺跡概観」
『弥彦角田山周辺総合調査報告書』 新潟県教育委員会
- 小野 昭・前山精明・小林巖雄・小池裕子・藤田英忠・島村忠淳
1988 「巻町豊原遺跡の調査」
『巻町史研究』IV 巻町
- 春日真実 1998 「弥生時代末～古墳時代の遺物」
『黒崎町史 資料編1 原始・古代・中世』 黒崎町
- 川村浩司 2000 「上越市の古墳時代の土器様相－関川右岸下流域を中心に－」
『上越市史研究』第5号 上越市
- 近藤練三 1988 「植物珪酸体（Opal Phytolith）からみた土壌と年代」
『ペトロジスト』32
- 近藤練三・佐瀬 隆 1986 「植物珪酸体分析、その特性と応用」
『第四紀研究』25 日本第四紀学会
- 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団ほか
2000 『正尺C遺跡現地説明会』
- 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会
1994 『一之口遺跡東地区』
- 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会
2004 『反貫目遺跡』
- 上越市教育委員会 1999 『津倉田遺跡』
- 鈴木三男 2002 『日本人と木の文化』 八坂書房
- 滝沢規朗 2000 「新潟県における弥生後期の土器編年」
『東日本弥生時代後期の土器編年〔第1分冊〕』 東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会
- 滝沢規朗 2003a 「岩船郡朝日村のトチ餅作り－元屋敷遺跡のトチの加工施設の理解に向けて－」
『新潟考古』第14号 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2003b 「弥生時代末～古墳時代前期の（仮）北陸北東部系装飾器台について」
『新潟県考古学会2003年度第2回研究発表会資料』
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡出土土器の編年的考察」
『漆町遺跡I』 石川県立埋蔵文化財センター
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 田村浩司 2004 「三条市吉津川遺跡発掘調査速報」
『新潟県考古学会連絡紙』第59号 新潟県考古学会
- 辻本崇夫 1985 「倒木痕の再検討」
『館町遺跡I』 八王子市館町遺跡調査団
- 千木良雅弘 1995 『風化と崩壊』 近未来社

- 鶴間正昭 2000 「関東における古墳時代の須恵器」
『須恵器生産の出現から消滅－第1回東海土器研究会資料第1分冊』東海土器研究会
- 寺沢 薫 1980 「出土土器」
『六条山遺跡』 奈良県教育委員会
- 長岡市教育委員会 1998 『中道遺跡』
新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
1989 『山三賀Ⅱ遺跡』
- 新潟大学考古学研究室
1982 『大沢遺跡・Ⅱ』
- 西田正規 1981 「縄文時代の人間－植物関係」
『国立民族学博物館研究報告』6巻2号 国立民族学博物館
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会編
1993 『東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会
- バリノサーヴェイ株式会社
2003 「自然科学分析」 『御井戸遺跡Ⅰ－2002年度確認調査の概要－』
- 前山精明 1996 「縄文時代晩期後葉集落の経済基盤」
『考古学と遺跡の保護』 甘粕健先生退官記念論集刊行会
- 前山精明・古越永子 1999 「木工技術」
『新潟県の考古学』 高志書院
- 前山精明・山口栄一 1986 「福井南部における遺跡分布と出土・採集遺物」
『巻町史研究』第2号 巻町
- 巻 町 1994 『巻町史 資料編1 考古』
- 巻 町 1997 『巻町史 通史編 上巻』
- 巻町教育委員会 1990 『大沢遺跡－縄文時代中期前葉を主とする集落跡の調査概要－』
- 巻町教育委員会 2002 『南赤坂遺跡－縄文時代前期～中期・古墳時代前期を主とする集落跡の調査－』
- 巻町教育委員会 2003 『御井戸遺跡Ⅰ－2002年確認調査の概要－』
巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室
1993 『越後山谷古墳』
- 三村昌史・高橋正道 2003 「古植生とその変遷の背景にある人為的干渉－新潟県新発田市升潟周辺の例－」
『日本第四紀学会講演要旨集』33 日本第四紀学会
- 宮脇 昭 編著 1985 『日本植生誌 中部』 至文堂
- 湯沢町教育委員会 1976 『伝・泉福寺遺跡』
- 和島村教育委員会 1998 『松ノ脇遺跡』
- 渡辺 誠 1975 『縄文時代の植物食』 雄山閣
- 渡辺 誠 1985 「杓子形土製品の研究」
『日高見国－菊池敬治郎学兄還暦記念論集－』

報告書抄録

ふりがな	おいどいせき
書名	御井戸遺跡Ⅱ－2003年度確認調査の概要－
シリーズ名	
編著者名	前山精明・相田泰臣
編集機関	巻町教育委員会
所在地	〒953-0041 新潟県西蒲原郡巻町大字巻甲2690-1 TEL 0256-72-3131
発行年月日	2004年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
御井戸A遺跡	新潟県西蒲原郡巻町大字福井字堂の腰2296番地	39	24	37° 45′ 19″	138° 50′ 13″	20030901～ 20030910	17㎡	保存・整備を視野に入れた確認調査
御井戸B遺跡	新潟県西蒲原郡巻町大字福井字堰場269-1番地ほか	39	44	37° 45′ 02″	138° 50′ 33″	20030716～ 20031215	435㎡	保存・整備を視野に入れた確認調査

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御井戸A遺跡	集落跡	縄文時代晩期	楕円形落込み	トチ内果皮	トチの内果皮約700個体が堆積
御井戸B遺跡	集落跡	古墳時代前期	建物跡 溝	土師器 続縄文土器 管玉	沖積地に立地する古墳時代前・中期集落の一部を把握

御井戸遺跡Ⅱ — 2003年度確認調査の概要 —

平成16年3月31日発行

発行 巻町教育委員会
〒953-0041 新潟県西蒲原郡巻町大字巻甲2690-1
TEL 0256-72-3131

印刷 北洋印刷株式会社
〒953-0054 新潟県西蒲原郡巻町漆山企業団地
TEL 0256-72-2345